

# 館山市稲村城跡調査報告書 Ⅱ



2010

館山市教育委員会





カラー図版1 稲村城跡航空写真





カラー図版2 稲村城跡遠景

## 序

館山市には安房地域の中心域としての長い歴史があるだけでなく、市内の各地域にもさまざまな特徴的な歴史があります。その歴史を解明するための資料を調査し、その資料と情報を後世に残していくこと、さらにその情報を市民の皆様方に提供していく教育普及活動を行うことは、教育委員会の重要な役割であります。文化財の調査報告書刊行という事業もその一環として行われます。しかし、こうした調査・普及・保全といった事業は教育委員会のみならず、歴史文化に関心を持つ研究者や市民団体、地域情報をもつ市民の皆様方の連携で成り立っています。

館山市内に所在する稲村城跡は、館山市がまちづくりのテーマのひとつとしている戦国武将里見氏が、安房支配の拠点として本城にした重要な戦国城郭であり、館山市の戦国時代を象徴する史跡といえるものです。館山市・館山市教育委員会では、こうした里見氏の歴史遺産をまちづくりに活かすとともに、文化財としての稲村城跡を学術的に調査研究することによって、歴史資料としての意義を明らかにし、地域史研究の深化とまちづくりの基礎資料として正確な情報の提供に努めていくことが必要だと考えております。

稲村城跡や里見氏についての研究は、関心を寄せる多くの研究者や多くの市民の皆様方の努力で近年大いに進展しているところです。館山市教育委員会でも平成18・19年度に稲村城跡の測量調査と発掘調査を実施し報告書を刊行しました。今年度も稲村城跡の具体像をさらに明らかにするため調査事業を実施し、多くの方々のご協力のもと広域的な視点での調査が行われました。

このたびその調査の成果がまとまり、ここに報告書を刊行する運びとなりました。本書が学術資料として活用されることはもとより、稲村城跡の保存と活用のために、第1回の報告書とともに市民の皆様方に利用されることを切望いたします。

最後になりますが、本事業の実施にあたりましては、資料調査や聞き取り調査、現地踏査などで地元関係者の皆様方をはじめ多くの資料所蔵者の方々、準備から報告書刊行までご指導をいただきました文化庁、千葉県教育委員会、稲村城跡調査検討委員会の方々から多大なるご協力をいただきました。心より厚く御礼申し上げます。

平成22年3月25日

館山市教育委員会  
教育長 石井 達郎



## 凡 例

1. 本書は、館山市稲に所在する稲村城跡確認調査事業の第2回調査概要報告書である。
2. 本事業は、館山市が平成21年度事業として、国庫補助（事業費105万円、補助率50%）及び県費補助（補助率12.5%）を受けて実施したものである。
3. 本事業を円滑に進めるため、館山市稲村城跡調査検討委員会を組織し、同委員会の指導と助言のもとに、館山市教育委員会が実施した。

### 稲村城跡調査検討委員会

- 委員長 河原純之（元文化庁文化財保護部記念物課主任文化財調査官）  
副委員長 梶山林繼（國學院大學神道文化学部教授）  
委員 愛沢伸雄（NPO法人安房文化遺産フォーラム理事長）  
委員 天野 努（安房地域文化史研究会会長）  
委員 石井達郎（館山市教育委員会教育長）  
委員 佐藤博信（千葉大学文学部教授）  
委員 滝川恒昭（千葉県立船橋二和高等学校教諭、千葉城郭研究会）  
委員 遠山成一（千葉県立四街道高等学校教諭、千葉城郭研究会）  
委員 早川正司（千葉県文化財保護協会理事、安房地域文化史研究会）  
委員 脇田安保（稲共有地代表者、稲区長、稲村城跡利活用委員会委員長）

### 館山市教育委員会事務局

次 長 忍足光正 生涯学習課長 四ノ宮朗 同 主任学芸員 岡田晃司

4. 調査に当たっては、稲村城跡詳細踏査は遠山成一氏・脇田安保氏（館山市稲村城跡調査検討委員会委員）・岡田晃司が実施した。城跡踏査は遠山成一氏（館山市稲村城跡調査検討委員会委員）・岡田晃司が実施した。やぐら調査は早川正司氏（館山市稲村城跡調査検討委員会委員）・岡田晃司が実施した。前期里見氏関係文献資料の調査は天野努氏・佐藤博信氏・滝川恒昭氏（館山市稲村城跡調査検討委員会委員）・岡田晃司が実施した。ご協力いただいた調査員の皆様方に、記して、深く感謝を表します。
5. 本書は、館山市稲村城跡調査検討委員会・館山市教育委員会事務局が分担して執筆した。
6. 調査の実施及び本書をまとめるにあたり、多くの方々及び機関・団体にご指導・ご協力をいただいた。記して、深く感謝を表します（順不同）。

飯田勇・飯田和雄・今宮靖雅・小高春雄・小野正敏・景山信夫・加藤昭・酒井昌義・里見菊雄・里見繁美・里見武男・里見哲夫・須田恭光・高梨晃一・高梨哲朗・武内輝雄・田中直司・田中美和・友野祐一・鳥海正幸・中嶋講二・野中正・正木文子・正木茂雄・正木芳男・松岡進・松本勝・御子神勲・御子神一郎・三坂勝哉・山口隆保・山口武史・山口登・正義会教団・竹原区・龍喜寺・群馬大学付属図書館・国文学研究資料館・静嘉堂文庫・館山市立博物館・筑波大学附属図書館・天理大学附属天理図書館・東京国立博物館・土佐山内家宝物資料館・早稲田大学図書館・文化庁・千葉県教育庁教育振興部文化財課



## 本文目次

I	はじめに (岡田晃司)	
1	調査の経緯	9
2	里見氏について	10
3	稲村城跡の立地	13
4	稲村城跡の記録	15
5	前期里見氏の研究	19
II	遺構・遺物	
1	稲村城跡の構造と遺構 (岡田晃司)	22
2	過去の発掘調査の成果 (岡田晃司)	30
3	稲村城跡内の石造物とやぐら (早川正司)	34
III	前期里見氏調査	
1	史料からみた稲村城 (滝川恒昭)	39
2	前期里見氏の伝承 (滝川恒昭)	46
3	寺社の伝承 (岡田晃司)	49
IV	総括	
1	稲村城跡周辺城跡群 (遠山成一)	51
2	里見氏城郭群のなかの稲村城跡 (遠山成一)	62
3	稲村城以降の里見氏当主の城 (遠山成一)	64
4	稲村城跡の範囲と年代 (天野努)	69
5	稲村城跡と里見氏 (天野努)	71



## 挿図目次

第1図	里見氏略系図	10	第2図	東国の城跡と古戦場	12
第3図	稲村城跡周辺の古代・中世遺跡と地名	14			
第4図	稲村城跡概念図	23・24			
第5図	稲村城跡主郭部及び中郭部縄張図	25・26			
第6図	稲村城跡外郭部西尾根最高地点（Ⅵ郭）縄張図	27			
第7図	稲村城跡発掘調査トレンチ配置図	31			
第8図	昭和58年度主郭部発掘トレンチ配置図	31			
第9図	昭和58年度主郭部発掘トレンチ平面図及び土層断面図	32			
第10図	平成19年度中郭部発掘トレンチ配置図	33			
第11図	平成19年度発掘C地点トレンチ平面図及び土層断面図	33			
第12図	稲村城跡内やぐら群A群 五輪様遺物配置図	36			
第13図	山本城跡縄張図	52	第14図	大井城跡縄張図	52
第15図	南条城跡縄張図	58	第16図	洲宮城跡縄張図	58
第17図	確認調査城跡分布図	62	第18図	滝田城跡縄張図	66
第19図	宮本城跡縄張図	66	第20図	久留里城跡概念図	67
第21図	佐貫城跡概念図	67			

## 写真目次

表紙	稲村城跡全景	
カラー図版1	稲村城跡航空写真	3
カラー図版2	稲村城跡遠景	4
写真1	稲村城跡内やぐら群A群 五輪様外観	36
写真2	稲村城跡内やぐら群A群 五輪様内部	36
写真3	鎌倉大草紙（天理大学附属天理図書館蔵）	40
写真4	北条五代記（筑波大学付属図書館蔵）	44
写真5	清和源氏里見系図	46
写真6	源氏里見系図	47
写真7	里見義実肖像画	48
写真8	武内家来歴	50
図版1	稲村城跡主郭・稲村城跡主郭土塁・稲村城跡虎口	73
図版2	稲村城跡堀切G・稲村城跡堀切F・稲村城跡堀切H及び土橋	74
図版3	東側登城路と尾根(2)・尾根(4)地点L・稲村城跡東側切岸	75
図版4	山本城跡・大井城跡・大井城跡腰曲輪調査	76
図版5	明星山城跡・千田城跡・南条城跡	77
図版6	神余城跡・洲宮城跡・船形城跡	78
裏表紙	錦絵「大日本六十余州之内安房／里見の姫君伏姫」（館山市立博物館蔵）	



# I. はじめに

## 1 調査の経緯

館山市教育委員会では、館山市稲に所在する稲村城跡について重要性の高い遺跡としてその保存活用を検討するため、平成18・19年度の2か年にわたり、国庫補助及び県費補助を受けて稲村城跡確認調査事業を実施した。調査にあたっては館山市稲村城跡調査検討委員会を組織し、その指導と助言のもとに測量調査及び発掘調査を行い、その成果は調査概要報告書を作成して報告されている。この調査によって稲村城跡が存在した時期を示す陶磁器などの遺物を確認することはできなかった。またそれ以前に実施された発掘調査によっても遺物の確認はされていないが、城郭としての造成工事が施されている事実は2回の発掘調査によって報告されている通りであり、城郭の存在を証することはできたが、稲村城跡が城郭として機能していた時期はいつなのか、また城郭の造成主が誰であるのかを証することが課題として残されていた。

つまり、稲村城は里見義実以降の15世紀後半から1533年までの前期里見氏と称される里見家嫡流の居城として、また1533・34年に展開した天文の内乱の舞台として伝承されてきてはいるものの、文献や発掘調査によって客観的に前期里見氏の時代に存在した城跡であることを証明することはできていなかった。

そこで稲村城跡の機能した時期や城主について多角的に検討するため、平成21年度においても国庫補助及び県費補助を受けて稲村城跡確認調査事業を継続して実施することとしたものであり、館山市稲村城跡調査検討委員会を継続してその指導と助言のもとに第2回調査事業が実施された。調査は稲村城跡主郭部の詳細踏査、稲村城跡の近隣に所在する中小の城跡踏査、前期里見氏に関する文献調査と伝承調査である。調査内容を次にあげる。

### 城跡踏査

12月5日～1月28日 南条城跡・神余城跡・大井城跡・明星山城跡・山本城跡・洲宮城跡・香要害山城跡・船形城跡・千田城跡・稲村城跡

### やぐら調査

12月29日 稲村城跡内やぐら群A群 五輪様

### 前期里見氏関係資料調査

7月29日～8月17日 竹原日枝神社・旧神職今宮家、鶴谷八幡宮神職酒井家・同命婦武内家、前期里見氏家臣御子神家・同田中家、龍喜寺

8月13日～1月29日 群馬県里見武男家・里見哲夫家、東京都里見菊雄家

### 文献調査

12月25日～2月12日 群馬大学附属図書館、東京国立博物館、静嘉堂文庫、早稲田大学図書館、国文学研究資料館、天理大学附属天理図書館、土佐山内家宝物資料館、筑波大学附属図書館

(岡田晃司)



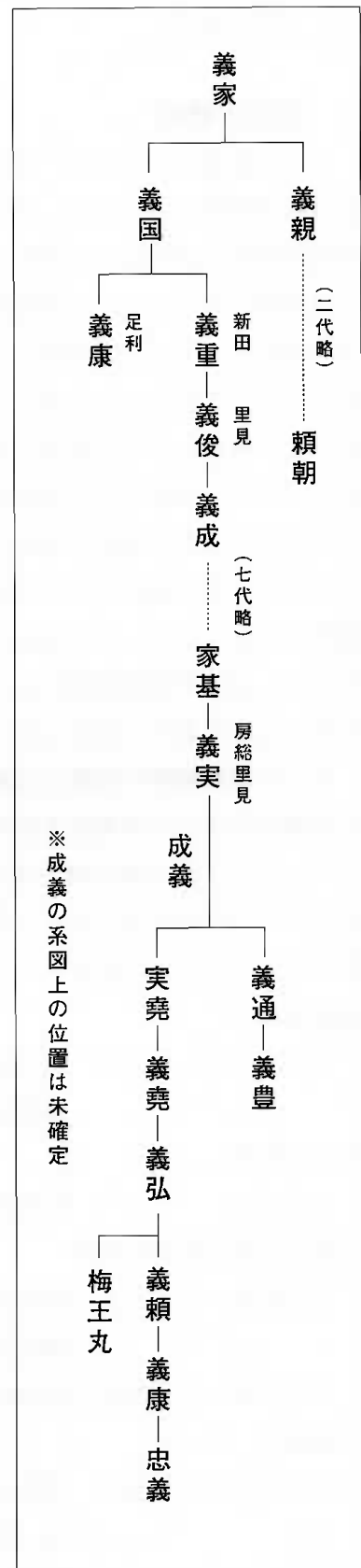
## 2 里見氏について

房総里見氏最後の安房国主であった里見忠義は、安房国から伯耆国倉吉（倉吉市）へ配流に等しい移封処置を受けた直後の元和2（1616）年、伯耆国北条八幡宮の造営を行い、その際の棟札に「清和天皇朝臣八幡太郎箕裘広其苗裔」と、自らが八幡太郎義家の業績を受け継ぎ子孫へと広めていく立場であることを記した。清和源氏の末裔としての自負と責任を謳い上げた部分であり、「自身の再起の決意を込めた願文」と評価されている(1)。

里見氏は上野国里見郷（高崎市）を名字の地とし、源義家の孫義重を祖とする新田一族から平安時代末に成立した。新田義重の長子義俊が里見を名乗り、その子で里見冠者・伊賀守と称した里見義成が頼朝の御家人として成長すると、その一族は上野国で新田郡や八幡荘に広がり、やがて越後や美濃・長門などにも所領を獲得し広がっていった。南北朝期になると奥州探題の一員として出羽国へ移住した一族もいたようである。

のちの房総里見氏へと繋がる上野里見氏や越後の里見氏は、南北朝の動乱の中では一貫して新田義貞に従い南朝方として行動した。新田一族の滅亡後は一時歴史の表舞台から消えるが、鎌倉府が設置されて足利尊氏の孫鎌倉公方足利氏満が室町將軍家と対立すると、里見氏は氏満に仕えるようになる。その後鎌倉公方持氏の側近となった里見家基は永享の乱（1438年）で持氏とともに討死している。そしてその次代には足利氏の御一門として、東国における戦国の幕開けとなった享徳の大乱（1454～1483年）を房総で迎えることになる。

現在の研究段階における房総里見氏の成立過程は次のように理解されている。里見氏の安房への入部は鎌倉公方の指示によるものと考えられており、関東を二分した享徳の大乱が始まる15世紀中葉のことである。鎌倉公方足利氏と関東管領上杉氏の対立抗争のなかで、上総に入部した武田信長とともに安房において足利勢力を結集し、房総における足利氏の基盤を確保する役割を与えられた。そして上杉氏の拠点であった白浜（南房総市）を制圧し、やがて安房の中心域である館山平野で稲村城（館山市）を取り立て安房支配の拠点としたのが家基の子里見義実であったとされているのである。その義実は「房州太守」と認識されるに至っている。



第1図 里見氏略系図

鎌倉公方持氏の死後8年を経て、文安4年(1447)に持氏の子成氏が鎌倉公方を継承するが、その時里見義実が成氏の側近として鎌倉へ出仕した。これについて『鎌倉大草紙』は、鎌倉公方に就任した成氏のもとへ旧臣たちが集まってくる記事のなかで、「故持氏の御供に討死しける里見刑部少輔家基が子左馬頭義実を房州より打て出、上総半国を押領し鎌倉へ参」というように、義実の紹介を記事のトップにしている。房総里見氏はこの義実を初代とし、義豊のときに当主の交代が起こるもの(天文の内乱)、その後慶長期の忠義まで170年余にわたり安房を支配下に置き、戦国後期には上総国にまで版図を拡大することになる。

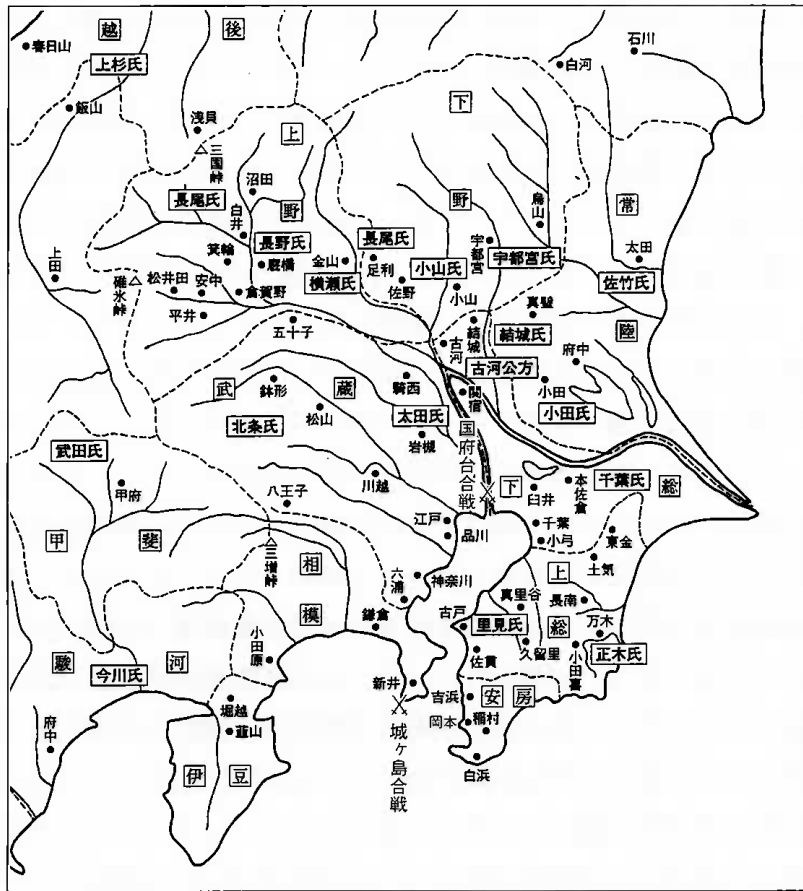
鎌倉公方は享徳の大乱が始まった翌康正元(1455)年に下総国古河(古河市)へ御所を移したが、そこは内陸河川交通の要衝である。一方、関東の南に僻在するようにみえる安房国だが、そこは東京湾の入口であり、東京湾奥からの河川交通に頼る国々にとってはきわめて重要な海上交通の要所に位置している。その立地は里見氏に海上交通の高い掌握能力を握らせることになった。水軍力である。足利氏が里見氏に期待した能力でもあっただろう。文明3(1471)年に古河を落ちた足利成氏を常陸川水系の下総本佐倉へまで長駆救援に出向いたのも、水軍の機動力があったからにほかならない。16世紀に入って、小田原北条氏が三浦・江戸・川越と南関東を制圧して上杉氏にとって代わりながら、下総の千葉氏をも影響下に置くようになるなか、東京湾で対峙した里見氏が天正5(1577)年まで対抗しえたのもその力によるところが大きい。

里見氏は義実以降も足利氏に属して古河公方家を支えていった。永正5(1508)年に安房国総社である鶴谷八幡宮(館山市)の修造をおこなった里見義通は、「副帥」という肩書きで古河公方足利政氏の武運長久を祈っている。公方の代官として安房国を統治する立場であることを表明したものであり、この頃に領国支配が安房一国に及んだと見られている。また義通は関東足利氏の祈願所である下野鑱阿寺(足利市)に再三祈祷を命じているが、足利氏による東国支配体制の中に位置づけられていることを象徴的に示したものと評価されている(2)。次代の里見義豊も「副帥」を自称し「房州賢使君」と評されたが、内部分裂によって天文3(1534)年に滅亡し、庶家の里見義堯に取って代わられると、前期里見氏の歴史は消し去られ大きくゆがめられてしまうことになる。

この義堯が上総へと領国支配を広げていくことになるが、上総への進出は房総進出を進めていた北条氏との対立となった。その攻防は東京湾の制海権の掌握が大きく左右するものでもあった。義堯は長い海岸線と多くの谷と丘陵からなる上総国を広域的に支配するために、小櫃川流域の久留里城(君津市)に入り、子息義弘は海岸に近い佐貫城(富津市)へ、内房の水軍を管轄する正木氏を海辺の金谷城・百首城(富津市)へ、夷隅川流域の小田喜城(大多喜町)へ同族の正木時茂、太平洋岸の勝浦城(勝浦市)へ正木時忠を配置した。後に内房の押さえとして義弘の息義頼が海辺の岡本城(南房総市)へ配置されているが、内房には大小の海城・湊城が数多く取り立てられた。こうして主要城郭は北条氏との前線に築かれていき、稲村城はその役割を閉じていくことになった。

北条氏は天文21(1552)年に古河公方を強引に交代させ、北条氏による東国支配は古河公方家





第2図 東国の城跡と古戦場

の支配体制のなかに自らを関東管領として位置づけて行われるようになった。しかし、上杉謙信が永禄4(1561)年に鎌倉鶴岡八幡宮で正式に関東管領に就任し北条氏に対抗する公方を擁立すると、義堯は謙信を始め北関東の反北条勢力と連携して北条氏に対応するようになっていった。「副帥」を自称した里見義弘も反北条氏としての公方推戴を表明し、上杉謙信の対応が変わった元亀3(1572)年には、「副將軍」と称して独自に公方を推戴し政治的な意思を明確に示したこともあった。

しかし、里見氏の行動は常に反北条勢力との連携のなかにあり、特に武蔵岩付(さいたま市)で反北条氏の最前線にいた太田氏は、謙信の越山に合わせて里見氏と行動を合せることが多かった。永禄7(1564)年の国府台合戦はその代表的な戦いであり、その後も市川・船橋などの東京湾奥の経済拠点をめぐって里見氏の侵攻が繰り返された。しかし天正2(1574)年に反北条勢力の牙城だった下総関宿城(野田市)が謙信の支援の甲斐もなく落城すると、房総への北条氏の攻勢が増していった。天正5年に上総の反北条勢力が北条氏の軍門に下ると、里見義弘は北条氏の和睦要請を受け入れ、40年に及ぶ北条氏との抗争に終止符が打たれることになった。北条氏によって古河を追われた公方の遺児を保護して反北条勢力のなかで主要な役割を果たしてきた里見氏であったが、以降足利氏の存在意義は失われることになった。

里見義頼の代には平和外交を展開し、領国支配を強化して流通政策に力を入れるようになる。北条氏との抗争がなくなった東京湾は平和の海となったことから、領国内の流通拠点となる湊を館山につくり、里見義康の代には岡本城から館山城へと移転した。天正18(1590)年の豊臣秀吉による小田原攻め以降は館山に城下町をつくり、秀吉からは羽柴の姓を賜り、従四位下侍従安房守に任じられて天下人の時代を生きていった。将軍徳川秀忠から偏諱を与えられた里見忠義は幕閣大久保忠隣の縁戚となり、徳川家康の長女亀姫の人脈に連なって近世大名としての生き残りをかけたが、慶長19(1614)年の大坂冬の陣を目前にして伯耆国倉吉への移封を命じられ、その8年後に忠義が没して継嗣なしとされて里見氏は滅びることになる。外様大名取り潰しの一環であるが、里見氏が基盤にした安房国は江戸への海路を押さえる位置にあり、軍事的にも経済的にも幕府を危惧させる立地だったのである。

里見氏の移封後は、館山城がある館山湾と岡本城がある富浦湾の沿岸は幕府御船手の旗本たちの所領となった。水軍の解体が図られたのであろうか。里見水軍の力の大きさは、北条氏滅亡後に関東を拝領した徳川家康が、上総佐貫に無双の弓手といわれた内藤家長を配し、大多喜には家康に過ぎたものと評された本多忠勝、久留里に四天王榊原康政の長男大須賀忠政、勝浦に植村泰忠を置くことで、軍事的に安房里見氏を牽制する体制を作ったことにも現れている。里見氏が伯耆国へ移封されたのも、大坂の陣を直前に控えた徳川家が里見氏の軍事力に対して不安を抱いていたからに他ならない。

こうして滅んだ里見氏は、後に『南総里見八犬伝』によって世に甦ることになった。作者曲亭馬琴は『里見軍記』や『里見九代記』などの軍記物と『房総志料』という地誌を頼りに情報を得たが、あえて人名地名を変え、八犬士についても実在したところでその人物を描くものではないとし、史実とはかけ離れた「架空の言」だと述べている。しかし作品そのものの人気に加え、歌舞伎での上演やダイジェスト版・錦絵の出版などによって人気に拍車がかかり、世に八犬伝が知られ里見氏が知られていくことになった。史実と物語を混同する向きはいまだに多い。八犬伝は里見義実の時代に設定されているが、史実の前期里見氏についてはそのほとんどがいまだ明らかにされていない。前期里見氏に関する資料としてわずかに残された稲村城跡の解明には、史実と物語を歴然と分ける役割も求められている。

註

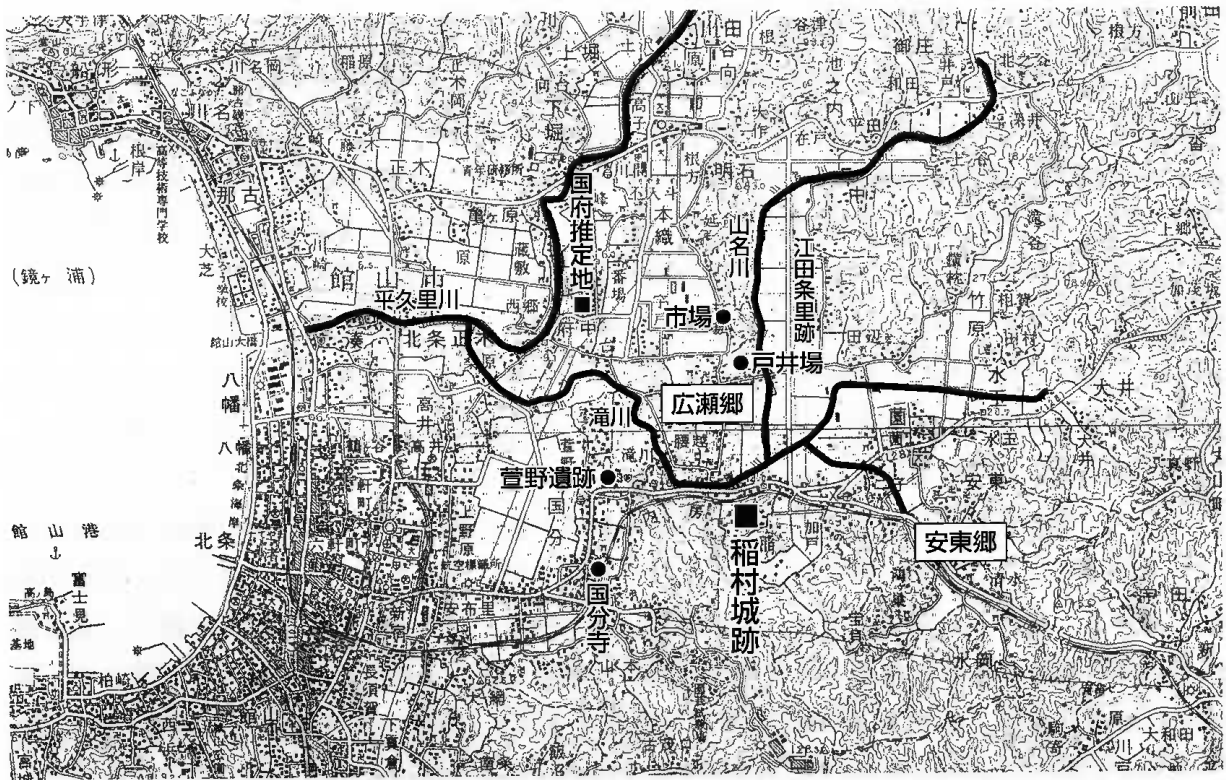
- (1) 滝川恒昭「願文に込めた再起への決意」(『千葉県の歴史 資料編中世5』千葉県、2005年)
- (2) 佐藤博信「里見義通試論—前期里見氏研究の深化のために—」(『千葉史学』第30号、1997年)

(岡田晃司)

### 3 稲村城跡の立地

稲村城跡は館山平野の中央部南辺の丘陵端に所在する。その北側には延命寺丘陵が南下しており、平野中央部が狭隘となる位置である。延命寺丘陵の東側では、館山市大井や水岡などの谷津からの水流が城跡の北麓で合流して滝川となって西流し、その滝川には南房総市山名の深い谷からの山名川も稲村城跡に向かって南進してくる。それらの流域に広がる平野部には、古





第3図 稲村城跡周辺の古代・中世遺跡と地名

代の条里制水田の痕跡が圃場整備のなされるまでは数多く残されていた。江田条里跡では発掘調査によって条里制遺構が確認されている。

延命寺丘陵の西側には峯岡山系から南房総市平群地区を経て館山湾の中央部へ注ぐ平久里川が南流し、同川が西進する平野中央には安房国府推定地である府中がある。また湊川を挟んだ対岸には萱野遺跡があり、鎌倉時代後期の北条得宗家に関わる施設があったことが発掘調査によって確認されている(1)。いずれも海上交通との結節点となる湊が至近にあったと考えられている。館山平野では元禄16(1703)年の大地震で5m前後の隆起があったことが知られており、地形を大きく変えたという記録は数多く残されている。地震直前までの海岸線は旧国道127号線が乗る海岸砂丘の海側にあたり、現汀線から内陸へ約400mの位置になる。明応7(1498)年の大地震での被害は不明だが、永正年間(1504～1521)前後に行われた寺社の再建記録は多く、地震からの復興と考えられる。隆起に関する記録はないが、地形変化も無視することはできないだろう。国府湊に比定される平久里川河口は国府推定地や萱野遺跡へ近いばかりか、平久里川や湊川によってつながっていたことが想定される所以である。

得宗家と関連する萱野遺跡の施設は律宗系の寺院と推定されているが、館山平野の東部に位置した安東郷が応永30(1423)年以前から律宗の鎌倉極楽寺宝塔院領であったことが確認されることから、忍性教団関連施設の可能性が指摘されている(2)。湊を拠点とする忍性教団の経済活動が萱野遺跡で行われていたと考えることができる。また稲村城跡の北側にある館山市広瀬は平安時代末から南北朝期に存在していた群房荘広瀬郷の遺称地とされているが、域内の山名川

旧河道沿いに市場や戸井場（問場）の地名があることから、ここも経済活動の拠点であったと考えられる。稲村城跡は安房国府を含めて経済活動の拠点が複数隣接する立地にあることが理解できる。

註

- (1) 『(財)総南文化財センター年報No.10—平成7年度・8年度—』(総南文化財センター、1998年)
- (2) 『千葉県の歴史 資料編中世1 考古資料』(千葉県、1998年)

(岡田晃司)

#### 4 稲村城跡の記録

稲村城跡が歴史的にはどのように認識されてきたのか、また里見氏の歴史の中でどのように位置づけられてきたのか、稲村城跡の研究資料としての認識と評価について確認しておく。

##### (1) 稲村城跡の存在を示す記録

里見氏の歴史が記述された近世成立の軍記物の中で、まずその存在が示されている。安房の住人が記述したという『里見代々記』『里見軍記』『里見九代記』などでは、安房を平定した里見義実の子で白浜城にいた里見義成が白浜城だけでは不便であるとして、子義通のために新しい城を築こうと、稲村山を取り立てて文明18(1486)年に築城をはじめ、延徳3(1491)年に完成させたと記されている。そして里見義成と義通がこの城に入り、義通早世後に弟の実堯が義通の子義豊の後見として居城とする。やがて天文2(1533)年に義豊が実堯を殺害して入城するものの、翌年に義豊が実堯の子義堯に滅ぼされると義堯は居城を変え、稲村城は廃城になったことを伝えている。稲村城が義成・義通・実堯・義豊の居城であり、15世紀末から1534年までの里見氏の居城であったとするものである。近世の軍記物であるがゆえに信頼性に乏しい資料であるが、安房地域で長い間に定着した認識である。

同じ編纂物でも江戸の人物が記述した『関八州古戦録』や南房総市延命寺所蔵「源氏里見系図」は、天文の内乱を起こした里見義豊のみを稲村城の城主としている点で里見氏の軍記物と違いはあるが、里見家当主の居城として稲村城を認識している点では違いがない。

また戦国時代に編纂されたとされる『鎌倉大草紙』には、里見義実が房州「十村の城」を拠点のひとつとしていたことが記述されているが、明治19(1886)年に明治政府が編纂した『大日本国誌』や明治36(1903)年に刊行された『大日本地名辞書』ではこれを「稲村城」の誤りであると指摘しており、義実の段階ですでに稲村城が存在していたと読み取っている。

近世に編纂された安房地域の地誌『房総志料』『房陽郡郷考』や各種安房国絵図にも、安房郡稲村に里見氏の古城があることが紹介されている。『大日本国誌』が編纂されると、『日本名勝地誌』や安房郡域で発行された『安房名勝地誌』などの観光案内書でも取り上げられ、里見氏の居城としての稲村城の存在は広く浸透していくことになる。

##### (2) 稲村城跡の状況を示す記録

幕末に海防のため安房へ来ていた岡山藩士真田為憲が安政3(1856)年に著した『安房風土聞書』(1)では稲村城跡の地形や伝承が記され、「上りおよそ二丁、上の開き六反ばかり、西南の



尾先に馬場の跡といふところ有り、東は尾先峯のごとく長く続く」とある。「上の開き六反」は斜面を含む現在の共有地面積と思われ、山頂の平坦部は実質2反程度であるがこれが主郭である。「上りおよそ二丁」の登城路は、数本ある西方からの道いずれかが該当するものであろう。東に「峯のごとく長く続く」尾先は、主郭から東へのびるふたつの堀切を持つ尾根である。主郭と登城路・防禦を施した尾根が城跡として紹介された記事である。また「馬場の跡」と伝えられていた「西南の尾先」は、水往来から西へ広がる中郭部丘陵の中心域が主郭の西南に位置しているの、該当するのではないかと思われる。平成19年の発掘調査で遺構・遺物は確認されなかったものの、削平した平坦面が検出された2段の曲輪を含む区域であろう。

明治32(1899)年に観光案内書として発行された『安房名勝地誌』は地元稲村出身の鳥海金隄の編集で、『大日本国誌』を引用しつつも、「城址山上の眺望快濶にして、富岳を始め相房の沿海、武相の諸山双眸の中に入る。字稲村近傍旧家と称するもの、多くは里見氏遺臣の帰農せしものにして、編者もまたその一なり。」と、稲村城跡の周辺に里見氏家臣の家があることを伝えている。鳥海家のほか正木家・山口家に伝承がある。

明治41(1908)年に編纂された『安房志』では大きく取り上げ、城の歴史とともに城跡について、「稲村城山の背後に、奥と称する地あり。三面三谷の険により、廢址墾して田圃となる。なお依然として城堡の形勢を存す。これを里見氏牙城の所在地とす。今なお西柵・御倉・御林等の称あり。その傍地を稲村長太郎屋敷と称す。乾位に一丘あり。稲村大明神の古祠を安す。これ里見越前守忠弘・里見下総守忠光・里見主膳正弘経の霊を祀れるものなり。祠中に一尺ばかりの石柱を安置す。」と紹介している。城跡の地勢とともに城跡周辺に残る伝承や地名などの戦国時代の痕跡を紹介したものである。城下の正木家に伝わる系図では里見義堯の子とされる里見忠弘から始まり、忠光・弘経はその子として記されている。この兄弟は正木姓を名乗り、弘経が稲村に住して長太郎を称し、系図では以降代々が明治初頭まで長太郎を称している。その人々は屋号オモチという正木家の墓石で確認される。稲村の長太郎屋敷はこの家を指し、稲村大明神はその家祖が祀られていたことになる。現在稲区に住する正木一族で祀る正木様という祠がこれに該当するものであろう。

### (3) 稲村城跡の歴史的評価を示した研究

稲村城跡を本格的な研究資料として報告し評価したのが、昭和4(1929)年に鳥羽正雄が『歴史地理53巻4号』で紹介した「里見氏の古城址」(2)である。「城地は殆ど独立の丘陵で、南東の方が稍低くなって安房南部の丘壘と連っている。北方は安房平野にのぞみ、旧国府の地に近く、安房一國に君臨すべき地位にある。東には遠く海上を隔てて三浦半島をも望み、海上監視の任務をも果し得る場所である。」と、その立地から安房支配の拠点としての稲村城跡の役割を読み取っている。さらに「山頂を削平し、低い土塁をめぐらし、四方の崖を削りたて、他丘と連絡ある峯筋を堀切り、特にこの方面を高くして、その方面の防備に備へると共に、城内を見透されない様にしてある。現在実踏してみるに、石塁を用ひた所が見当らない。西方から一道が緩い坂の道を以て通じ、大体二段に分れた低郭に入る様になっている。この入口は左折して入る

枡形的の構造になっている。山頂の平地の大きさ凡二三十間四方位である。郭はこの一大郭の外強いて求めれば小さいのが二三付属している。」と、主郭を削平した様子や、土塁・垂直切岸・堀切・曲輪などの遺構の存在、西側からの登城路から虎口に至る構造などを報告した。続けて「関東にその類例を求めれば、長祿から永正頃に用ひられた武蔵多摩郡の高月城に似ている。当時の高月城主であった大石氏は多摩郡方面に勢力を有して居ったが、大体同じ位の範囲を有した里見氏の本拠と比較して面白い。」と、他の東国城郭との比較をしている。また白浜城跡・稲村城跡・館山城跡の三城の立地からそれぞれの城郭としての役割の比較をし、「白浜城は専ら天険の地に拠った山城であって、純軍事的立場から寧ろ臨時的に用ひられたものであるから、背後は海で他山彙につづき、交通の不便なところである。安房に於ける小豪族の客将として、今後北方へ発展を期するには、適当な場所で、その意味で徳川氏の松平、北条氏の葦山にも比すべき所である。かくて既に安房の大部分にその勢力が拡まると、此の如き偏した所ではいけないから、旧国府の付近の稲村へ移ったのである。稲村城も可なりの山で、さして人工を加えることなくして、相当の効果を収め得る場所である。しかし、交通の便は館山の方が港を控えて居てよいので、位置としてはその方がよいし又時代一般の趨勢から城全体の規模も大きく且つ纏りのよい縄張の館山城が戦国末から桃山江戸初期に亘る頃採用されたのである。即ち以上里見氏の三城についても、大にしては日本全国に通ずる時代の流れ、小にしては同じく城郭の形式の変遷の跡が観取せられて、まことに面白く感ずるのである。」と評している。

稲村城跡が里見氏によって取り立てられた意義について、里見史のなかで位置づけられたのは、昭和43(1968)年の『南総の豪雄—里見義堯』においての川名登による指摘であり、「北に北条平野の水田地帯を一望に見下し、国府にも近く、まさに安房西南部を掌握するための要地」である稲村城跡の時代を、「安房一国をほぼその支配下に収めることができた段階」と結び付けて理解したことから、以後、里見氏による安房制覇と稲村城跡が結びつけて説明されるようになった。このことについて、昭和57(1982)年に千野原靖方は『千葉県の歴史24号』に発表した「戦国大名里見氏の成立過程」において、「里見氏の稲村への進出は、まさに守護の掌握する国衙領＝守護領及び国衙機構の守護支配体制を継承する意味をもっていた」と位置づけた。

さらに昭和59(1984)年の千葉県教育委員会による『千葉県中近世城跡研究調査報告書第4集』で稲村城跡が報告されると、発掘調査を含めた詳細な城郭遺構の紹介が行われた。また測量調査によって狭義の意味での城と広義の意味での城の見方が提示され、城山と呼ばれる主郭部を狭義の城としてとらえ、広義の城として中郭部・外郭部という存在が示された。さらに外郭部が包み込む城山周辺の条里区画や居住領域の空間構成の存在や、海上交通を含む立地などと城跡を結びつけて「地勢と統治に主眼を置いた「所堅固」の城としての稲村城という位置付け」がなされるようになった。また城館跡用語としての「城山」「要害」「西門」「箕輪」「堀ノ内」「古屋敷」といった地名・屋号の存在を指摘し、「下井戸」と呼ばれる城井戸の紹介をしている。下井戸は水往来とよばれる切割道の東西の下部に位置し、西側は水田の一部となり、東側は現在井戸枠が設けられているが、もとは自然の湧水がある三角形の泉形状だったという。

平成8(1996)年にはじめられた市民グループによる稲村城跡の保存運動を通じては、稲村城跡の存在した時代や機能について積極的な評価が加えられた。『千葉城郭研究第4号』の「小特集 稲村城跡をめぐる諸問題」で、遠山成一は「主郭部周辺に非常に手の込んだ造作が施してあった。他の里見系城郭とも通ずるものがあり、天文期頃の里見氏当主の居城として相応しい構造をしている」と評価した。また滝川恒昭は、稲村城に関する同時代の良質な史料が乏しいなかで、記述内容の異なる二種類の軍記物や系図類について視点を変えて見直し、「稲村城にあった人物こそが里見家の当主として記されていること。つまり稲村城主＝里見氏当主の居城、という図式についてはまったく一致する」点に注目した。そして内外房を結ぶ基幹道路と河川海上交通とを押さえる城跡という立地条件から、「里見氏発展の基ともいえる館山平野および安房経済圏の掌握、ということに対しての十分なる条件を有していた」城と評価した。

平成20(2008)年に刊行された『館山市稲村城跡調査報告書』では、城郭遺構が集中する主郭部と遺構が中途半端ともいえる中郭部・外郭部の縄張・遺構などの状況を見直し、遠山成一が「完成された城郭遺構とは言い難い。ある時点で造作が途絶した可能性も考えておきたい。それは天文の内乱と考えるのが自然ではないだろうか。」と指摘し、天野努が「天文の内乱にみられるように、義豊が己れのもとに権力を集中させていく過程で城の整備・拡大が行われた」という解釈を示した。

#### (4) 稲村城跡の利用状況

稲村城跡の主郭である城山は共有地を中心としており、昭和30年代までは北斜面が茅林として利用されていたほか松や杉が植えられて、共有財産として利用されてきていたことを共有地組合文書(2)により知ることができる。多くの稲区共有地では松や杉は育つと売却され、即座に苗を植えつけるという共同作業が昭和45(1970)年まで続けられていた。城山共有地での伐採と植栽の作業は昭和22(1947)年まで行われた。伐採のみは昭和39(1964)年が最後となり、翌年から山頂は子どもの遊び場として開放された。しかし、やがて遊び場には人の出入がなくなり自然の状態に帰っていった。

その後城郭が学術調査研究の資料として注目されるようになると、昭和58(1983)年に千葉県教育委員会による「千葉県中近世城跡確認調査」事業の一環として発掘調査と測量調査が実施され、稲村城跡の構造が明らかとなって、歴史資料としての重要性が広く知られるようになった。そうしたなかで千葉県企業庁による館山工業団地整備計画の進展にともない、団地への進入道路である市道8042号線が平成4(1992)年に稲村城跡を通るコースで認定されたことから、平成8(1996)年に市民グループによる稲村城跡の保存運動がはじまったのである。保存についての請願書が提出され、翌年市議会で請願書が採択された。市道8042号線は路線が変更されることとなり、現在、館山市教育委員会による稲村城跡の保存活用を検討するための調査が続けられている。

註

(1) 船橋市西図書館所蔵



(2) 土曜会「南房州見学の記」所収（『歴史地理』53巻4号、1929年）

（岡田晃司）

## 5 前期里見氏の研究

長いあいだ軍記物を通じて理解されてきた里見氏の歴史については、昭和8(1933)年に大野太平の『房総里見氏の研究』によって各種軍記物の記述の不整合が整理された。とはいえ、15世紀中葉の房総里見氏草創期の里見義実の安房平定物語から、内乱をおこした里見義豊が天文3(1534)年に滅びるに至るまでは、同時代史料が確認されていなかったことから、近年までは大野によって整理された軍記物の記述に従って参考程度の理解にとどまっていた。戦後の研究のなかでは、同時代史料によってのみ里見氏の歴史を再構築する試みがなされたが、義実から義豊までの歴史は空白にならざるを得なかった。その一方で当時の政治情勢や社会状況の研究の進展に対応した里見氏の歴史の見方も提示されたが、推測の域をでるものではなかった。

軍記物に具体的な齟齬が確認されたのは、『群書類従』所収の「快元僧都記」に見開き2ページ分の脱漏の存在が指摘<sup>(1)</sup>されてからである。そこには天文の内乱に関する記述があった。多くの軍記物に記述されていた天文の内乱に関する事件の推移は、若くして父義通に死なれた里見義豊が、自分を後見したものの家督を譲ろうとしない叔父実堯を殺害し、翌年父の仇を討つべく上総から安房へ侵攻した実堯の子義堯が義豊を討ち、里見家の権力を相続するという経過で記述がなされていた。これは鶴岡八幡宮の社僧快元が記した日記「快元僧都記」の群書類従本でも同様の経過に読み取れる内容であったため、事件の推移に疑問がもたれたことはなかった。しかし國學院大學図書館本の公刊<sup>(2)</sup>によって群書類従本の脱漏が確認され、さらに内乱関係の史料の検討によって内乱の推移に大きな違いがあることが指摘された。事件の経過は義豊が実堯を殺害したあと、小田原北条氏の支援を受けた義堯の攻撃を受けて拠点を失い上総へ逃避しており、翌年上総から安房へ侵攻したのは義豊であったことが明らかとなったのである。これによって軍記物の記述に大いなる齟齬があったことが明らかになったばかりでなく、歴史叙述に意図的な改変が加えられたのではないかという考え方が示されるようになった。

意図的な改変という見方は平成4(1992)年に滝川恒昭によって示された<sup>(3)</sup>もので、里見氏についての歴史認識が大きく見直されることになった。天文の内乱を通じて庶家である里見義堯が嫡家である義豊を滅ぼして家督を相続することになったが、義堯は儒教道徳に反するこの行為を正当化する作為として改竄を行ったとみたのである。それが歴史事実の改竄であり、具体的には義豊を先の国主として認めないことであった。天文14(1545)年の石堂寺多宝塔（南房総市）再建のうちに義堯が義通を「先国主」とし義豊を「其子」とのみ記したことはよく知られている。軍記物が歪曲されて叙述されたのがいつからであるかは不明だが、天文の内乱の原因を歪曲し、辻褄をあわせるために義豊はじめ歴代当主の年齢や事績が変えられ、系図にも手が入れたと考えられた。そのことから、天文の内乱によって滅びた嫡流と新たに政権をとった庶流をふたつの里見家と見る考え方が生まれ、滅びた嫡流を前期里見氏、政権を取った庶流を後期里見氏として理解するようになった。その結果、前期里見氏関連史料の残存が極めて少

ないことと前期里見氏の歴史の改竄とが関連して考えられるようになってきた。

残された資料は少ないながらも、里見氏の前半期の歴史が改変されているという目線で見ること、改竄された里見氏の歴史の復元が行われるようになってきている。里見義実が軍記物では落ち武者として安房へ逃れ、安房国内の争乱に乗じて一国の平定を果たした人物として描かれていたが、実際には鎌倉公方足利成氏の支持によって入部し、足利系の武士をまとめる権限を与えられていたと考えられるようになってきている(4)。義実が安房国の太守と呼ばれるに至った背景には、享徳の大乱に至る鎌倉公方足利氏と関東管領上杉氏との対立があった。武蔵・相模・伊豆に加えて伊豆諸島を勢力圏にする上杉氏が足利系の武士が多い房総へも進出してきたことから、房総半島南部では港湾を中心に拠点の争奪が行われたとみられている。その結果、南端の白浜は太平洋岸の拠点として六浦で港湾管理の実績があった山内上杉氏家臣の木曾氏が支配し、白浜に近い神余を拠点にする神余氏が山内上杉氏の家臣となり、太平洋岸の千倉にも扇谷上杉氏家臣恒岡氏が足利系の上野氏の所領を奪って入り込むなど、上杉氏の支配が広がってきていた。里見義実の役割は、上総国へ入部した武田氏とともに流通拠点となる房総の港湾の奪回を図ることにあつたといえる。それは交易路としての東京湾の制海権を保持することでもあった。戦国期に強力な水軍を組織した里見氏の権力の淵源がそもそもの里見氏の房総進出の役割の中にあつたといえる。また里見義実が安房における足利系武士たちの結集を可能にできた背景には、関東足利氏の「御一家」という家格があつたという評価もされている(5)。

さらに新規資料の確認と評価によって、里見義実については近年ようやく確実に存在することが明らかにされた(6)。鎌倉の禅僧李弘大叙が著した文明19(1487)年の「関東禅林詩文等抄録」で「房州太守湯川公」と称えられた安房国の国主が存在することが確認され、中国殷王朝の創始者である湯王になぞらえて「湯川公」と称えられた人物こそ、安房国里見家の新しい創始者である里見義実と解釈された。義実が儒学を踏まえた文武両道の人物で、武術の研鑽をするとともに古今の文芸についても談論する教養をもつと書かれ、義実を知る人物からは仁をもって領国民に接したと評されている。この儒教倫理を中心とする中国哲学に基づいた政治思想は後期里見氏まで続く歴代の里見氏の政治規範となったものである。

稲村城で天文の内乱を誘発した里見義豊についても、軍記物で語られた従来の人物像とは違う姿が明らかにされてきている(7)。軍記物や系図では天文2(1533)年の事件の段階で20歳とされていたが、永正9(1512)年に高野山へ宛てた書状を出していることが確認されたことで、年齢が改竄されていたことが明らかとなった。大永4(1524)年頃に没した鎌倉の禅僧玉隠英瑛は義豊に法名と雅号を与えて、孔孟の学問を学び孫呉の兵法を伝え、和歌や百家の書にも通じる文武兼備の佳公子と讃えた記録を残して、房州の賢使君と称した。天文の内乱の経過ばかりでなく人物像も変えられていたわけで、内乱の原因も全く違う要因が考えられることになった。

また里見氏の政治的な意思も明らかになってきている(8)。里見氏が安房国内で国主としての地位を強くアピールする機会として、安房国総社である鶴谷八幡宮での社殿造営事業があつた。永正5(1508)年に里見義通が大檀那として実施したのを初見とするが、そこでは、自らを古河

公方足利政氏の副帥と位置づけ、長狭郡を拠点に独自の勢力圏を作り上げていた正木通綱を国衙奉行人と称している。里見義通が安房国の国衙機能を掌握した国主の地位にあり、しかも古河公方のために武運長久を祈祷する公方の代官であるとして、安房支配の正統性を主張したものである。この事業は以後里見家歴代が慶長期まで続けている。公方家が分裂していた永禄元(1558)年と元亀3(1572)年に同事業を行った里見義弘は、小田原北条氏が支持する古河公方足利義氏に対抗して、それぞれ足利晴氏・足利藤政を鎮守府将軍として祈祷の対象にしている。これは里見氏の政治的な立場が明確に表明されたものである。永禄元年の事業後には小田原北条氏の北関東進出に対抗する下総築田氏、常陸佐竹氏、下野小山氏などとともに関東管領職を正式に継承した上杉謙信と連携し、足利晴氏の嫡子藤氏を正式に公方として擁立することで対北条氏戦線の形成に強く関与している。また元亀3年の事業の際には、北条氏と同盟した上杉謙信への信頼が揺らいだなかで、里見氏独自の政治意思の表明として「副将軍」と自称し、上杉氏に代わって公方を守護するべき役割を自認したこともあった。

関東足利氏を通して東国戦国史のなかでの里見氏の政治的な役割が明らかにされてきているが、その役割の根源には里見氏の安房入部以来の力の源泉となる水軍の存在があった。房総半島先端部を領する里見氏であるからこそ、海上交通の掌握能力の高さによって北条氏に対抗して東京湾の制海権を掌握したと理解できる。房総半島とは海を活動領域にもつ地域である。その大半を支配領域とすることになった里見氏は、安房入部の当初から海上支配に大きな役割を担っていたと考えられる。それゆえにこそ戦国期を通して水軍力で小田原北条氏と互角に戦い、徳川政権になるとその軍事力ゆえに安房を追われることになった。海岸線に面した城郭が多数存在することからも里見氏の権力の性格が読み取れるが、稲村城跡も平野の内部にあるとはいながら海への出入り口を至近に持った城郭である。文献資料によって少しずつではあるが前期里見氏について明らかにされてきているものの、根本的に史料が希薄であることには変わりはない。そのため前期里見氏の歴史解明の資料として、城跡を中心とした文字資料以外の存在が注目されてきている所以である。

註

- (1) 岡田晃司「天文二・三年の安房里見家内訌について—研究史の整理と問題点—」(『史翰』第20号、国学院大学地方史研究会、1988年)
- (2) 『神道体系 神社編二十 鶴岡』所収「鶴岡造営日記」(神道体系編纂会、1979年)
- (3) 滝川恒昭「房総里見氏の歴史過程における『天文の内訌』の位置付け—関係史料の紹介をかねて—」(『千葉城郭研究』第2号、千葉城郭研究会、1992年)
- (4) 峰岸純夫講演録「享徳の乱と里見義実」(『里見氏稲村城跡をみつめて 第三集』里見氏稲村城跡を保存する会、1998年)
- (5) 佐藤博信「前期里見氏の歴史的位罫—特に「房州賢使君源義豊公」の検討を中心に」(『里見氏稲村城跡をみつめて 第三集』里見氏稲村城跡を保存する会、1998年)
- (6) 佐藤博信「東国大名里見氏の歴史的位罫—支配理念の側面から」(『中世東国の社会構造』岩田書院、2007年)
- (7) 前掲註(6)論文
- (8) 横田光雄「房総里見氏の領国形成と寺社」(『史學雑誌』第98編第11号、1989年)

(岡田晃司)

## Ⅱ. 遺構・遺物

### 1 稲村城跡の構造と遺構

稲区で城山と称されてきた丘陵が稲村城跡として伝承されてきていたが、『千葉県中近世城跡研究調査報告書第4集』（昭和58年度）において城山の部分は狭義の城郭として主郭部と評価され、その南部に広がる丘陵と4本の支尾根を中郭部、さらにこれらを包むように中郭部の西端で接続して南北に伸びる丘陵と、さらに谷を挟んで城山の東部にある自然丘陵などを外郭部ととらえることによって、広義の城郭としての稲村城の姿も提唱された。そして『館山市稲村城跡調査報告書』（平成19年度）では、広義の城郭としては整備・拡大の過程で造作が途絶した城郭であるとの評価がなされた。

そこで、城郭遺構としてはどのように残され、稲村城跡がどのような構造であるのかを、これまでの現地調査の報告から『千葉県中近世城跡研究調査報告書第4集』に挿図された「稲村城跡概念図」をもとに、今回の再踏査の成果とともに整理しておく。

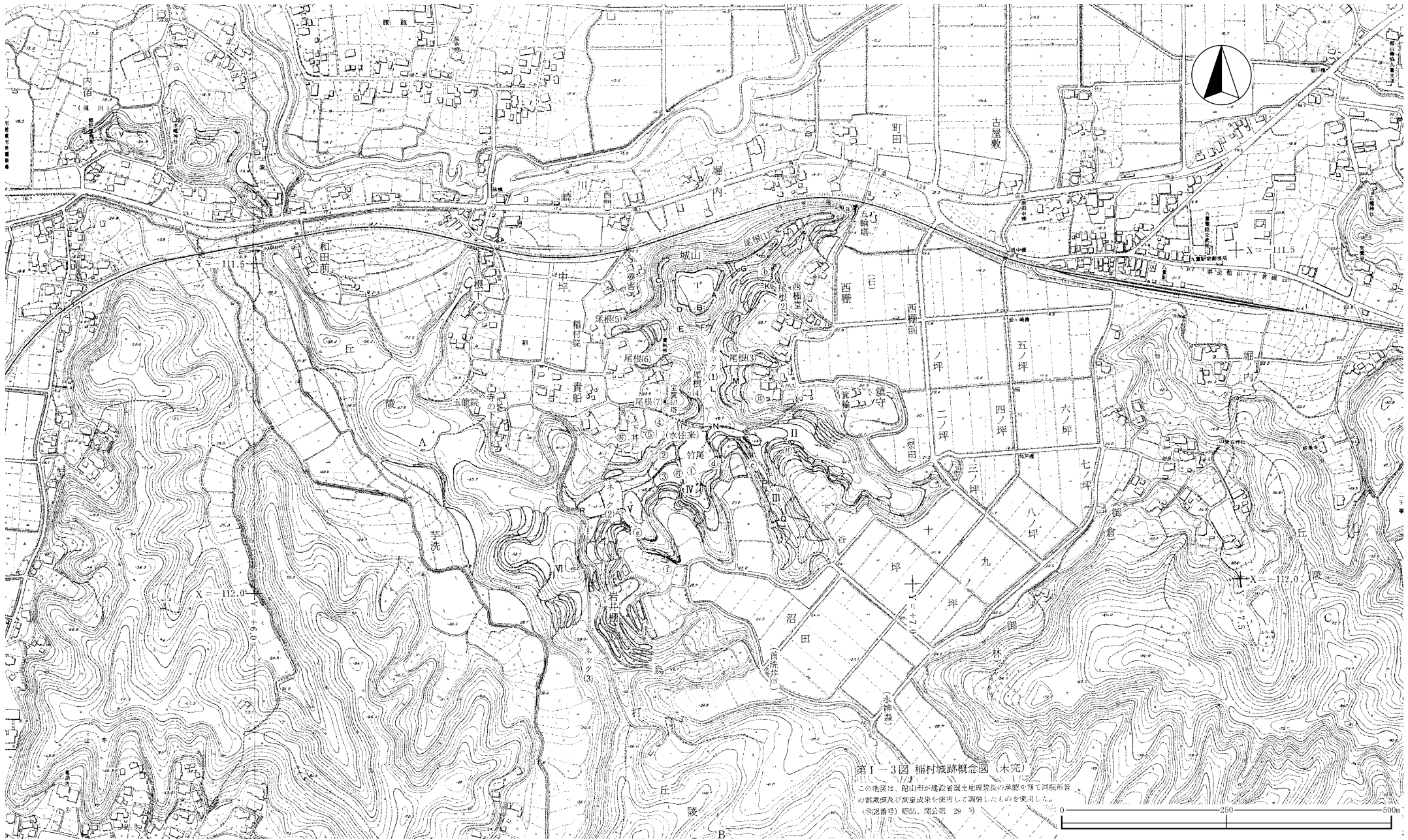
#### (1) 主郭部

遺構の多くが集中する主郭Ⅰは標高61m、約2000㎡の平坦面である。東側と南側の2辺には高さ3m前後の連続する土塁(A)がつくられ、北側と西側は急斜面の崖となって落ち込み土塁は存在しない。とくに北側は落差約40mの急崖となって山裾部にまで達し、途中に腰曲輪や帯曲輪はともなっていない。一方、西側は比高差約14mの崖下に南北約60mに及ぶ長さの帯曲輪(C)が造られ、さらにその西側は垂直の切岸をともなった急崖となっている。東部と南部の土塁外側は急斜面で比高差17m前後のところは現在道として使われている。また南側土塁の西端は櫓台状(B)に7～8m四方の広がりを見せて、虎口(D)へ向かって張り出すようにつくりされており、南側尾根からの進入に対する防禦が施されている。

この主郭の虎口は2か所が指摘されている。従来からの進入口として知られていた虎口は主郭の南西部で、土塁端の櫓台から見下ろす位置にあり、主郭より一段低い内枳形状になっている。もうひとつは平成19年度に新たに報告された虎口で、主郭の東北部にあたる土塁の北端に接する掘り込みである。搦め手口と指摘された。

登城路については、主郭の南に伸びる尾根(4)がネック(1)の南端で中郭部に接する位置にある水往来から登るという認識が近年広がっていたが、戦後しばらくまでは主郭の西側から登る道が知られていた。昭和4年に鳥羽正雄が「西方から一道が緩い坂の道を以て通じ、大体二段に分れた低郭に入る様になっている」と報告したのがそれで、要害から西北斜面を登り帯曲輪に至る道である。平成19年度の報告書においても同様に推定されたが、今回の再踏査で帯曲輪の下段にも並行して道が存在することが確認された。一部が斜面の崩落によって失われているものの、西北斜面の道が帯曲輪に至る手前で帯曲輪下段の道につながっていたと思われ、本来の登城路はこのルートと推定される。稲区共有地組合で保管する『官有地共有地ニ私下并ニ共有地各名ニ買受定約規則』の記述に、「城山新道の記」として「大正十二年九月一日の大震災の

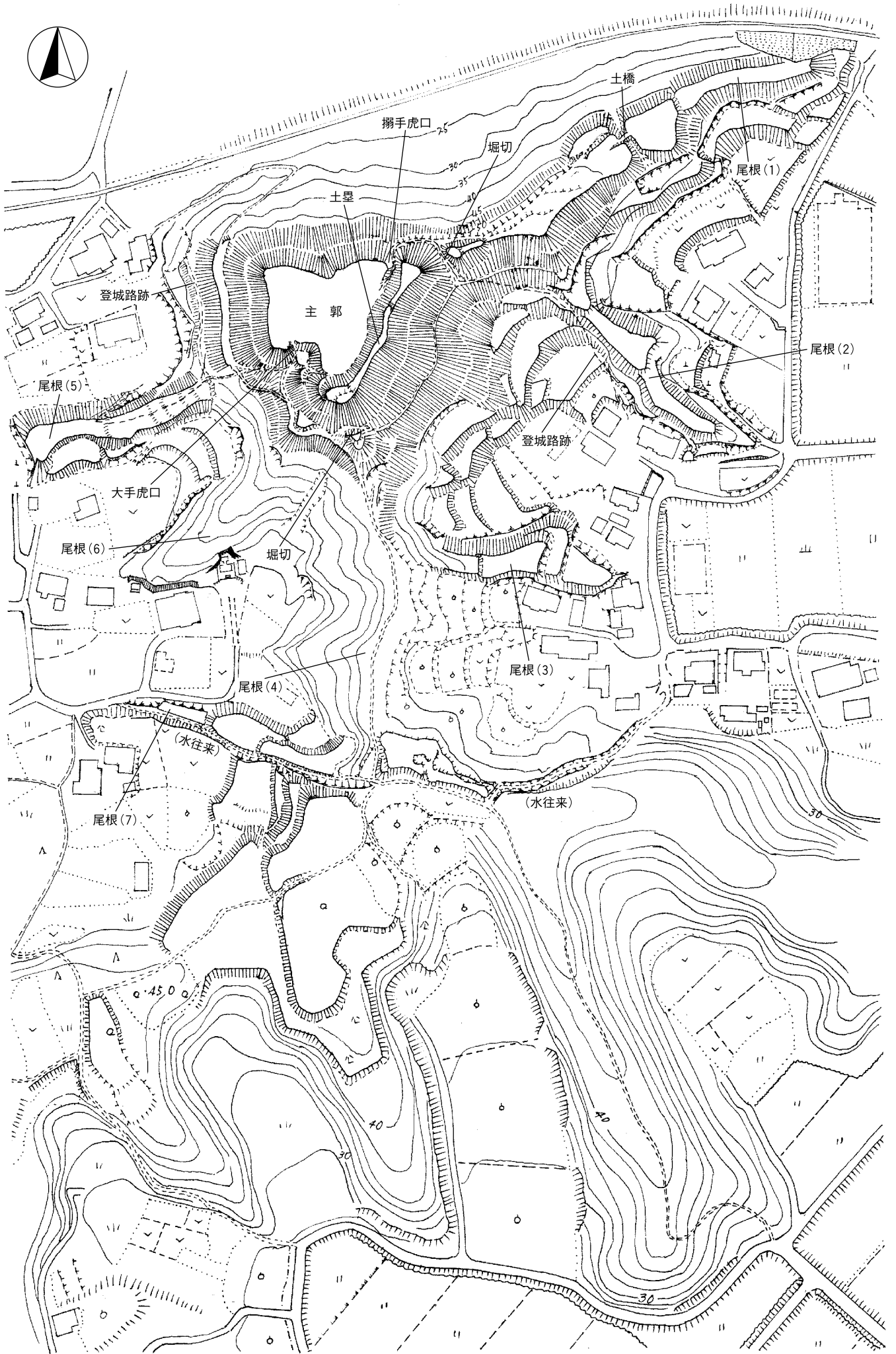




第1-3図 稲村城跡概念図 (未完)

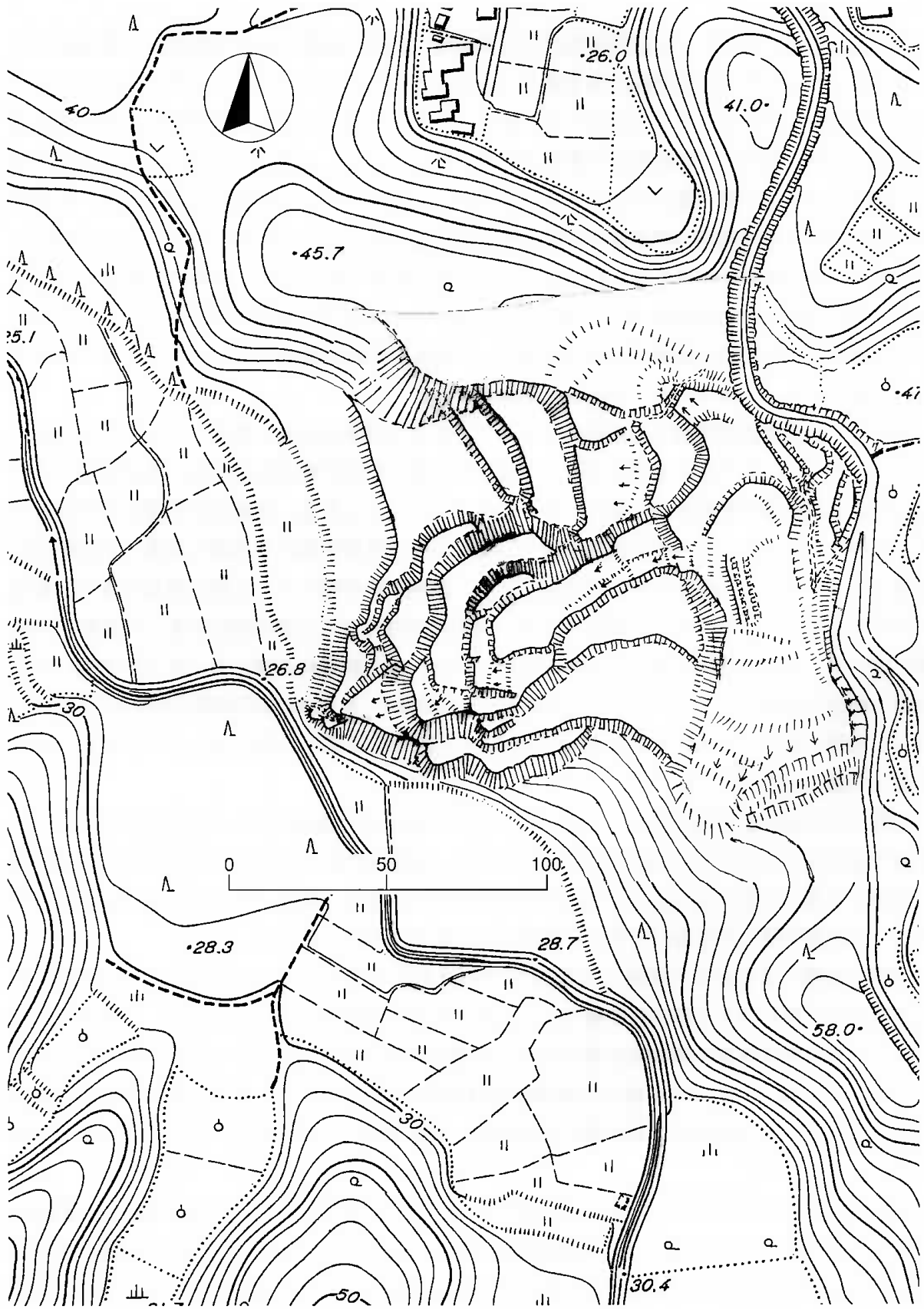
この地図は、館山市の建設省国土地理院長の承認を得て同院所管の測量図及び測量成果を使用して調製したものを引用した。  
 (承認番号) 昭55、開公第 29号

第4図 稲村城跡概念図 (「千葉県中近世城跡研究調査報告書第4集」所収の図に一部加筆した)



第5図 稲村城跡主郭部及び中部部縄張り図（『館山市稲村城跡調査報告書』所収の図に一部加筆した）

（作図：遠山成一氏）



(作図：遠山成一氏)

第6図 稻村城跡外郭部西尾根最高地点(VI郭)縄張図

ため登山道崩壊したるを、昭和四年四月七日共有者一同にて造る」とある新道が、帯曲輪へまわした道と考えられる。帯曲輪は本来道として使われていたのではなく、下段の道を見下ろし監視と防禦の役割をもったものであろう。また、これらと別に要害から小尾根(5)を登り帯曲輪に接続する道も存在し、昭和59年の報告書で紹介されている。これらの方向からの道はすべて南西部の虎口から主郭へ進入するようにつくられている。ただし帯曲輪の南端からは、土塁の最高所に祀られる浅間祠への参道が鳥居と階段をともなつてつくられているが、これは参道として新しく加えられたものとみられている。また地元の方の証言では、東側の小尾根(2)と小尾根(3)の間の谷から登る道がかつて2本存在したという。50年ほど前から使われなくなったというが、尾根(2)の南崖際を直線で登り堀切(G)へ至る道の痕跡が確認できた。もう1本は小尾根(3)の北側から入ったというが、痕跡は未確認である。

山頂の主郭には直接接続する尾根が2本あり、ひとつは東北方面へ伸び、ひとつは南方向へと続く。そしてそれぞれに主郭と尾根とを隔てるための堀切が施されている。東北方面へ伸びる尾根(1)は最先端が垂直に削り落とされて比高差が5～6mある。垂直面の上部には平場がありその奥にさらに8mほどの急斜面があつて、その上が尾根頂部の平坦面となる。この尾根の北側は主郭から続く山裾部までの急斜面であり、南側は腰曲輪が2～3段に重ねられて、裾部は切岸となり敵の侵入を妨げる構造である。尾根の背部中央には堀切(H)があつて尾根上の移動を妨げているが、堀切北側には土橋を設けている。この堀切の南側下方にはコの字型に壁面を削った幅2m奥行き5mほどの窪みがある。その役割についてはまだ明確に示されていない。そして主郭と尾根との連続を断ち切る堀切(G)が主郭東の土塁下に深く造られて、尾根(1)から主郭への進入を防いでいる。

主郭の南方向へ続く尾根(4)は、中郭部から北方へ進入して数mでネック状の細尾根となる。直線で進入すると主郭への斜面に堀切(F)があり、主郭への取り付きを阻んでいる。道は檜台の西側下を通過して回り込むように虎口(D)へ向かっているが、檜台下に一段高い腰曲輪が突き出し、その道で侵入する者の右側から攻撃できるように工夫してある。

主郭の東側にはこれらの尾根(1)と尾根(4)に挟まれて2本の小尾根があり、ともに小尾根の周囲を垂直に切り立てて取り付き難くし、土塁としての役割をも果たしている。小尾根(2)と(3)に挟まれた谷奥は複数の腰曲輪が設けられ、谷頭は垂直に削り落とされて主郭への取り付きを困難にしている。しかし小尾根(3)と尾根(4)に挟まれた谷は段々畑となり、腰曲輪状ではあるが段差が小さく城郭遺構とは認め難いとされる。また尾根(4)に堀切がないことも不自然とされている。

主郭の西側にも小尾根が2本あり、北側の小尾根(5)も東側同様に土塁状に周囲が削り落され、小尾根(6)とで挟まれた谷には3段の腰曲輪が設けられている。小尾根(6)は先端が削られているものの南側の谷には腰曲輪はなく、斜面の裾部を急斜面と一部の削り落としとすることで取り付きを難しくしている。主郭部の周辺は小谷を中心に稲の集落部になっている。



## (2) 中郭部

主郭部と中郭部は尾根(4)の南にある水往来を境に考えられていたが、平成19年度報告書で水往来の造成については稲村城の築城にはともなわないとの評価が示され、城郭遺構としての疑問が呈された。中郭部については水往来をともなわない姿で復元をイメージする必要がある。中郭部とされる区域は、主郭部の南で東西に広がる丘陵をベースにそこから南方に伸びる4本の支尾根からなる。これらの尾根に堀切はないものの、それぞれに腰曲輪や切岸が確認されている。

Ⅱ郭は斜面に腰曲輪状の平場が複数並び、尾根の先端には切り落しが見られる。Ⅲ郭は尾根頂部に南端から水往来までの道が続き、その斜面の所々に腰曲輪状の平場が作られている。頂部には腰曲輪や切り落しによって土橋状に細くした場所が2箇所(P・Q)みられる。Ⅳ郭は尾根先に向かって頂部が段々に下っていくように造られ、西側斜面に腰曲輪状の平場がある。Ⅴ郭には腰曲輪状の平場はなく、古墳時代の横穴墓が並ぶ3段の面がみられる。それぞれの尾根に挟まれた谷頭は腰曲輪状の平場が2～4段重ねられ、主郭へ向かう尾根(1)に最も近いⅢ郭とⅣ郭に挟まれた谷は、尾根裾部に切岸が連続している。Ⅳ郭・Ⅴ郭が接続する丘陵頂部は大きな平場が段差をともなって複数造られており、その北斜面にも曲輪の造成が見られる。西の水汲坂を挟んで同じ高さの曲輪が北側に存在することが平成19年度の報告書で指摘され、連続する曲輪との認識が示された。それによって西の水汲坂の位置に小尾根(7)の存在が復元され、その南側の谷を埋め立てて曲輪の造成がなされていたことになる。なお、この小谷の南部つまり中郭丘陵西部の北斜面には近年に切り崩した部分があるとの地元の方の証言がある。

中郭南部では4本の各尾根は坪地名の水田地帯に接する。中郭丘陵部の東端は台地状をなし、愛宕祠が祀られる。中郭丘陵部の西端は南北に伸びる丘陵に接し、この丘陵を外郭部とする。郭Ⅴの西に接するネック(2)には中郭部の丘陵を越える道がクランク状につけられている。

## (3) 外郭部

外郭部は主郭部と中郭部を挟む東西の丘陵と捉えられている。西側の丘陵は半島中央部にある館山市と南房総市千倉町との境界にあたる丘陵から直接北へ伸びる丘陵で、国道128号線を越えて滝川に接する。滝川区の木幡神社が祀られる先端の天神山周辺の斜面に若干の削り落としや腰曲輪状の平場がみられるが、丘陵はほぼ自然地形であり、中郭部と接する地点(Ⅵ郭)に腰曲輪状の平場が集中的に造成されている。とりわけⅥ郭の西へ張り出した小尾根と南北にある小谷斜面は3段程度の腰曲輪状に整形され、切岸をともなっている。外郭部で城郭遺構とみなせるものがあるのはⅥ郭周辺のみであり、外郭部として広義の城郭といえるのはここから北の尾根との評価もある(1)。

主郭部の東方で南北に伸びる丘陵も外郭部として捉えられているが明確な城郭遺構はない。地形的に主郭部を防御する土塁の役割をしているだけであるが、西方の外郭部丘陵とともに外郭部が稲村城跡の中心部を守る形勢になり、主郭部・外郭部を含めてその北側を流れる滝川・竹原川が大きく北方からの攻撃を防御する濠の役割を担っていると見られている。なお現在稲

村城跡の北部から南進してくる山名川が竹原川と合流して滝川となるのは、江戸中期の北条藩屋代家による山名川の流路変更工事によるものと伝えられている。それ以前の山名川は広瀬で西に向きを変えて宇戸沼川方面へ流れ、萱野北部で滝川に合流したものと考えられる。

なおこの外郭部Ⅵ郭の東裾部を通る林道は南へ向かって丘陵を進むが、途中で山道の状態になり白浜と千倉方面への旧道がいまも存在している。白浜へは尾根筋を南進して館山市畑集落を抜け白浜城跡の東端へ到達できることが確認されている(2)。距離は約10kmあり、同時代の城郭である白浜・稲村の両城が有機的に結びついていたことが容易に予測できる遺跡といえる。

また外郭部のなかでⅥ郭のみに遺構が集中するのは、中郭部と接するこの位置が、白浜と結ばれる道を押さえる重要な意味を持つと考えられるが、Ⅵ郭は主郭部を主体としたときの稲村城にとっての出城のような存在としてあったのではないかとの指摘もある(3)。

註

(1) 『千葉県の歴史 資料編中世1 考古資料』(千葉県、1998年)

(2) 「第8回里見の道ウォーキング報告」(『里見氏稲村城跡をみつめて 第四集』里見氏稲村城跡を保存する会、2000年)

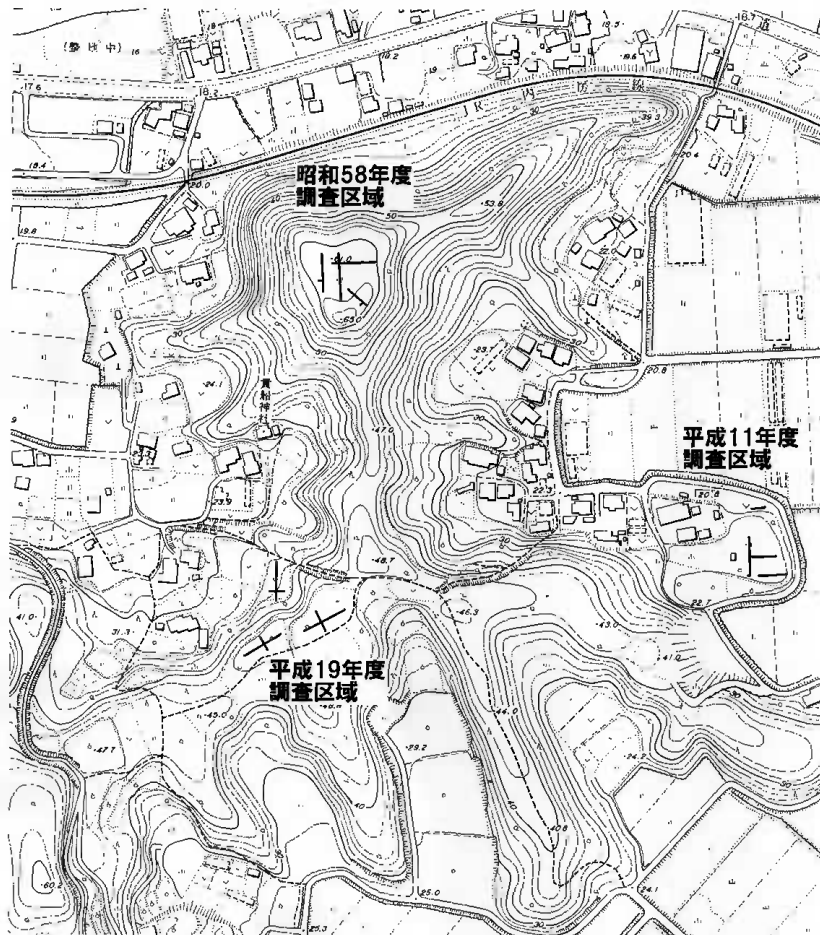
(3) 国立歴史民俗博物館小野正敏教授よりご指導いただいた。(岡田晃司)

## 2 過去の発掘調査の成果

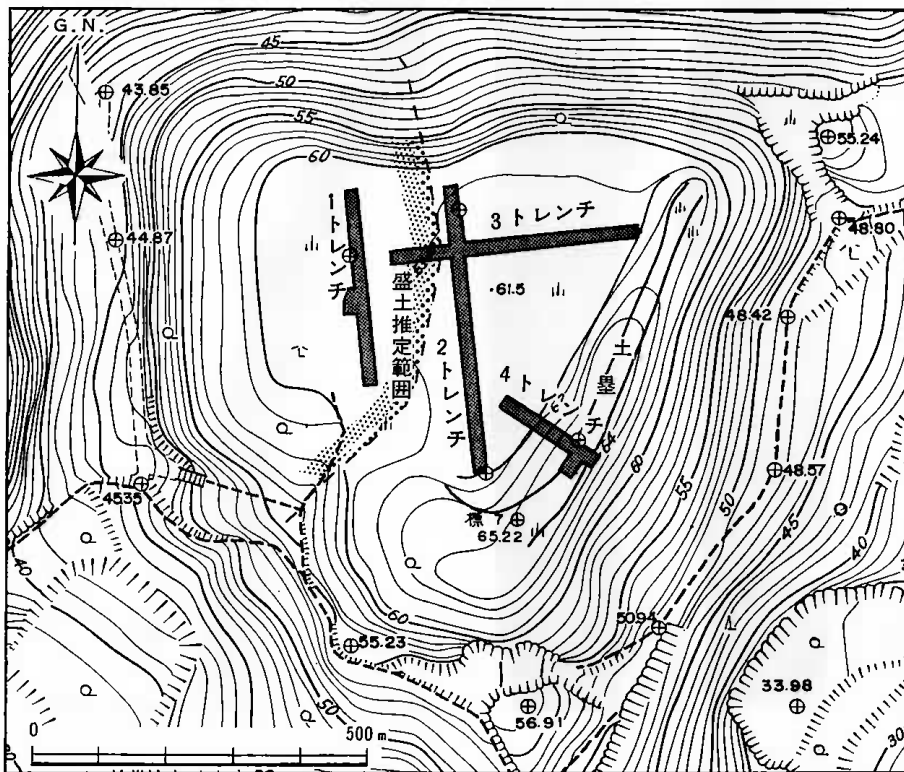
稲村城跡の発掘調査は、千葉県教育委員会による昭和58年度の調査、(財)総南文化財センターによる平成11年度の調査(1)、館山市教育委員会による平成19年度の調査の3回が行われているのでそのデータをまとめておく。

昭和58年度の調査では主郭での発掘調査が行われ、平場に3本のトレンチと土塁に1本のトレンチが入れられた。主郭の西部で南北に入れられた1トレンチではほぼ1mの盛土の層が確認され、北部で傾斜を強めて北端では2m10cmの厚みがあった。北へ向かって傾斜していた地山を一旦削平したうえで盛土し成形をしていた様子が確認され、その盛土の範囲は3トレンチの西端から約8mが盛土の東側限界と確認されている。またこの盛土は白色粘土・砂岩・褐色土・暗褐色土などを交互に積み重ねた版築技法による造成とみられた。一方、3トレンチの残り部分と2トレンチでは盛土は確認されなかったが、旧地形を削平して整地が施されていた。つまり主郭の東側半分は地山を削り、西側半分は斜面への盛土をすることによって広い平坦地が造成されていたことが判明したのである。なお2トレンチの北端の斜面際では、90cmほどの段差で地山が一段低く作り出されていた。奥行きは170cmある。

さらに土塁に入れた4トレンチでも地山の削り出しが確認された。土塁は盛土による造成ではなく地山を成形したものだった。土塁頂部には若干の盛土があるものの築城以前の旧表土が残されていることから、櫓台を含めた土塁部分が元来の山頂で、これを削り残すことで土塁を造成したものであった。また、3mほどの比高差をもつ土塁の内側斜面は3段の階段状に成形がなされ、その段差は50~70cm、平坦面の奥行きは一定でないながらもおよそ130~140cmであった。

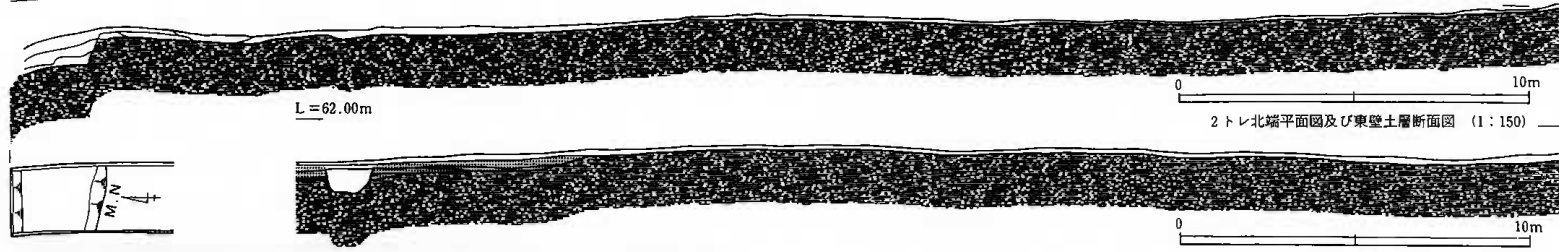


第7図 稲村城跡発掘調査トレンチ配置図



第8図 昭和58年度主郭部発掘トレンチ配置図  
 (『千葉県中近世城館跡研究調査報告書第4集』より転載)

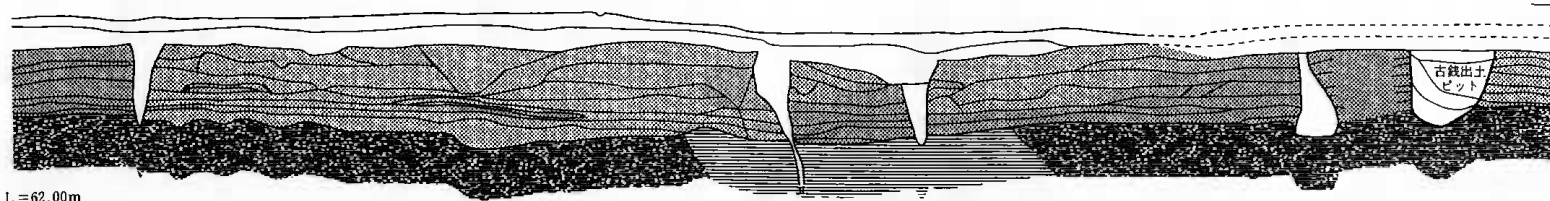
L = 62.00m



L = 62.00m

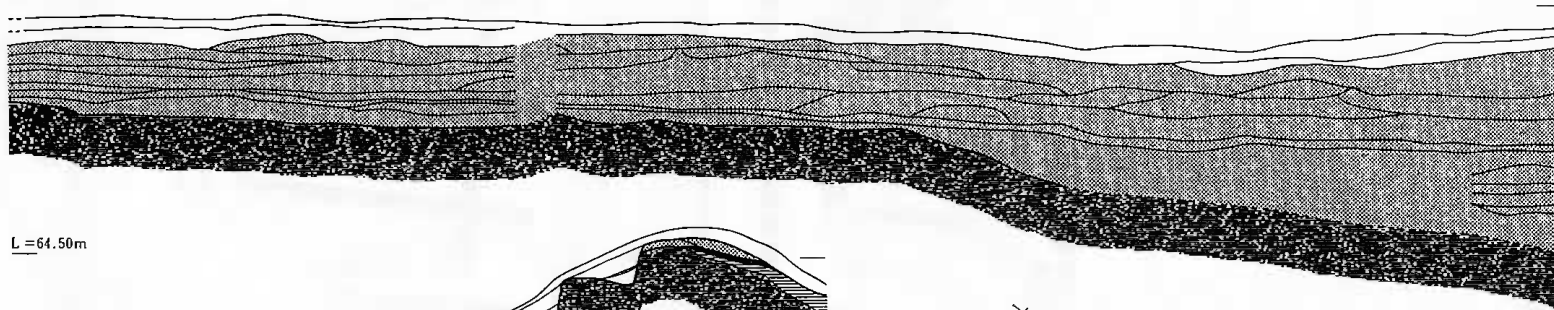
2 トレ北端平面図及び東壁土層断面図 (1:150)

L = 62.00m

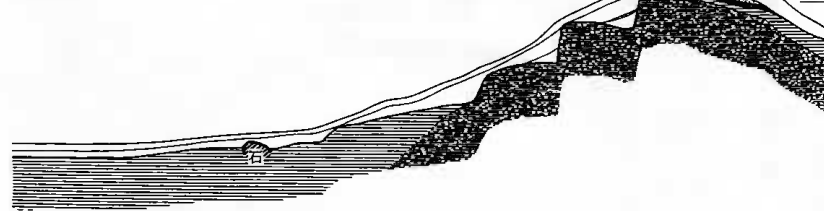


3 トレ南壁土層断面図 (1:150)

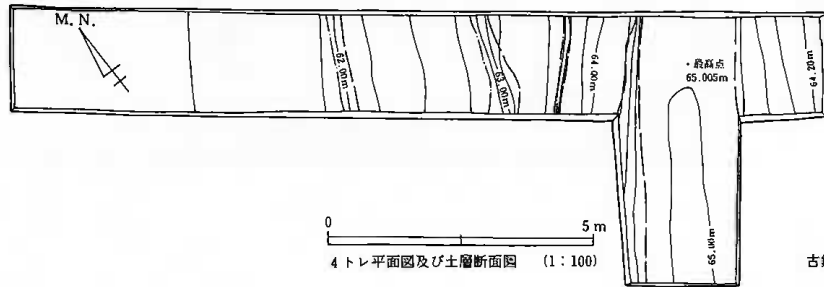
L = 62.00m



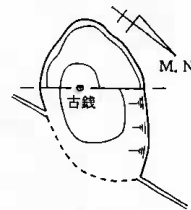
L = 64.50m



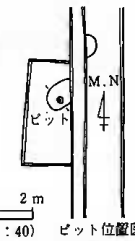
1 トレ東壁土層断面図(上図右に下図左が続く) (1:50)



4 トレ平面図及び土層断面図 (1:100)



古銭出土ピット平面図及び土層断面図 (1:40)



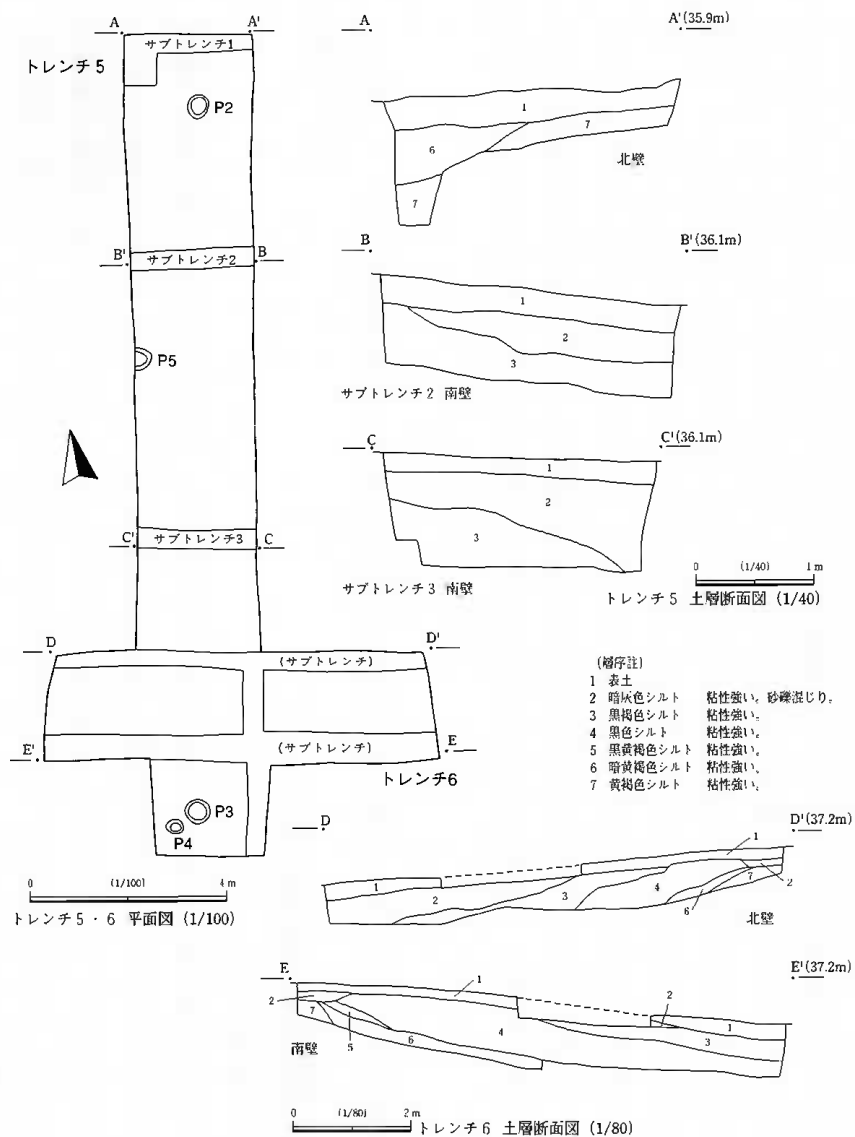
1-7 図 稲村城跡発掘トレンチ平面図及び土層断面図

凡例

- 表土・流土
- 盛土
- 旧表土
- 地山(褐色)
- 地山(白色粘土及び砂岩)

第9図 昭和58年度主郭部発掘トレンチ平面図及び土層断面図 (『千葉県中近世城館跡研究調査報告書第4集』より転載)





第11図 平成19年度発掘C地点トレンチ平面図及び土層断面図



第10図 平成19年度中郭部発掘トレンチ配置図

(ともに『館山市稲村城跡調査報告書』より転載)

また1トレンチでは深さ80cmほどの落ち込みの穴が確認されたが、上面の層はしまりがよくまた洪武通宝などの古銭3枚が中央で出土していることから、柱穴とは判断されていない。その一方で1トレンチの北端では、長さ40cm、幅30cm、厚さ10cmほどの長方形の平たい石が1つ検出された。確認された位置では地固めされた様子がないことから報告書では礎石とは判断されていないが、石が移動している可能性や石の形状からこれを礎石とする指摘もあり、どのトレンチからも柱穴が確認されなかったことから『千葉県の歴史 資料編中世1』では主郭に礎石建物があったことを想定している。この礎石と古銭以外に陶磁器などの出土遺物はなく、生活の痕跡がないことから日常的に使われた場ではないとみられているが、細尾根であった山頂で大規模な造成工事が行われ大きな曲輪が造成されていることから、この場所に「是が非でも居城を築かねばならなかった強固な里見氏の意味が感じられ」と評価されている。

平成11年度の発掘調査は中郭部の中央丘陵東端に飛び出している台地で行われた。字鎮守といい愛宕祠が祀られている。水田部との比高差約10mの台地端にかかる予定だった市道8042号線の改良工事にとまなうもので、台地東部にトレンチ4本が入れられた。時期不明の土坑が1基確認されたのみで遺物は皆無。版築技法による整地跡などの地業を行った形跡もみられず遺構の検出はなかった。

平成19年度の発掘調査は中郭部の丘陵中央部にある曲輪3面で実施された。比較的大きな曲輪であるA地点とB地点でそれぞれ2本のトレンチを入れたところ、古墳時代以前の遺物と遺構が確認されたが、古墳時代以降の削平による平坦面の造出も明らかとなった。出土遺物がないことから年代は特定されていないが、平坦面の造出工事の時期は城郭の造成と結びつけて考えられている。この2面より北側で2段低い位置にあるC地点でも2本のトレンチが入れられた。この地点での発掘では西方向への地山の傾斜とともに縄文・弥生の土器が混在した二次堆積が確認された。これによって小谷に盛土をして平坦地を造成したことが明らかとなった。やはりここでも年代を特定する遺物は出土しなかったが、この工事も築城にとまなうものとみなされた。中郭部で確認された削平と盛土による平坦地の造成も、主郭と同じように曲輪の造成として行われたもので、主郭部以外の広範囲にも確実に城郭としての手が入っていたことが確認された。

註

- (1)『(財)総南文化財センター年報No.12—平成11年度・12年度—』(総南文化財センター、2002年)  
(岡田晃司)

### 3 稲村城跡内の石造物とやぐら

#### (1) 五輪様の周辺

稲村城跡の東麓に通称五輪様と呼ばれるポイントがある。旧状は五輪塔の安置された「やぐら」であったと推察するが、既に崩落しその原形を留めない。天井部・床面さえ認めがたく、従って玄室も全くイメージできない状態となっている。しかし奥壁に接する左右側壁の基部と思しき部位に、僅かながら鋭角に屈曲し前方に延伸する構造を認めるから、かつての「やぐら」の存在が彷彿されるのである。

昭和42年の某日、郷土史家上田勇次郎氏が稲村城跡踏査の折に足を滑らせ、とっさに掴んだのが「元応板碑」（市指定文化財）でありそのポイントがここであったという。このエピソードは今や多く世人の知るところである。

さてこのやぐらであるが、推測規模は幅181cm、高さ117cm、床面の崩落により奥行きは計測できない。ただ床面残存部の僅かなスペースに、木根等に支えられて数基の五輪塔が確認できるのである。一部は転げ落ち、やぐら下（道路脇）に祀られている。こうした現実が該地を「五輪様」と呼称する所以でもあろう。同時にこの「五輪様」は、地域の人々から崇敬を受ける存在であったに違いない。つまりこの地域所縁の、武士階層にあった某氏一族の墓塔が供養塔として建立されたものと考えられる。「元応板碑」の銘文は次の通りである。（板碑は館山市大網の浄土宗大巖院に保管されている。）

「（キリク） 元應元年八月日 」

板碑の法量は高さ38.5cm、幅11.6cm、厚さ2.5cm。規模は小さいが当地には産しない緑泥片岩を材石としている。おそらく秩父産と考えられるが、建立の施主は塔婆のスタイルに「板碑」を選択し、石材を秩父の緑泥片岩に求めたのである。たとえ規模は小さくとも流行の最先端であった板碑の採用を決断し、阿弥陀如来を主尊として供養の所作を行ったのである。供養の施主が自らの生前供養を意図する逆修を本願としたものか、二親や祖先の追善を目的にしたのかはこの銘文からは解明できない。元応元(1319)年の頃は、当地周辺は国人領主安東氏の支配が考えられよう。近くの南房総市本織（旧三芳村）延命寺には、正安3(1301)年在銘の本格的な武蔵板碑（県指定文化財）が存在するから、本板碑の施主はこれを見聞した上で建立に及んだのかも知れない。いずれにせよ里見氏稲村城の時代より遙か昔、2世紀以上も前の出来事である。従って「五輪様」のやぐら造営年代は里見氏の入部以前であったと考えてよい。ただ現存する後記五輪塔は、16世紀建造のものが主軸となっているからまさに稲村城の時代に抵触する。つまり稲村城と本報告のやぐらは、同時期に機能していたことが遺物からも立証できるのである。「五輪様」の施主家は、当然ながら里見氏に麾下することで一族の存続を図った可能性が高いといえよう。

## （2）五輪塔の諸相

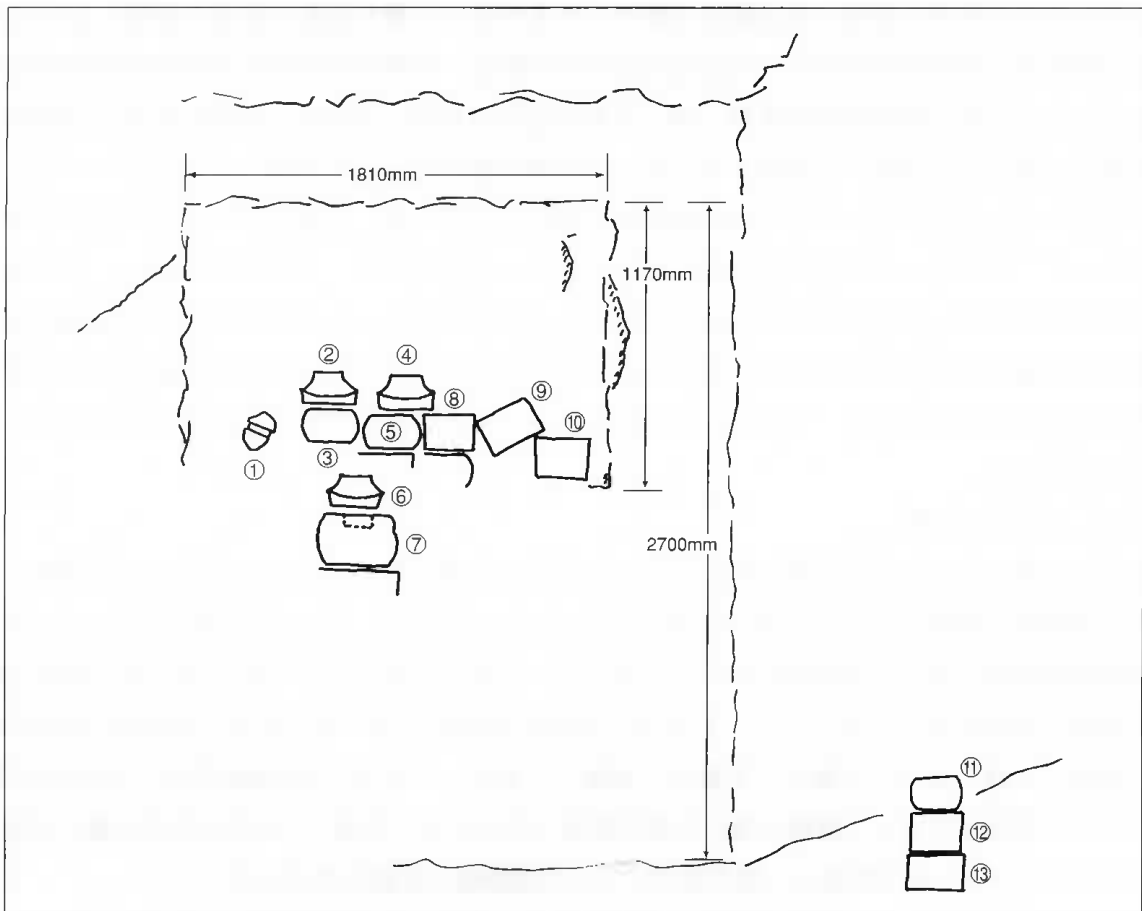
ここでは本やぐらに内蔵する五輪塔について若干の考察を加えることにする。まず基数であるが、現段階で確認できる各部材の点数は合わせて13点である。全てが五輪塔であるものの、現況は散乱状態であるため実数の特定はできない。規模や石材の粒子分析、様式等を細かく観察し分別・整合することによって一具となる可能性も極めて高いのである。各部材の内訳は、空・風輪（一材）が1、火輪3、水輪4、地輪5である。つまりこの地輪の数と、後述する規模の異なる水輪1によって最低6基の存在は特定できることになる。この内Na⑪の水輪、Na⑫・⑬の地輪部はやぐらより脱落し、現在はやぐら下の道路脇に安置されている。

では各部材について形態的な視点から所見を述べてみる。まず特筆されるのはNa⑦の水輪である。土砂や落葉などの堆積から全容は掴めないが、14世紀前半に遡上する遺品と考えられる。



写真1 (左) 稲村城跡内やぐら群A群 五輪様外観

写真2 (右) 稲村城跡内やぐら群A群 五輪様内部



第12図 稲村城跡内やぐら群A群 五輪様遺物配置図



径33cm、高さ24cmを計測する。推定復元高は3尺、約90cmが考えられ当地域では比較的大型の部類に属するものである。損傷部分が多く確かな形状は不詳だが、この部位には五輪塔四門の梵字が刻まれたことであろう。上下を平坦に整形し、上面中央には円形の納入孔が認められる。径が約12cm、深さは約5.5cmである。おそらく火葬骨を納めたのではあるまいか。一族の祖先の墓塔として位置付けられ、本やぐらの中核的な存在であったに違いない。水輪部のさらに下層には角形の石質部材が認められるが、土砂に埋まり崩落の危険があるため未調査である。或いはこれの地輪部である可能性も考えられよう。因みに水輪部上面に納入孔を工作する事例としては、治承5(1181)年の在銘で現存4番目の古塔という福島県玉川村の五輪坊塔、長野県上田市の金王庵塔、和歌山県高野町の高野山西南院塔、鳥取県倉吉市の大日寺塔、そして本県にも近い茨城県つくば市の三村山塔などが知られる。三村山塔では、径約15×9センチ、深さ約8cm、箱形に整形された納入孔から、高さ4.1cmの水晶製五輪塔形舍利容器が確認されている(1)。

次に各部材について順を追って概観する。Na①の空・風輪はかなり損傷が進んでおり、出柄は確認できない。宝珠形の突起も不分明なため上下さえ曖昧な状態である。空輪との間に溝を彫りこむ手法は室町期の特徴でもあり、おそらく16世紀に入ってからのものである。高さは15.5cm。Na②とNa④は火輪である。②は高さ12.5cm、幅24.5cm、④は高さ14.5cm、幅2cmを計測する。形態的な面を考察し、近世初頭の寛永期まで下る可能性を指摘したい。②の隅降棟は緩やかな勾配につくる。軒は厚くし下端をほぼ水平に切って上端に反りを表現するから、軒端が厚くなって尖った格好になる。軒口の切り込みは垂直に近い。④の隅降棟は幾分照り起り状に表現される。軒の表現も②と同様であるが、上端の反りが強くなり軒口がやや外傾するため軒端の尖りがさらに強調されて見える。こうした形態はすでに16世紀中葉には確認されているが、当地域の傾向を見ればやはり近世初頭、17世紀に入る可能性が大である。火輪部上端は風輪下の柄を受ける入柄が穿たれている。前者は円形で後者は方形に近い。Na③とNa⑤は水輪だが、規模的には各々前②・④と一具であったとしてもさほど違和感はない。梵字は未確認であり上下も定かでないため何とも言えないが、現状では心持ち下すぼまりの印象である。やはり損傷部分が多い。最大径は③が24cm、⑤は25cmである。Na⑥の火輪は16世紀初頭までは遡上できよう。頂部水平面に方形に近い入柄が穿たれる。軒は下端にも反りが入り、軒端に向かって左右緩やかな反りを見せるから軒端の尖りは少なくなる。軒口は垂直である。高さ13.5cm、幅22cm、規模としては小さい。Na⑧・Na⑨・Na⑩は地輪である。それぞれ高さ16.5cm・幅21.5cm、高さ18cm・幅25cm、高さ17cm・幅21.5cmを計測する。規模的には⑨が最も大きい。⑦の水輪に一具となるものではない。三者とも高さよりも横幅の数値が大きく、中世の傾向を示しているといえよう。遺存状況から全容の調査が困難であるため、銘文の有無についても不明とせざるを得ない。時代はやはり16世紀初頭であろう。

次の3点はやぐら下に崩落したものである。Na⑪の水輪は高さ15cm、最大幅22.5cm、上下を平坦にし、形よく安定感を見せる。梵字の有無は判然としない。Na⑫・Na⑬は地輪であり、⑫が高さ17.5cm、幅21.5cm、⑬は高さ16.5cm、幅24cmである。⑬は横幅の数値が縦幅に対して1.45

倍も大きく、古様が窺えるとは言うもののやはり損傷が進んでおりそれ以上の追及はできない。⑫・⑬とも銘文は確認できない。各部の特徴からこれらについても16世紀初頭の遺例と考えている。以上の13点とも材石には凝灰質砂岩が用いられていた。含有量や粒子の粗細、色調など若干の相違はあるが、いずれもが安房国内において調達した石材に違いない。

### (3) やぐらと城郭域との関係

やぐらの造営年代は(1)項でも触れたように里見氏の入部以前、具体的には遺品の考証などから14世紀初頭と考えたい。そして17世紀初頭までは機能していたと考える。しかし15世紀末にはすでに稲村城の存在が指摘されており、しかも本やぐらの所在地は東麓とはいえ稲村城の主郭部に位置するのである。そこでこれをどう理解すべきかが問題である。

まずやぐらの造営主体だが、当地域において高い階層にあった人物には違いない。同時期には近隣に安東某氏の存在が知られている。或いは安西氏であるとか丸氏、真田氏などといった国人層の割拠が考えられている。本やぐらの主はこうした階層の一人と考えられまいか。地域的な面からは安東郷を支配していた安東氏所縁の人物も想定できそうである。それぞれの氏族について彼らがまた里見氏入部以前には、稲村城周辺域の旧領主であった可能性も視野に置いた考察が必要となろう。

近年の研究では鎌倉公方足利成氏の命を受けた里見氏初代義実が、対立する関東管領上杉氏勢力駆逐のため初めて白浜に入部したとされる。この頃の房総は上杉氏勢力の影響下にあり、ここ白浜は山内上杉氏の家臣であった木曾氏の支配が知られている(2)。里見氏の入部に際して木曾氏はその軍門に下り、里見氏はまた木曾氏を厚遇して迎えたというのである。真偽の程は分からないが、その後の里見氏の歴史的展開を考えればあながち否定できない事象といえよう。

さて当稲村地域にあっても同様の展開が考えられまいか。つまり当地の有力者某氏は足利氏の御一家として知られた里見氏の威光に服従し、所領域を全面提供することでその恩賞として側近に抱えられたとしたら推断が過ぎようか。里見氏は領国経営において武力制圧に走らず、こうした在地豪族の意向を受けた懐柔策も講じたことであろう。恩賞の延長上をもって主郭内に存在するやぐらの使用が許され、一族の聖域ともいべき本やぐらの存続が保たれたものと考えたい。かくして某氏は、天文の内乱に至るまでは極めて平穏に先祖供養を可能としたのである。それでは嫡流義豊の滅亡後はどうなったか。二者択一の選択肢の中で義豊と共に滅亡の道を選んだか、あるいは傍系義堯側への転身の道を選んだのかは今となっては知る術はない。ただ上述したように、やぐらの内容物に近世初頭を窺わせる遺品の存在を見れば、この一族は後者を選択し存続を図ったものと思料できるのである。

註

- (1) 『三村山極楽寺遺跡群所在石造五輪塔解体修理調査報告書』つくば市教育委員会、1994年
- (2) 佐藤博信「安房里見氏とその周辺」(『里見氏稲村城跡をみつめて 第二集』里見氏稲村城跡を保存する会、1997年)

(早川正司)

### Ⅲ. 前期里見氏調査

#### 1 史料からみた稲村城

##### (1) はじめに

戦国期、房総の地にあって唯一戦国大名化を遂げたとされる里見氏だが、房総におけるその歴史を辿ってみると、近年、天文2年から同3年(1533~34)にかけて領国内で起こった内乱(天文の内乱)によって大きな歴史的転換があったことが注目されている。すなわち、本来庶流であった里見義堯が嫡流である里見義豊を滅ぼし、以後義堯の系統が里見家の宗主権を握った嫡庶転倒からなる政権交代劇である(1)。またそのようなことから、滅ぼされた嫡流の系統のことを前期里見氏と呼び、内乱に勝利した義堯をいわば中興の祖として以後発展を遂げた系統(後期里見氏)とは区別して考える視点も定着してきた(2)。

ただこのような歴史的現象はひとり里見氏のものだけではない。実はその少し以前から天文初頭という時期は、東国の礼的秩序の頂点にあった古河公方家内部における激しい権力闘争や、上総武田氏の一族内における宗主権をめぐる武力闘争を例にあげるまでもなく、嫡庶が争い主客が転倒するといった下剋上というべき状況が広く東国各地に頻発していた時代だったのである(3)。しかもこのような騒乱は、里見氏の内乱が相模小田原の北条氏と武蔵の扇谷上杉氏との激しい抗争とも深く関わっていたことや、隣国上総の武田氏の内乱を引き起こしたように、決して単独現象というものではなく、例外なく周辺諸勢力の政治動向と深く関わり、さらには次なる火種を各地にまきちらしていたのである。つまり里見氏のこの政権交代劇は、戦国時代の東国に普遍的に勃発していた事件の一例であり、しかも戦国争乱の時代の東国を象徴する出来事だったということができるのである。

ところで歴史は常に勝利者のものであることから、滅亡した前期里見氏の歴史は、後期里見氏の手によって抹殺されあるいは都合良く改竄されたりしていることが十分に考えられる。現在、前期里見氏の痕跡がほとんどといってよいほど残っておらず、本来は前期里見氏歴代のなかでも傑出した存在であった義豊が、極めて矮小化されて評価されていたことなども、このような事情が存在することは間違いないだろう(4)。

そしてここで主題とする稲村城は、安房国の領国支配の拠点のみならず、優勢な水上勢力をして江戸湾の制海権を握り(5)、さらにその先の相模・武蔵へ進出しようとしながら、内乱によって敗れた滅亡した前期里見氏が、その政治・軍事上の拠点=本城とした城郭だったのである。しかもこの稲村城は先に触れたように、里見氏の歴史の大きな転換点となった天文初頭の政権交代劇の舞台にもなったところだったのである。このように稲村城は、里見氏や房総の歴史にとってはもちろんだが、東国の戦国時代史においても極めて重要な位置を占める城郭であったことはいうまでもない。

##### (2) 『鎌倉大草子』にみえる「十村の城」について

ところが、同時代的にもまた歴史的にみても、これだけ重要な城郭だったのにも拘わらず、

残念ながら稲村城のことが記述されている同時代の古文書・記録の類はまだ確認されていない。そのことは、前述のごとく敗者の歴史がほとんど残らないことに起因しているとも考えられようが、ただこのことに関して昔から注目されているのが、『鎌倉大草子』の康正2(1456)年の記事にみえる「十村の城」の存在である。ではその部分を次にあげてみよう。それは、

### 史料1

(前略) 上総国には武田入道討ち入りて庁南の城・まりが谷の城両所を取立て、父子是に楯籠りて国中を押領す。房州の里見是に力を得て、十村の城より起りて国境へ勢を出し、所々を押領す。(後略)

とあるものである。そしてここでいう「房州里見」が、他の記述内容からみても房総里見氏初代に位置付けられる里見義実を指すことが間違いない以上、義実が拠ったとするこの「十村の城」が問題となるのである。

だが本題に入る前に件の『鎌倉大草子』について確認しよう。これは成立年・作者ともに不明とされ、原本に相当するものも存在しない。またいわゆる軍記物というジャンルでくくれるところから、その意味では古文書などの一次史料とは区別して検討しなければならないものである。ただその一方で、内容や成立事情については、「おおむね諸家の記録にもとづいて記したもの」とか「15世紀半ばの関東騒乱に際して、京都からその鎮圧に派遣された東常縁の流れをくむ歌人の手に成る物」とされており、特に成立年代については、「戦国時代ころの成立か」あるいは「室町時代に成立」(6)とされているように、房総里見氏が現実に存在していた室町・戦国時代とすることが不動の評価である。

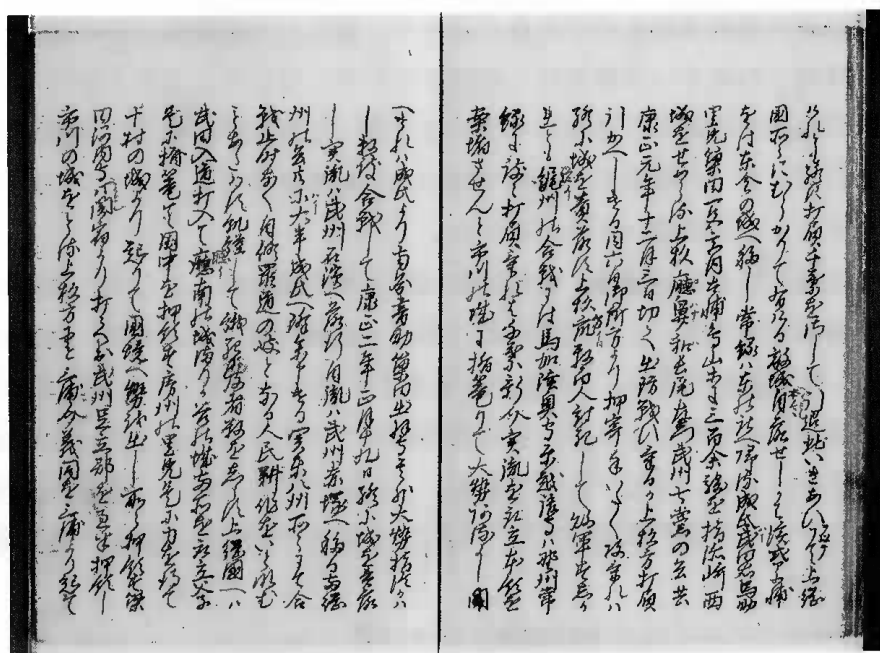


写真3 鎌倉大草紙 (天理大学附属天理図書館蔵)

となれば、記述された年代や内容をそのまま利用するには問題はあるものの、成立時期である戦国・室町時代の歴史的認識や事情をうかがい知るには重要な史料と位置付けられよう。つまり里見氏に関する記事も、東国社会を生きていた同時代の人々の共通認識と見なされることが許されよう。しかもこれが成立した地域は、少なくとも戦国大名里見氏の勢力圏外と考えられ、内乱に勝利した後期里見氏側による改竄や抹殺といった影響についてもまず考える必要はない。そのことから、改めてこの「十村の城」が注目されるのである。

振り返って、史料1は「(足利成氏側の勢力として)上総国に討ち入った武田入道(信長)は、まりがやつ=真里谷・庁南=長南の両城を拠点に国中を押領し、里見義実もこれに力を得て拠っていた十村の城より起ち安房国国境まで出兵し所々を横領した」というのである。まさしく享徳の大乱に際して、房総の地で足利成氏側の勢力として活躍したと考えられる武田信長や里見義実の動向を彷彿させてくれる記事である。そしてここで武田信長が拠点としたとされる真里谷・長南の両城は、戦国時代後期まで一貫して上総武田氏が拠点としていたことも歴史的実案である。

ではここで里見義実が拠っていた「十村の城」とは一体どこの城なのであろうか。現在旧安房国内においてこのような名称を冠された城跡や地名は見あたらず、またそれは過去に遡っても同様である。一般に里見義実が拠った城と伝えられているのは白浜城である。ただ、白浜城やその周辺を精査しても「十村」あるいはそれに類する地名もまったく見出すことはできない。実はすでにこのことは房総史や里見氏研究史上で早くから注目されているのである。管見の限りこの問題について最初に触れているのは、明治19(1886)年刊の内務省地理局編『大日本国誌第三巻下 安房』である。ここでは「(里見)義実本州ヲ平ラケ城ヲ白浜ニカマヘテ之ニ住ス(中略)、其後城ヲ稻村ニ築キ之ニ居ル義冬本里見系図○鎌倉大草紙十村ニ作ル蓋稲村ノ訛セルナリ」とあるように、『大日本国誌』の編者は、この「十村」を明確に「稲村」の訛伝と推測しているのである。

ところが現在もなお房総里見氏研究史上に大きな位置を占める『房総里見氏の研究』(1933年刊)において、筆者の大野太平氏はこの見解をまったく否定し、「十村の城」を「千田の城」とも称される長田城(館山市西長田)に比定したのである。大野氏の里見氏研究史上に与えた大きな業績やそれ以後の里見氏研究史の停滞とも相まって、以後これが「十村の城」についての定説となった感がある。

しかし、確実な史料(「関東禅林詩文等抄録」)からも明らかになってきた「房州太守」里見義実の居城としては、現在みる長田城は、その規模の小ささや単純な構造さらに安房国全体からみた立地からみてもまったく相応しくなく、やはりそれに位置付けられるのは稲村城しか見あたらないのではないか(7)。したがって大野氏も自ら述べるように、この「十村の城」=「長田城」説は牽強付会というべきものであろう。

### (3)『鎌倉大草紙』諸本の確認と「十村の城」の再検討

そこで次なる課題は、改めてこの「十村」を「稲村」の誤り=誤写とみることの検証が必要となってきたのである。したがってその確認のためには、世上に流布する『鎌倉大草紙』の諸



本にあたってその可能性を確かめることが必要となる。『鎌倉大草紙』にみえるこの記事が、同時代史料のほとんど存在しない稲村城研究について極めて重要な位置を占めるだけに、このことが必須の作業となったのである。またその際、『鎌倉大草紙』には当該記事以外にも里見氏の記事が散見するだけに、その点についての確認も合わせて行うこととした。

現在国文学の立場から『鎌倉大草紙』の書誌学的検討を精力的にすすめている田口寛氏によれば(8)、『鎌倉大草紙』の諸写本は概ね以下の8系統に分類されるという。

- 彰考館本系統
- 新田本系統
- 早大6冊本系統
- 山内本
- 中山弘矩本
- 鶴舞本系統
- 鈴木本系統
- 東博本系統

したがってこれらについて、稲村城跡調査検討委員会の天野努委員と筆者が分担し可能な限り確認作業を行った。またそれとは別に、近時その存在が紹介された千葉市立郷土博物館所蔵本や國學院大學図書館所蔵本についても同様の作業を行ったのである。結果、残念ながら件の記事については、○山内本に「中村の城」とある以外は、すべて例外なく「十村の城」とされていることが確認された。また○山内本の「中村の城」にしても、「中」が「十」の誤写であることはすでに該本中でも指摘されており、これは単純な誤写と判断される。

もちろんこれらはすべて写本であるところから、この結果だけで片付けるわけにはいかないが、諸系統写本の確認作業がひとまず終了した点からいえば、「十村の城」が「稲村の城」の単純な誤写であった可能性は低くなったといえよう。

では誤写の可能性が少ないとすれば、どのようなことが考えられるだろうか。そこで注目されるのは、この「十村の城」は「稲村の城」を音通で呼んだものではないかという峰岸純夫氏の説である(9)。つまり「稲村」を「とうそん」と音通で読みそれを当て字として『鎌倉大草紙』の筆者は「十村=とうそん」としたのではないか、ということである。また峰岸氏はそのことを補強するものとして、かつて稲村城下にあった浄土宗寺院の稲村院が「とうそんいん」と呼ばれていたことを挙げている。つまり、現在こそ「稲村」は「いなむら」とのみ読み呼ばれているが、かつては「いなむら」あるいは「とうそん」と併称されていたのではないか、という指摘である（なおこの稲村院は、旧本寺にあたる館山市金台寺にある元禄8(1698)年成立の「稲村院由緒書」によれば、「開山されてから享禄元(1528)年頃までは稲村院と号する小院が存立していたがその後130年余り中絶していた。それを院号が伝承されていたところから寛文2年に再興されたが、数年にしてまた廃絶された」という(10)。

以上このように、『鎌倉大草紙』にみえる「十村の城」については、状況からみても稲村城とするのが相応しく、また問題の表記の違いについても、誤写の可能性よりは、峰岸氏の指摘のように、当時稲村城が音通で「とうそんの城」とも読み呼ばれていた、という事実を反映したものだだったと考えた方が、可能性としてはより高くなってきた。

そして最も重要なことは、『鎌倉大草紙』中に里見氏や安房国に関する記事は散見するものの、里見氏や安房に関わる城郭の名称としてはこの「十村=稲村の城」だけが登場することであろう。稲村城が安房国や里見氏を象徴する城として描かれているのである。もちろんここに

あるように果たして稲村城に里見義実が拠っていたかどうかは不明だが、前期里見氏＝稲村城という構図が『鎌倉大草紙』成立の時期には共通認識として存在し、またその事実がさまざまな史料からも確認されていたのかも知れない。そしてそのことをふまえた作者によって記されたのが史料1ということなのではないだろうか。

#### (4) 稲村城に関する史料

今回改めて稲村城に関する文献史料の博搜に努めてみたが、残念ながら室町・戦国時代といった同時代の史料は『鎌倉大草紙』以外みつけることはできなかった。では明確に「稲村(城)」の存在が記された史料の嚆矢はどこに求められようか。この点、戦国時代に生きた人々がまだ多数存命していた寛永8(1631)年に成立したという『里見代々記』等に登場することがすでに指摘されている(11)。しかし筆者のみるところ、これらの史料は内容からも寛永年間に成立したというよりは後世何らかの人がその時代に仮託して成立した、と考えた方が妥当であろう。したがって検討対象からは除外したい。

そこで注目したいのが、小田原北条氏に関する記事を集録した文献『北条五代記』の存在である。該書は、北条氏の家臣であった三浦浄心(茂正)が慶長年代に編んだ『慶長見聞集』のなかから、浄心の旧友某が北条氏に関する記事を選び出してまとめたものされ、ほぼ元和年間(1615～24年)の成立とみられている(12)。そしてそこには稲村城が前期里見氏の居城として明確に登場するのである。

もちろんこれとて、前期里見氏滅亡とともに稲村城が廃されてからは90年近くが経過しているものである。ただその一方で、慶長19(1614)年までは里見氏が江戸幕府傘下の大名として確実に安房地に存在している事実から、『慶長見聞集』『北条五代記』はともに里見氏に関して同時代の史料とみなせよう。しかも『北条五代記』中の里見氏に関して詳述された項(房州里見家の事)によると、浄心は実際に安房国を尋ね、その地の古老に房州里見の先祖を訪ねたとしているのである。

そしてさらにここで注目したいのは、その最後の部分に「こゝに房州衆に紹之と云う連歌師、里見の系図を持てり。予(三浦浄心)これを見しに、清和天皇より忠義まで二十七代、里見の始祖義俊よりは十九代、義豊よりは七代なり(以下略)。」とさりげなく書かれた一節があることである。このことは従来まったく看過されているが、非常に重要な記事である。というのは、三浦浄心が会ったという連歌師紹之は当代きっての連歌師里村紹巴の弟子だった房総出身者で、豊臣政権下の京都における文化人サロンの常連として史料上にもしばしば登場し、なにより里見義康の後見とまで評価されているように里見氏と極めて関係の深い実在の人物だったのである。そしてその消息はほぼ寛永期まで辿ることができることから(13)、浄心が会ったということにもまったく矛盾はない。

つまりこれらの記事の存在によって、里見氏に関する『北条五代記』の記述が、まさしく里見氏と深く関わっていた人や同時代に生きた人々の証言や歴史認識に依拠して記述されていたらしいことが明確にうかがえ、よって里見氏に関する同時代の史料としても十分に検討に値す



写真4 北条五代記（筑波大学附属図書館蔵）

ることが認定できたのである。

もちろんそのとき現実に存在していた里見氏は、前期里見氏を滅ぼした義堯によって興された系統（後期里見氏）であるだけに、『北条五代記』が後期里見氏の記述にそのほとんどを費やしていることは当然である。が、そこで仁者として絶賛している里見義高（堯）は、同時代の他史料からも同様のことがうかがえる人物であり、その記述も歴史的事実（同時代評価）を大きく誇張しているものではない(14)。そして肝腎の稲村城については次のように記されているのである(15)。

## 史料2

（前略）其後、安房の国は、里見義豊持国たり。ていれい、里見稲村と云在所に新城を興し、居城とす。故に稲村殿とも申しき。（以下略）

ここから稲村城は、①稲村という在所（地名）に築かれたことからくる名称で、②里見義豊によって新たに築かれたこと、③城主は里見義豊だったこと、④またそのことから義豊は在所名で「稲村殿」とも称されていた、というようなことが読み取れたのである。

そしてこの義豊は、近年の研究によって東国の大名層とも幅広い外交関係を結び、さらに鎌倉五山の禅僧を媒介に当代一流の文化人・宗教人とも親しく交わり、鎌倉禅林の中心人物である玉隠から「文武兼備」の「濁世の佳公子」と称賛されるいわゆる文武両道の武将であったこと、さらに政治的にはその有力なる水上勢力を駆使しての鎌倉への侵攻等もなし得ていた事実をみれば、前期里見氏の歴史上において非常に大きな存在だったのである(16)。

ただ里見義豊の実像がその大きさゆえに、後期里見氏の世界で極めて不当に扱われていたのと同様、義豊と一体化していた稲村城の存在もほぼ義豊と同じような軌跡を辿ったととらえら

れよう。それでも多くの人々の間では、稲村城は義豊や前期里見氏の存在とともに同時代に認識され、また後々まで強く記憶され続けたのであろう。

となれば、宗家を篡奪した里見義堯が、その直後の居城として岡本・宮本・滝田城などを転々とする(17)一方、稲村城に入った形跡がないのも、稲村城が前期里見氏、とりわけ里見義豊を象徴する城だっただけに、内乱直後のさまざまな事情によって入ることができなかった、と考えることも可能かも知れない。

#### (5) おわりに

以上、ここまでみてきたことから、稲村城は前期里見氏の本城だったことは、ほぼ同時代の史料からも裏付けられたといえよう。また特に、里見義豊と一体化していた城郭として長く人々の記憶に留められたように、稲村城は滅ぼされた前期里見氏、とりわけ里見義豊の存在を象徴する城郭であったことも間違いないだろう。

#### 註

- (1) 天文の内乱の意義やその理解については、滝川恒昭「房総里見氏の歴史過程における天文の内訌の位置付け」(『千葉城郭研究』2号、1992年)、岡田晃司『さとみ物語』(館山市立博物館、2000年)、川名登編『すべてわかる戦国大名里見氏の歴史』(国書刊行会、2000年)等を参照されたい。また以下特に断らない限り、里見氏についての記述は後段の二書に拠っていることを承知されたい。
- (2) 註(1)の各書および、滝川「房総里見氏と江戸湾の水上交通」(『千葉史学』24号、1994年)。
- (3) 前掲註(1)滝川論文。
- (4) 佐藤博信「前期里見氏の歴史的的位置」(『里見氏稲村城をみつめて 第三集』里見氏稲村城跡を保存する会、1998年、のちに同氏『中世東国政治史論』塙書房、2006年に収録)。なお同氏の房総関係の論文の多くは同書に収録されているため、以下特に支障がない限り書名のみを掲げる。
- (5) この点、佐藤博信『江戸湾をめぐる中世』(思文閣出版、2000年)、同『中世東国政治史論』(塙書房、2006年)等を参照。
- (6) 『国史大辞典』「鎌倉大草紙」の項(白井信義執筆分)、『新編埼玉県史資料編8』解説、等を参照。
- (7) 滝川「房総里見氏の歴史における稲村城」(『千葉城郭研究』第4号、1994年)
- (8) 田口寛『『鎌倉大草紙』原態本への遡及』(『軍記と語り物』41号、2005年)
- (9) 峰岸純夫講演録「中世城館跡の調査と保存・活用一里見氏稲村城を中心に一」(『里見氏稲村城跡をみつめて 第二集』里見氏稲村城跡を保存する会、1997年)
- (10) ちなみに享禄元年は、里見氏の政変が稲村城を舞台にして起こる数年前のことである。
- (11) 「稲村城跡をめぐる人々のあゆみ」(『里見氏稲村城跡をみつめて』里見氏稲村城跡を保存する会、1996年)
- (12) これらの点については、萩原龍夫「北条五代記」解題(同氏校注『戦国史料叢書1 北条史料集』人物往来社、1966年)、『国史大辞典』「北条五代記」の項(佐脇栄智氏執筆分)を参照。
- (13) 佐藤博信「中世東国における一連歌師の軌跡一安房の昨夢斎紹旨の場合一」(『金澤文庫研究』305号、2000年、のちに同氏『中世東国政治史論』に収録)参照。
- (14) 佐藤博信『中世東国日蓮宗寺院の研究』(東京大学出版会、2003年)参照。
- (15) 史料化にあたっては、『北条五代記』版本のなかでも最も古い寛永18(1641)年版の筑波大学附属図書館本に拠った。
- (16) 註(4)に同じ。
- (17) この点については、滝川「岡本城に関する史料 若干の解説と検討」(『千葉県南房総市岡本城跡調査報告書』南房総市教育委員会、平成22年3月刊行予定)において指摘した。

(滝川恒昭)

## 2 前期里見氏の伝承

稲村城の問題はすなわち前期里見氏の問題である。このような視点から、本検討委員会では稲村城に関する史料の捜索につとめるとともに、前期里見氏の子孫という家系を有する家を訪ねることで、前期里見氏についての関連史料と、さらに稲村城についての情報が残されているか、といった点についても確認することとした。以下その報告をする。

### (1) 群馬県東吾妻町川戸 里見武男家

里見武男家は、里見義豊の子義員を祖とする系譜伝承を持ち、江戸時代に建築された広大な屋敷を今に残す旧家である。家系に関わる所蔵資料には、①清和源氏里見家系図 ②由緒書 ③位牌等があり、またその他に④天正七年二月廿日付の富澤大学助宛武田勝頼朱印状（中之条町歴史民俗資料館寄託）を有する。

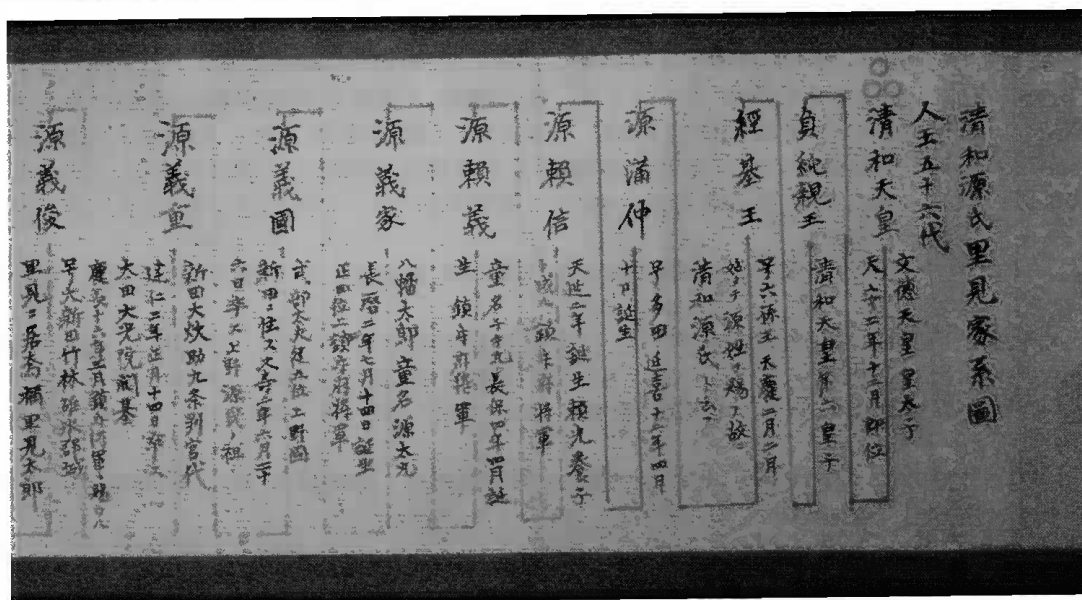


写真5 清和源氏里見家系図（里見武男氏藏）

まず①によると、里見義豊の子義員は竹若丸・又三郎また刑部少輔を称し慶長8年8月15日に死亡した。その子義宗は又三郎・縫之助を称し村上城主（越後か）だったが、元和元(1615)年正月に大坂へ発向、同年5月の大坂夏の陣にて戦死した。その子義仲は、父戦死の際、その家系が絶えることを憂いた父の計らいによるものか、その地を離れ上野国川戸の中澤新左衛門方に寄寓した。新左衛門は「其形相ヲ見テ壯トシ養子ト」する。後に義仲は中澤新左衛門と称して、ここに里見の家系を残したとするものである。その後19世紀初頭頃に地頭依田氏の代官となった蓮翁が、中澤から里見に改姓を命じられ現在に至るとされる。ただ系図を仔細にみると、その子で天保10(1839)年に幕府の「作事方勘定役ニ抱ト」なった里見孫三郎義道が後に富澤良輔と称しており、その関係で富澤家伝来資料というべきものが現在里見家の資料として伝わることになったと考えられる。したがって②③④はいずれももとはその富澤家に関わるものとみてよい。

なお①によれば、里見義実「嘉吉元(1441)年五月二日入安房国」り、その後白浜城にあっ



たが、次々代の義通の時の延徳3(1491)年夏に「白浜移稲村領」ったという。

(2) 群馬県下仁田町小坂 里見哲夫家

里見哲夫家は、母屋その他が群馬県特別貴重文化財に指定され、幕末には、水戸天狗党と高崎藩の兵がこの付近で交戦した際被弾したという弾痕がいまだ門の壁等に残されているという、立派な屋敷構えを残す当地きっての旧家である。

その家系は、安政3(1856)年の奥書を有する成巻された「源氏里見系図」や、やはり同年に時の当主里見義業によって記された覚書(下書き)風の「里見家系伝記」によれば、里見成義の三男という里見右衛門佐義光から始まるとされる。その義光は天文の内乱の際、義豊の子で僅か二歳であったのちの家重を伴って上野国に逃れたが、家重は先祖の旧領である里見荘に落居、成長の後には里見城に拠って武名を各地に鳴らした。そして武田信玄の上野攻略の際に討たれるが、その子義政が彦根井伊家に仕官し、以後その家系を伝えたとする。また義光は、下小坂村に落居し、その子孫は小坂村および信州追分宿に分かれ、以後それぞれが繁栄したことで、両所の太祖と位置付けられたとする。

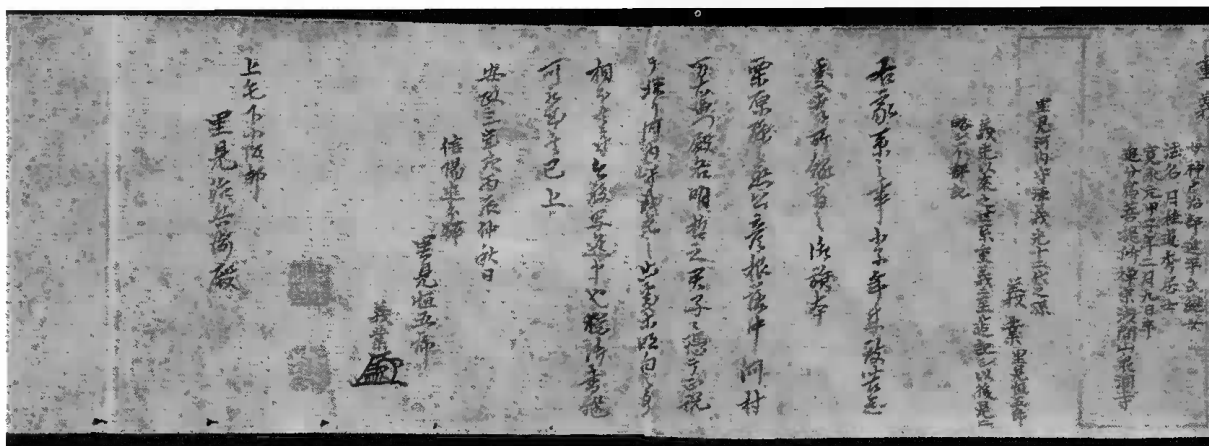


写真6 源氏里見系図(里見哲夫氏藏)

ただし、もともとの家には遠祖が房総里見氏という口伝があったのみで、江戸時代末期の当主里見義業はその家系を裏付けられないことに長年窮していたらしい。そこであるときいくつかのつてによって、当時彦根藩中において諸家系図に通曉していると評判の河村万右衛門なる人物に家系搜索を依頼したところ、安政2年3月になって、河村万右衛門から前述のごとき結論を得たことで「積鬱一時ニ散シ」たという。そのような事情からいっても、房総里見氏と直接つながるような古い資料は当家には残されていない。

ところがここで注意されることは、現在同家には、里見義実の肖像や供養塔といった、他にあまり類例のない珍しいものが残されているのである。ただその肖像画の裏書きによると、これは小坂里見氏の系図が作成された安政3年の翌年に描かれたものであることから、この時期小坂里見家では先祖が明確になったこと(作成されたこと)を契機にその顕彰活動を一気に行ったらしく、その際房総里見氏に関わるさまざまな物が作成されたものと思われる。となれば義実の供養塔にしても同様に考えてよかろう。また義実の供養塔については、本多龜三『群馬

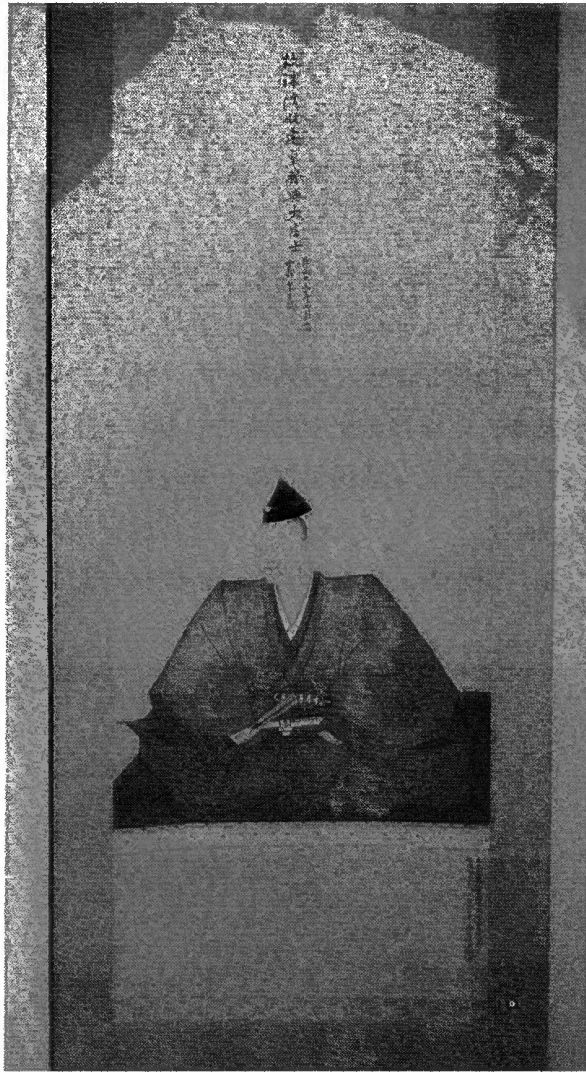


写真7 里見義実肖像画（里見哲夫氏藏）

『県北甘楽郡史』（1928年）にも指摘がある。

なお彦根藩に仕官した里見義豊の子家重につながる系統だが、文化4（1807）年内藤出羽守家中の里見藤兵衛が所持していた系図（「里見叢書」所収）によれば、義豊の子氏家が天文の内乱に際して下総に落ち延びたが、成長後は上野相生家に寄食し、その子景家の代になってはじめて井伊家に仕官し、義正はその子ということになっている。

（3）神奈川県鶴沼（豊後竹田）里見菊雄家  
当家は天文の内乱に滅ぼされた里見義豊の嫡子竹若、のちの家宗を祖と伝える家系である。この家宗は里見義豊から続く家系に共通してみえる人物であるが、義豊との間に義員なる人物を数えるケースと、直接義豊とつなげる場合があり、当家の場合は後者に該当する。その家蔵系図によれば、竹若（後の家宗）は房州を逃れ出羽国に落ち延び、後に同地の最上義守に仕え刑部少輔と改め山形上ノ山城主となったが、天正年中に出羽を退散した後は越後中澤郷に至りそこに住した。その後松平忠輝が越後高田に入部後は忠輝に仕官したが、元和元（1615）年の大坂夏の陣には越前松平忠直に従軍して真田幸村

勢と戦い戦死したという。その子宗基は、父とともに松平忠直の手勢として大坂夏の陣に従軍したが、父戦死の際には父の仇をすぐに討つなど活躍し、忠直またその子光長に仕官し、光長の越後高田移封とともにその地に移り越後中澤に住することになった。

その後中澤に改姓したこの子孫は再び里見姓に戻るが、その間いくつか主家を変えながら、最終的には中川家に仕官して豊後国竹田で幕末を迎えたいらしい。ただし、今回の調査で確認できた系図は、元あった系図を近年筆写したもののためか不明瞭な部分が多く、これらの点について必ずしも明確ではない。がともかく里見義豊に直接つながる系譜伝承を持つ家として、該家は今後も調査が必要と思われる。なおこの家系については、『系図纂要』所収の里見系図にもみえるが、ここで紹介したものとはいくつかの齟齬がある。また稲村城については、当家の系図では義通段階の居城とする一方義豊の項にはまったく所見がないが、前述『系図纂要』所収の里見系図では、義通が延徳3（1491）年に白浜より稲村城に移転し、義豊は天文3（1534）年4月6日に稲村城異方山下で生涯（死亡）したとする。

#### (4) おわりに

以上、前期里見氏につながる伝承を持つ家系のいくつかを、今回改めて調査することができたが、これらの歴史的事実の正否はともかくとしても、そこに共通する大きな傾向があることが理解できた。それは①房総を落居した理由が天文の内乱によること、したがってその系譜に稲村城の存在についてもほぼ触れていること、②落ち延びた人物は、ほとんどが義豊の子、またそれを補佐した一族であること。③落ち行く先は、上野国や出羽国（戦国期出羽上ノ山や東根に里見を称する一族があったことは事実である）というように、里見氏所縁の地であること。④ほとんどが終始里見姓で通すわけではなく、落居先で改姓するが後に里見氏に復姓していること、といったところであろう。

このうち、①については、内乱に際して房総の地から逃れた一族や家臣達が相当数あったであろうところから、このことはそのような歴史的事実が存在したことの反映ととらえられよう。また家系を創出するにしても、いかにも相応しいこと。②は、前期里見氏にとっての義豊の存在の大きさの反映とも、また落胤伝説として創出しやすい、というようなことが考えられ、③は、実際はともかくとしても話として成立しやすいこと、さらに④については、もし仮にそのような歴史的事実があった場合は、まず現地における既存の家系に人夫あるいは養子として入ったようなことが大いに考えられるので、そのようなことの反映ととらえることも可能であろう。

今回は前期里見氏や稲村城に関わる観点からの調査であったが、現在でも全国各地に房総里見氏の子孫という家系伝承を持つ家は多い。まずそれらの家で所蔵される資料の内容確認調査が非常に重要だが、合わせて江戸時代において里見氏につながる家系を有することが、その地域においていかなる意味を持っていたのか、といった観点から調査をすすめることも重要と思われる。今後とも継続していきたい。

(滝川恒昭)

### 3 寺社の伝承

前期里見氏の居城と伝えられてきた稲村城跡の周辺には、平成19年度報告書で報告されたように里見氏に直接関わる由緒を持つ寺社が多数存在している。①稲区では鎌倉建長寺の友峰等益が応永2(1395)年に創建したという由緒をもつ臨済宗玉龍院が、里見義豊を開基と位置づけられ彼によって再建されたと伝えられている。また②稲村城跡直下の浄土宗の稲村院が、里見義豊の時代である享禄元(1528)年に中絶するまで小院として存在していたとされる。さらに③現在館山市上真倉にあって里見義康・忠義の供養を行い里見家との関わりが予想される曹洞宗の長光寺が、慶長期まで津梁院として腰越区に所在した。④かつて二子区にあった日蓮宗妙蓮寺は里見家の姫君梅田姫が開基したと伝えられ、また⑤安東区の高田寺も里見家の姫君である高田姫の開基と伝えられ、それは天文5(1536)年に没した人物とされている。⑥山本区の曹洞宗龍淵寺も大永元(1521)年に里見中務大輔が開基したとされ、⑦後期里見氏の菩提寺とされる曹洞宗延命寺でさえもが至近に所在しているなど、いずれも稲村城跡の半径1 km以内という近

い位置にあり、その立地はいかにも稲村城の存在を中心に展開しているがごとくである。

稲村城跡の北東1 kmにある竹原区の日枝神社はかつて今宮山王と呼ばれ、京都の比叡山山王宮、江戸城鎮護の山王宮に擬えて稲村城の忌門守護の霊神としての由緒を持つ。王城鎮護という役割を強く意識した神社である。稲村城が里見氏の統治拠点であったことに対応した由緒といえる。この神社では大正末頃まで社前の馬場で競馬が行われていた。犬狩神式あるいは犬追の神事といい、安房国総社である鶴谷八幡宮の命婦家に取り仕切った神事であった。

平成21年7月に日枝神社旧神職今宮家と鶴谷八幡宮命婦武内家の調査を実施し、神社の由緒や神事に関する史料を確認することができた。寛永元(1624)年に古記を写したという犬狩神式の由緒書では、往古より鶴谷八幡宮において命婦家によって執り行われていたとしたうえで、「当郡竹原里山王馬場ニ移祭式、雖然当命婦者固為祭主故掌之」こととなり、「竹原馬場者里見氏居城稲村故以命移之」したとしている。これは里見義実が古来の由緒のとおり命婦家に祭式を行わせることを許した後のことと伝えているが、今宮山王の競馬は里見氏の居城である稲村城があるからこそ里見氏の命によって場所を移して執り行うことになったと説明している記述である。

里見義実が鶴谷八幡宮の別当寺に那古寺を当て、その住持には当主の弟を据えて里見氏による安房支配の一翼を担わせた。それはその後の世代にも引き継がれている。里見氏から大きな政治的役割を与えられていた鶴谷八幡宮の神事が今宮山王へ移されて行われたことは、稲村城が里見氏の本城として機能していたからこそと考えることができる。(岡田晃司)



写真8 武内家来歴(武内輝雄氏蔵)

## V. 総括

### 1 稲村城跡周辺城跡群

〈山本城跡〉 所在 館山市山本

#### 地理的環境

稲村城跡の南西1 kmほどの、館山平野東端に面する丘陵の一画に占地する。曹洞宗龍淵寺をはさむように丘陵の支尾根が二本南方に伸びており、そのうちの平野に面した西方支尾根の、付け根にあたる部分に造られている。西方直下に館野小学校が、東側には龍淵寺の境内地が広がる。

尾根先端部直下の屋敷は、屋号を「堀之内」という。

#### 歴史的環境

安房国分寺の直近に位置し、南方は小さな谷戸が入り込んでいて、古代から生産力の高い地域であったと考えられる。里見氏入部前に勢力を有した、いわゆる安房四氏のうち神余氏を滅ぼした山下(やまもと)氏は、この山本を苗字の地とするともいわれている(1)。

また、「里見分限帳」に載る近世初頭に当地を知行した山本清七は、必ずしもこの山下氏とはつながるとは言えないという(2)。しかし、この山本城を居城とした可能性は高い。

#### 城の構造

南北長軸50 m、東西短軸35 mほどの小さな単郭の城である。支尾根の基部を掘り切って、堀に接する郭の北側に土塁を造る。現在、土塁中央に虎口状の開口部がみられるが、これは後世の改変である。

この堀底が郭東側下に伸びて腰曲輪を造るが、郭東側の土塁に折りが入った部分があり、ここで開口している。横矢のかかる構造となっており、これが本来の虎口である。

このように折りを設けた虎口は、管見の限り安房国内ではあまり類例(3)がなく、戦国時代でも後半になってからの築造(あるいは改造)をうかがわせる。

一方、尾根先端部に向かう側には、現状では土塁の痕跡も見当たらない。小規模な切岸による段差のみで画するだけである。先端部直下の屋敷が堀之内の屋号をもつところから、現在の龍淵寺、もしくはこの屋敷が城主の居館であり、尾根先端部が登城路となっていたためであろう。本来の大手口は、前述の折りの入った虎口を出て、堀切を渡り丘陵上に伸びていたのではないか。

#### 城の性格

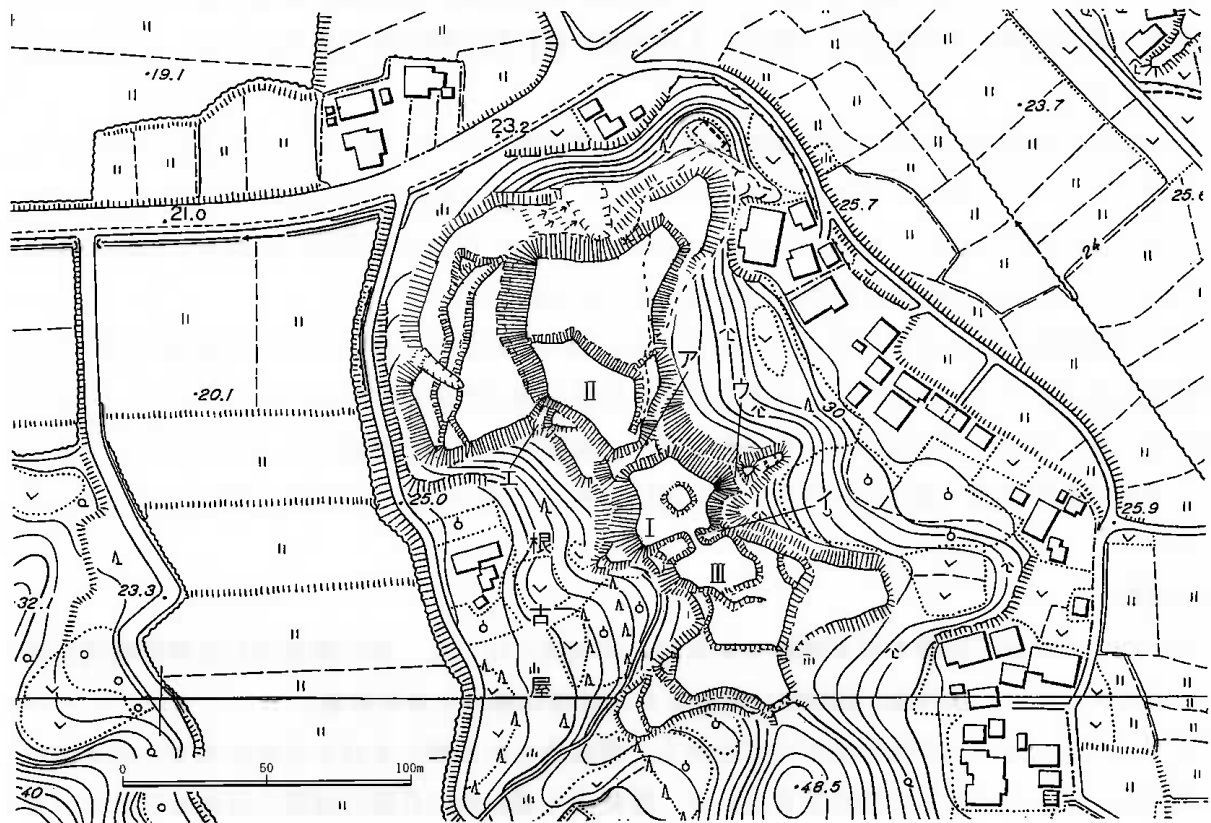
稲村城跡の直近に位置する本城跡であるが、小規模とはいえ、虎口構造からは戦国時代も後半の様相を呈する。稲村城と同時代に存在した可能性は薄いとみられる。

城下の屋敷が堀之内の屋号をもつことから、現在見られる城に先行するかたちで、山下氏などの居館があった可能性は否定できないが、里見氏入部以前の氏族の城郭とはみることはできない。





第13図 山本城跡縄張図 (作図：遠山成一氏)



第14図 大井城跡縄張図 (作図：遠山成一氏)

註

- (1) 齊藤東湾『安房志』
- (2) 滝川恒昭「『里見分限帳』に関する一試論」(『千葉城郭研究』第4号、1996年)
- (3) 鴨川市の金山城跡は、岩盤を削り出した虎口で折りと枳形空間を持つ構造をとる。天正8～9年の正木憲時の乱時に史料に登場する当城は境目の城として位置づけられ、境目ゆえに発達した防御構造をもつ戦国末期の所産といえる。それに比して、山本城跡は里見領国の中心部に位置しており、規模的にも小さい。なお、柴田龍司氏は『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ 一旧上総・安房国地域一』(千葉県教育委員会、1997年)において、「山本城跡」のなかで小規模な理由を「当地域が里見氏領域内では常に安定したことに起因」とすでに指摘している。

<大井城跡> 所在 館山市大井

#### 地理的環境

滝川上流となる館山平野の東側最奥部にあり、現在は旧丸山町(南房総市)方面から館山市内に入る国道128号線に接して位置する。しかし、中世には旧丸山町加茂からの道は、大井城跡より北側へ800mほどの館山市竹原地区に通じていた(1)。このため、現状では街道を抑える城と見てしまうことになりがちであるが、城の性格を考えるうえで注意が必要である。

山を隔てて丸山町と接しており、戦国期に入ると和田町に勢力をおいた正木氏との境界線沿いとなったものと考えられる。

#### 歴史的環境

大井は「和名類聚抄」に載る古代安房郡八郷の一つ。周辺の安東、水岡地区には、中世墳墓であるやぐらが多く存在し、鎌倉時代には丸氏一族といわれる安東氏による開発が進んでいたものと思われる。本城跡は安東氏の支族大井氏の居城と考えられている。しかし、根小屋地名(2)の存在、および後述のように構造上からみて、城郭の使用下限は戦国期まで下ることは間違いない。

その点、天正12年12月には里見義頼が「大井村」にある手力雄神社を修復(3)しており、当地は里見氏の支配下にあったことがわかる。それゆえ、本城跡は最終的には里見氏の使用がうかがえる。

#### 城郭構造

安房郡内では希少ともいえる直線連郭の構造をとる。しかし、上総や下総にみられるような舌状台地の先端を主郭とする形式をとらず、三郭想定されるうちの中央の郭Ⅰを主たるものとする(4)。

根小屋地名は西側麓に残るが、屋敷は現在無住となる一軒のみ存在し、日当たりのよい東側麓に屋敷が広がる。問題は、なぜ居住環境の比較的悪い西側麓に、あえて根小屋を設けたかである。これは地形的にみて、多分に、支尾根により両側を防御された微高地が西麓に広がっていたことがあげられる。さらに、正木氏の支配領域となる旧丸山町・和田町方面に直面する東側を避けたからとも考えられる。

本城跡は、すでに『日本城郭体系6 千葉県・神奈川県』(5)で取り上げられている。ここで

は略測図とともに、城跡について記述があるが、先端の八幡社のある郭Ⅱを主郭ととらえている。

しかし、先端の郭Ⅱは広いわりには、中央寄りの八幡社のある地点を切岸で一段高くして防御するだけとなり、神社造営による改変を差し引いても求心性に乏しい。この点において、堀切アとイではさまれ、東側に伸びる支尾根は堀切ウで切られた、隔絶性の高い中央の郭の方が中心とみなされる。

また、郭Ⅰに接する郭Ⅲは、現在東西に横断する道オにより堀切状に南側台地と切られている。しかし、聞き取りによると、東麓の住人が西麓の畑や田の工作のために利用したとのことで、後世切られた可能性が高い。よって堀切とみなすことはできない。この郭Ⅲも段差（切岸）のみでの防御とみることができる。

### 城の性格

ところで、本城跡を戦国期後半まで使用していたとみなす根拠としては、前述のように根小屋地名があることと、構造上の理由をあげた。その理由とは、腰曲輪を多用していることであり、とくに根小屋のある西側に顕著である。

松岡はその論文で郭Ⅰを中心と考え、それも「この城が想定しているのは、この一騎駆けの土橋（本図でいう堀切イの土橋；報告者注）で出入りする軍勢で勝負する程度の相手」とし、「上豪層の日常生活に密着した小規模な城」(6)と結論づけている。

けだし卓見というべきであるが、はたして土豪層（大井氏を指すか）にこれだけの腰曲輪を造成する必要があったろうか。郭Ⅱ西側の広い腰曲輪は、堀工によって、郭Ⅰ下の腰曲輪にまわることを防いでいる。その他、西側の支尾根なども執拗に腰曲輪や平場を造り出している。

このような大がかりな工事をともなう造成を、大井氏が行ったとみるよりは、里見氏領国に取り込まれた後、同盟関係とはいえ正木氏の支配領域と接する城郭として、里見氏によってなされたとみるべきではなかろうか。

実際、天正8～9年の正木憲時の乱では緊張状態が生じており、本城跡は戦国後期まで小規模ながらも根小屋をとまなう拠点的城市として、里見氏によって維持されていたと考えられる。

註  
(1) 岡田晃司氏の教示による。

(2) 城下集落を示す本州の愛知県以東にみられる城郭関連地名で、永正年間より古文書に現れる。このことから、15世紀末ころには拠点的城市にとまなう城下集落として形成されていたものと考えられる。

(3) 『千葉縣史料 金石文篇一』千葉県 1975年

(4) 松岡進「戦国期城館遺構の史料的利用をめぐって」(『中世城郭研究』第2号、中世城郭研究会、1988年)。松岡氏は中央の郭を主たる郭としており、首肯できる。ただし、後述のように本報告書は、松岡氏の指摘する本城跡の性格とは異なり、拠点的城市との見解をもつ。

(5) 大木衛編集 新人物往来社 1980年

(6) 註(4) 論文

<明星山の城> 所在 館山市竹原

## 地理的環境

稲村城跡より北東へ約2 km離れた、平久里川の支流滝川上流部にあたる市域北東に位置する。現在、旧丸山町加茂方面からの道は、国道128号線として大井城跡の北直下を通っている。しかし、中世の本道は、加茂の<sup>みかど</sup>神門地区から山中を越えて竹原の<sup>そうが</sup>相賀地区へ抜け、さらに西へ進み広瀬を経て、旧三芳村の府中へと達する経路が本道であったとされる(1)。

竹原は慶長15年成立の『里見分限帳』では864石余と、周辺の村の中では最大規模の村高を誇り、安定した穀倉地帯であった。

## 歴史的環境

明星山の城の城主として、伝承では、里見義弘の子にして義頼の弟薦野頼俊が伝わる。前掲分限帳によると、頼俊は、竹原に864石をはじめ合わせて2534石という知行高を持つ、御一門衆に列せられる人物である。滝川恒昭によれば、当地区は戦国期より薦野氏の支配下に置かれていた、とみてよいとされる(2)。

すなわち、里見氏の姻戚にあたる一族が支配していたことから、生産力の高さと相まって、里見領国として安定した基盤となる地域であったとみられる。

## 城の構造

春光寺の背後となる台地先端部のまとまった平場から、離れて東に位置する独立丘まで、東西650 m、南北380 mほどの広大な城域をもつ。後年、畑地となったため改変が激しく、往時の遺構は明確には残っていない。自然の要害性に頼った城郭であったのではないか。

春光寺の背後には、台地先端となって見通しのきく平場が広がる。ただし、土塁や堀などの人工的な造作は認められない。春光寺東側の台地のくびれた部分に施された垂直の切り通しは、後世、道路を通すために削ったものであろう。

また、東奥に位置する独立丘状の平場も、コンクリート舗装された道が途中まできており、虎口にあたる部分の改変が考えられる。台地東側は自然の谷が入り込んで、要害性も高く、この範囲まで城域とみてよい。かなり大規模な城域となる。もっとも、この独立丘は詰の城であって、平時は春光寺の周辺に居館を置いていたのではなかろうか。

## 城の性格

伝承上では、戦国末期まで使用されたことになるが、遺構面からみるとそれを裏付けてはいない。里見氏の姻戚となる薦野氏は、里見氏当主について、その当主の構えた城の城下に居住したため、本拠の城は大掛かりに改築することなしで終わったのではないだろうか。

広大な城域は、街道に面する城として、火急の際には兵力を駐屯できるということを考えてのことであろう。薦野頼俊がここを本拠としたときは、おもに春光寺周辺が使用されていたと考える。

## 註

- (1) 岡田晃司氏の教示による。
- (2) 前掲『『里見分限帳』研究の一試論』

## <千田城跡> 所在 館山市西長田

### 地理的環境

本城跡のある西長田区は館山平野の南部に位置し、汐入川の支流岡田川・長田川が開析した水田と小丘陵からなる。本城跡は、白浜より神余を経て館山市内に向かう街道のすぐ脇の、北側に伸びた細長い丘陵上に立地する。

この山を城山じょうやまと地元では呼んでおり、小字名で城の内しろがある。また、小名こなで大城口おおじょうぐちが、城跡西方に屋号で堀の内がそれぞれ残る。明治時代に城の内に統合された小字名として城の腰があるほか、屋号として残る堀の内も明治以前には小字で存在していた(1)。

### 歴史的環境

明治41年に刊行された齊藤夏之助（東湾）の著作『安房志』によれば、白浜城に拠った房総里見氏初代の里見義実が「西長田の堀之内に居館」をもったとされる。これをうけて大野太平は『房総里見氏の研究』において、千田城を義実の居城とした。そして、そののち二代成義は稲村城を築いたとする。

確かに白浜と館山を結ぶ街道を扼するかのよう立地する本城跡は、大野が想定した義実の城とするには都合がよいように思われるが、後に述べるように構造からみて戦国前期の城としてよいか疑問点が残る。

西長田は鎌倉円覚寺領であり(2)、弘安9(1286)年銘の梵鐘と武蔵国金沢称名寺（横浜市金沢区）の審海上人の密教法具を伝える小網寺（館山市出野尾）は、本城跡の南西約1kmの谷戸最奥部に位置している。また、丘陵をはさんで南へ4kmほどで神余氏の拠点に接している。こうして、中世前期からの開発が進んでいたことから、むしろ、堀の内の小字の存在は、汐入川上流に設けられた鎌倉と深いつながりをもつ中世前期の武士の開発拠点とみる方がよい。

### 城の構造

千田城跡とされる丘陵は、縄文時代や古墳時代の土器の散布地である千田遺跡となる。しかし、遺構面からは堀や土塁など、まったく城郭と認められるものはない。

たしかに丘陵頂部は台地状に平坦面が細長く広がり、ネックとなるくびれの部分もあるが、いっさい堀などの造作を加えた様子がうかがえない。また、頂部の平坦な丘陵は、南方へさらに続くものの、これを断ち切るような人工の施設が施されていないのである。これでは、南方から丘陵上を攻め寄せた敵に対し、防ぐことが困難と思われる。

本城跡のこうした特徴は、後世の改変によるものとは認められない。しかしながら、前述のように明治以前の小字に城の腰があることから、あえて城跡でないと否認することはできない。

### 城の性格

周辺地域は鎌倉時代の開発がうかがわれ、また鎌倉とのつながりが深いことから、本城跡は、鎌倉と関係をもつ在地武士による開発拠点としての堀の内（居館）にともなう詰め城であったと推測される。つまり、平時は居館に居住し、非常時になると裏山に柵列や逆茂木などを設け、籠って戦う場であったのではないか。城の腰の字名は、この状態がある期間存続したことによ



りつけられたか(3)。

問題は、安房里見氏がこの城を使用したか否かである。前述のごとく同氏の初期の拠点白浜と館山とを結ぶ街道に接する本城跡が、なんら関係ないとは言い切れない。しかし、義実が本城跡に拠って館山平野の支配を進めたとするには、構造面からみて無理であろう。すなわち、稲村城跡のような要害性にまったく乏しいのである。

あえていえば白浜と館山とのつなぎ、つまり街道を監視する程度だったのではないだろうか。

註

- (1) 『千葉県安房郡豊房村誌』 この著作の存在については岡田晃司氏の教示による。
- (2) 「関東管領上杉朝房奉書」(「円覚寺文書」『千葉縣史料 中世篇縣外文書』1966年)
- (3) 城の腰の地名は、下総国の例であるが、香取神宮にほど近い香取市山崎で文明年間の売券に認められる。

### <南条城跡> 所在 館山市南条

#### 地理的環境

汐入川中流右岸の丘陵上に位置する。館山市内と南房総市千倉町とを結ぶ街道が通り、これに沿って古茂口と千倉町大貫に中世城郭が存在している。館山城跡は西へ1.5kmほどの位置にあり、指呼の間にみることができる。

#### 歴史的環境

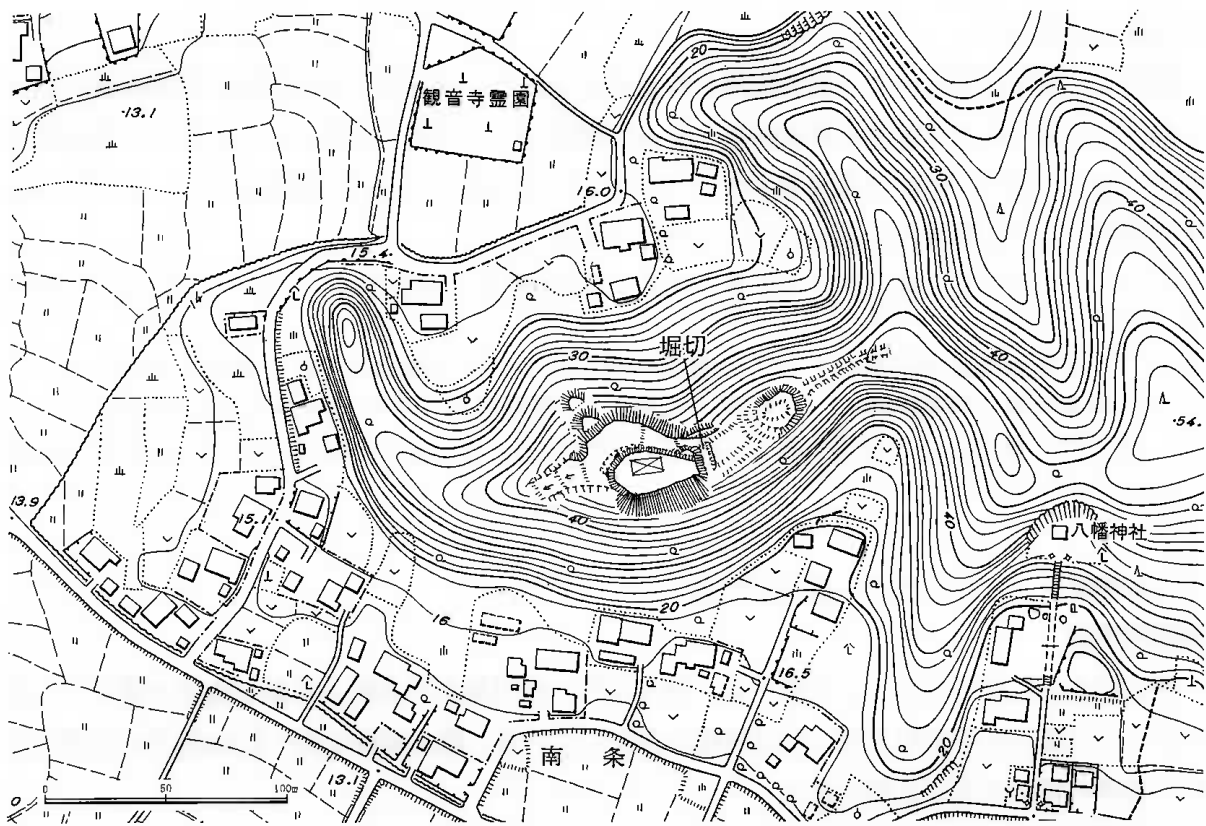
里見義豊の正室一溪院の父である烏山<sup>うやま</sup>時貞が城主とされ、別名烏山城とも称される。烏山氏は時明より時正・時貞と三代続いたが、天文の内乱によって義豊側についた時貞は討ち死にして滅び、義豊の正室は実家である南条の城に逃れ自害したという。その墓とされる姫塚が北方山中にあるとされる。烏山氏は里見氏当主の正室を出せるだけの家柄であったので、里見氏家臣団のなかでもある程度の地位を占めていたと考えられる。

その後、天正年間の正木憲時の乱によって小田喜正木氏は滅亡したが、里見義頼は次男をして時茂と名乗らせ、大膳亮の名跡を継がせた。そして、南条の城を与えたとされる。しかし、戦国末期の改築になるような構造は見当たらず、もし、二代目時茂が入部したとしても大きな改造はしていないと考えられる。

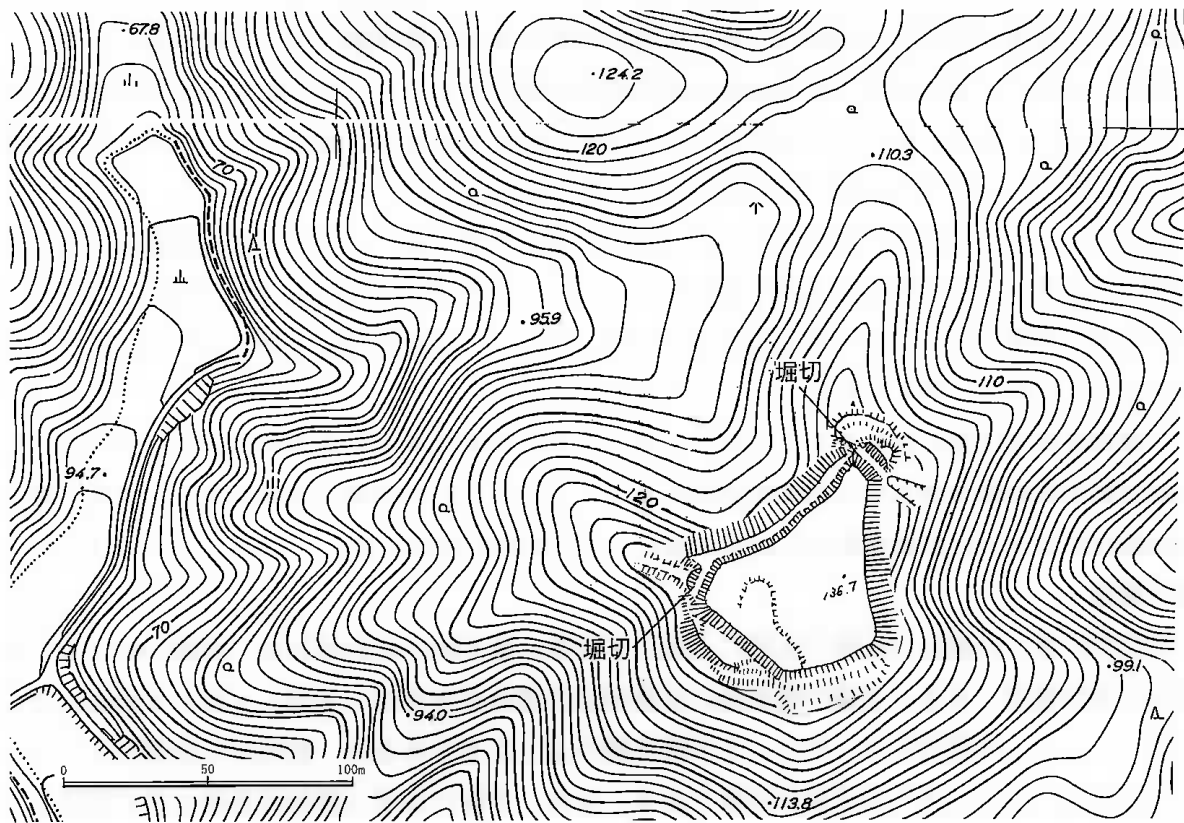
八幡神社の境内脇にはやぐらも存在し、また、汐入川をはさんだ南西500mの大戸地区には、中世の武士の居館と考えられる本館遺跡もある。こうした歴史的環境を考えると、南条一帯は長田保などととも中世前期から開発が進んでいたものと思われる。

#### 城の構造

居住性の乏しい細長い丘陵の先端に占地しており、基本的には長軸30m、短軸15mほどの小規模な単郭構造である。北側の腰曲輪には横堀状の窪みがあるが、全周しておらず横堀とはいえない。もっとも郭内にコンクリートの貯水槽のようなものがあり、戦時中に海軍の手によって改変がなされているので注意が必要である。なお、平時には現八幡神社東隣の谷戸部周辺に居館を営んでいたものであろう。



第15図 南条城跡縄張図 (作図：遠山成一氏)



第16図 洲宮城跡縄張図 (作図：遠山成一氏)

主郭の東端は鋭く削平され、垂直に近い切岸となって、浅い堀切と組み合わせて防御している。同様な切岸と浅い堀切の組合せは、主郭東の細尾根上にある57.3mの最高部にも施されている。このように垂直に近い切岸を造るのは、稲村城をはじめ里見氏系の城郭に多くみられる特徴である。

### 城の性格

伝承を信用すれば、稲村城と同時期に存在した城といえる。天正年間にも取りたてられている伝承もあるとはいえ、構造からみると、稲村城跡の方がしっかりと堀切や腰曲輪など手をいれてあり、時代的にはむしろ稲村城の方が後まで使われていたかのように受け取れる。

しかし、これは里見氏本城と一家臣の城という差で見べきである。基本的には、構造的にみて、伝承通り天文年間頃まで使用されていた里見氏家臣の本拠とできよう。

### <神余城跡> 所在 館山市神余

#### 地理的環境

千田城跡のある西長田から安房神社へ向かう街道の途中、布良周辺で太平洋に注ぐ巴川中流左岸に位置する。神余小学校のある谷戸部を囲うように馬蹄形状に延びた、丘陵の先端部に占地する。神余の集落は、巴川流域の狭い河谷平野部とそれに沿った街道周辺に展開していて、本城跡はほぼその中心にあたる。

城の直下を、館山白浜間を結ぶ街道が通り、街道を扼する城と位置付けられよう。また、現在、民家となる谷戸奥部を、居館として使用していた可能性が高い。

#### 歴史的環境

鎌倉時代からの由来をもつ神余氏は、国人領主安東氏、安西氏、東条氏などとともに、里見氏入部以前の安房地方を支配していた。当地を苗字の地とする。しかし、家臣の山下氏に滅ぼされ、一族の中で本拠を離れて越後の上杉氏の雑掌として活躍するものがいた。

なお、巴川上流に近い神余畑に、土砂取りで消滅してしまった相ノ沢殿井原館跡がある。鎌倉時代の神余氏の本拠は、むしろこちらを考えるべきであろうか。

#### 城の構造

巴川に向かって突出した舌状台地先端を掘り切り、平坦面を造り出している。先端は、現在墓地や住宅となるが、腰曲輪状の段となっている。台地基部を切る堀は浅く、切岸を造りだして防御とするものである。

郭は、祠への参道や炭焼きの跡が残り、旧状をうかがうことは難しい。郭北側についてみると、土塁を盛り上げたというよりは、掘りこんで平坦面を造り出している。戦国後期の城にみられるような、土塁囲みで空間を造り出した感はない。

#### 城の性格

構造的には、戦国後期には下らないと考えられる。白浜と館山を結ぶ街道を確保するという点から考えると、戦国時代初期、里見氏入部の頃機能していたとみたい。

## <洲宮城跡> 所在 館山市洲宮

### 地理的環境

館山市内上真倉から館山市布良へ向かう途中の、平砂浦に注ぐ洲宮川の最上流部に位置する。近年設置された館山運動公園の駐車場のすぐ傍の山頂に造られている。街道との関連がうかがわれるが、街道の傍らに造らず、やや奥まった位置にあることが解せない点である。

### 歴史的環境

地元ではこの城跡のある山を要害と呼んでおり、今回の調査(1)で初めて城跡として認知された。南西1.2km離れて里見氏の庇護した洲宮神社がある。根小屋集落に該当するような集落は、現在では見当たらない。神社周辺に展開する洲宮の集落とも離れており、集落と密接な関係はうかがえない。

在地領主による支配拠点の城郭という性格は認められず、白浜、布良方面を監視するための街道筋を見張る番所的なものであろうか。

### 城の構造

わりと広い郭取りをした単郭構造で、東側の支尾根と北側に延びる尾根(2)続きの2か所に土塁を設け堀切を入れただけの、単純な縄張りである。北の堀切から東の堀切にかけて腰曲輪が設けられている。このほかには、先端に向かう尾根筋にまとまった平坦面が認められるだけで、人工の施設は見当たらない。

堀切の規模についても、小規模な部類とはいえ明確に認められることから、稲村城の機能したのと同時期か、それ以前の使用が想定される。

### 城の性格

当地域には、戦国後期に城を築くような要因を求めることはできない。また、城の構造的にも小規模な堀や単純な縄張りという点からは、本城跡の使用年代は、里見氏が安房入部したころの戦国初期に求めても大過ないと思われる。

根小屋集落をとまなわなないことから、広い郭内に小屋掛けなどして、城兵が詰めていた街道の番所的な城ではなかったか。そして、里見氏領国として安房国が安定する頃には、当城は使用されなくなったと考えられる。

#### 註

- (1) 館山市教育委員会の岡田晃司氏の城跡の可能性の教示により、地元の方お二人とともに同行案内いただいた。
- (2) 北へ続く丘陵は、北東方向に向きをかえて標高158mのピークをむかえる。このため、本城跡から館山市街地への直視はできない。

## <船形城跡> 所在 館山市船形

### 地理的環境

館山平野北端、船形と富浦（南房総市）との市境となる標高60mほどの丘陵上に占地する。現在、海岸まで1kmほど離れてはいるが、中世当時、海岸線はもっと本城跡に迫っていたと推

定されている(1)。

城域からの眺望は素晴らしく、北には宮本城跡、南には館山城そして鏡が浦を一望のもとに臨むことができる。本城跡は海岸から奥まった宮本城と鏡が浦とを中継する位置にあり、富浦から館山平野へ入る入り口を扼する位置でもある。里見氏にとって、海陸の番所的役割を果たしていた可能性が高い。

### 歴史的環境

本城跡は、安西肥後守定勝の居城と伝えられる(2)。安西氏は里見氏入部以前から水軍を管轄していた在庁系武士団で、里見氏配下となってからも里見水軍の主たる構成員であった(3)。なお、近世初頭の成立である『里見分限帳』に載る、百人衆の頭役を務める安西中務は、滝川によれば高井(館山市)に所領の多くを持つことから、高井こそが由緒の地としている(4)。

船形の地名は、『安房志』によれば、船形背後の堂山が覆船の形をしていることからつけられたとされる。しかし、船方、つまり舟手(船の乗務員)とみることが可能であれば、安西氏の伝承も首肯できるものがある。本城をまさに海城(湊城)としてとらえることができよう。

### 城の構造

現在、宗教施設が建てられており、山上の遺構は大きく改変されている。わずかに、大房岬方向につながる尾根上に、平場を造り出し段差を設けた遺構と、西行寺背後の尾根を削り落して断ち切った遺構が残る(5)。

主郭とおぼしき標高59.4mの西側山頂部は、宗教施設建設にともない削平され、まとまった平場が造り出されている。しかし、これが往時も存在したかは不明である。標高46mの東側山頂部も、同様に削られている。

なお、居住性の高い平場は、双丘の間の空間であるが、施設が建ち改変が著しく旧状をうかがうことは難しい。

以上のように、年代を推定できる遺構は見当たらず、使用された年代を推し量ることは困難である。あえていえば、主郭北方に延びる支尾根の処理の甘い点と、尾根続きに明確な堀切を入れていないことから、戦国後期まで下る可能性は低いとみたい。

註

- (1) 前掲「房総里見氏の歴史における稲村城」所収の稲村城跡周辺図参照
- (2) 『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査Ⅱ―旧上総国・安房国―』(千葉県教育委員会、1996年)による。
- (3) 滝川恒昭氏によれば、安西中務の一族安西又助は『里見氏分限帳』で舟手頭を務めていることから、裏付けられるとする。前掲「『里見氏分限帳』研究の一試論」
- (4) 同前論文。これによると、高井に隣接する北条城跡(館山市北条)は、盛期が戦国期までは至らぬものの水運と関連の深い城郭とする。
- (5) ただし、城内側の尾根には明確な堀切状の切岸をもたず、平場を段々畑のように数段設けるだけである。

(遠山成一)



第17図 確認調査城跡分布図

## 2 里見氏城郭群のなかの稲村城跡

(1) はじめに

里見氏の城郭群を考えると、第一に時系列的な問題があがってくる。すなわち、昔から言われてきた白浜—千田—稲村—滝田・宮本—久留里—佐貫—岡本—館山という本拠の変遷である。

このうち、大野太平の唱えた千田城跡(1)については、近年の稲村城保存問題にかかわる里見氏研究の深化をうけ、否定されるにいたった。つまり、白浜城から稲村城に直接移ったという認識である。

稲村城に関して問題となるのは、義豊の本城として天文年間頃までは機能していたが、天文の内乱にともなう里見本宗家の交替によって、以後どうなったのか、という点である。これに関しては、稲村城の構造と本宗家交替以降の里見氏の政治動向からみて、使用されなかったと



いう一定の評価が与えられてきた。

では、稲村城周辺の城郭や義堯以降の本拠となった安房・上総の城郭の中で、稲村城はどのような位置付けされるであろうか。今回の調査によって得た知見をもとに検討を加えてみたい。

## (2) 稲村城跡周辺の城郭

稲村城周辺の城郭については、前項でいくつか主要な城郭を取り上げ検討した。ここで煩瑣を厭わず各城の性格を取り上げ、周辺各城からみた稲村城の位置づけをこころみたい。

まず、南条城跡(烏山城跡)は、義豊の正室の出た烏山氏三代の城と伝承される。そして、天文の内乱によって烏山氏は義豊とともに滅んだとされるが、これは遺構面からみても首肯できよう。たとえば堀切の規模において、稲村城跡のそれに大きく見劣りがする。これは、使用された年代差ではなく、当主の城と家臣の城という比較でみるべきであろう。

この点において、大井城跡は興味深い比較対象となる。基本的な構造は、地域小領主の城郭とみられるが、発達した腰曲輪や支尾根を堀切で切る処理の仕方は、稲村城跡と比べても勝るとも劣らない。さらに安房国には類例が少ない根小屋地名(2)をもつことから、稲村城よりも後々使われていたと考えられる。

とくに、里見領国の中でも、正木氏の影響力の強い千倉・丸山・鴨川地区といった安房東南部に接する大井城は、天正年間の正木憲時の乱では里見氏にとって防御線の一画を担った可能性が高く、この頃までの使用は十分考えられよう。

そう考えると、稲村城跡に根小屋地名が残らなかったことは注目されてよい。稲村城と同時代の天文年間の記録に登場する滝田城跡は、根小屋地名をもっている。しかし、これはのちの時代に根小屋がつくられた(3)と考えるべきであって、天文年間には滝田城の根小屋はいまだ形成されていなかったはずである。

続いては、稲村城の南西1kmと近接する山本城跡である。近世初頭には、里見氏の家臣山本清七の所領となっていた山本村に所在する。

構造的には、尾根を掘り切り、横矢かかりの虎口をもつという、戦国時代も後半の様相を見せる。しかし、50m×35mほどの小さな単郭の城である。戦国後期まで使われていたが、領国の中では家臣の持ち城として位置づけられるような小城郭であろう。

明星山の城は、大井城跡の北800mほど離れた、近世初頭には薦野頼俊の所領となっていた竹原に存在する。中世には、加茂からの街道が山を越えてこの竹原の地に出てきたということから、里見氏にとってみれば街道を扼する役割をもっていた。また、生産力も高く重要な位置づけが与えられ、それゆえ、里見氏の姻戚である薦野氏が支配していたものであろう。

しかし、この城郭の規模は非常に大きく、春光寺の裏から東へ650mの範囲に広がるとされる(4)。土塁や堀切といった明確な城にともなう遺構は見当たらないものの、要害性あって平坦面を広く取れる地形を生かした、古いタイプの城郭と認められる。里見氏領国の中心にこれだけ大規模な城郭を営む必要性は乏しく、それゆえ発達した縄張り構造をとらずに終始したのであろう。薦野頼俊の段階に使用されていたとすると、春光寺の裏の先端部周辺がふさわしい。

### (3) 小結

稲村城跡周辺の城郭のなかで、稲村城に匹敵するような縄張り構造をもつ城郭は存在しないことが確認された。唯一、直線連郭構造をとり、堀切、土橋をもつ大井城跡が、比較的近い存在であるが、稲村城跡の上塁や櫓台に比べると見劣りする。

この意味では、稲村城が機能していた時期に、一支城として大井城も機能した可能性はある。しかし、その後、大井城は里見氏領国の中心部東端に位置することから、在番衆などの詰める城郭として機能し、その間、腰曲輪や支尾根の処理などが施されて現状の姿になったと考えた。稲村城の存続期間を考えるうえで、山本城跡の存在が象徴的といえる。つまり、横矢掛りの虎口をもっており、稲村城の虎口に比べて発達していることから、後の段階の城郭とみなせる。しかし、規模があまりにも小さく、その意味では領国のなかの一支城というよりは、家臣の維持する小城郭にすぎない。

これらを考慮すると、稲村城はある時期里見氏の本拠として使用されていたことは、周辺城郭群からみても首肯できるものである。残された問題点は、天文の内乱以降、稲村城が里見氏の城として使用されていたか否かである。この点については、次項で検討する義堯以降の当主の城との比較に待たねばならない。

註

- (1) 千田城跡は、前項にて検討したように、戦国期以前の城である可能性が高い。
- (2) 滝田城跡、館山城跡、江見根古屋城跡に残る。
- (3) 東国において、史料上に根小屋という言葉が登場するのが、もっとも早くて永正期である。永禄期になると頻出するようになるが、東国において根小屋が集中して登場するのが、この頃とされる(市村高男「中世城郭史研究の一視点」『中世東国史の研究』1988年)。根小屋は「戦国期的な権力・軍事編成、それに対応した戦国期城郭の形成の動きと軌を一にして成立した」(同前論文)とされ、安房においても同様の傾向と思われる。滝田城の場合は、里見氏の上総進出後、平群街道におけるつなぎの城として機能したであろう永禄頃には形成されたと考える。
- (4) 『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ 一旧上総・安房国地域一』(千葉県教育委員会、1996年)所収の「城館跡一覧表」による。

(遠山成一)

## 3 稲村城以降の里見氏当主の城

### (1) はじめに

天文の内乱により義豊を滅ぼした義堯は、本拠となる城郭を稲村城から移した。滝田城(南房総市三芳地区)・宮本城(南房総市富浦町)など(1)にいたことが史料から明らかで、その後、天文10年代の正木氏による小田喜、勝浦進出などと同じ頃(2)と思われるが、上総久留里城(君津市)に本拠を構えた。そして、永禄3(1560)年には、上総侵攻を図る北条氏に久留里城を包囲され、籠城戦を余儀なくされている。

子息義弘は佐貫城(富津市)にいて、隠居義堯と両頭政治を行った。この間、義弘は第二次国府台合戦での敗北、上総三船山合戦での勝利などを経て、永禄末から元龜年間にかけて上総から下総まで進出している。

義弘の子義頼は、岡本城(南房総市富浦町)で独立した勢力を保っていたが、天正6(1578)

年の義弘の死後、事実上後継者の位置にいた梅王丸と対立抗争を行った（天正の内乱）。天正8年には義頼は梅王丸側を制圧し、佐貫城より追い、里見氏の当主の座についた。岡本城は、これにより里見氏の当主の城として機能することになる。

その後、義康は、父義頼の死の前年（天正14年）当主の座を継ぐが、居城を館山城とした。

以上のように、里見氏当主代々にわたり、本拠を変えている。もちろん、その背景には、里見氏権力に内在する問題点(3)と時々の政治動向が絡んでいる。次に項を変えて、それぞれの本城と稲村城との比較をし、もって稲村城の本城としての特質を考えてみたい。

## （2）滝田城跡と宮本城跡

滝田城跡は、天文の内乱時に義豊側であった一色九郎の持城で、義堯軍により天文2年9月24日に落城させられている。一色氏は足利一門で、里見氏と同格の氏族である。その本城として、里見氏稲村城と並んで安房統一に一定の役割を果たしたであろうことが推測される。

義豊を滅ぼした後、義堯が一時「部久里郡」にいたとされることから、滝田城によっていたと考えられている。しかし、大津、すなわち宮本城にいた(4)ことも確認でき、さらに最新の成果として義堯が岡本城にもいた(5)ことが判明した。滝田、宮本、岡本の各城は、地理的にほぼ横一列状に並ぶということがすぐさま想起される。このことは、稲村城に義堯が入部しなかった可能性を強く示唆するものである。その理由は、結果的に久留里を拠点に上総進出を果たした義堯であるが、元来の勢力基盤は安房上総国境の東京湾沿岸にあった(6)と思われ、前期里見氏の本拠稲村城には入部できなかったのではないかと。東西一列にこれらの本拠が並ぶのは、決して偶然の産物ではなからう。

館山平野を中心とする一帯は、本宗家を篡奪した義堯の系統の里見（後期里見氏）にとっては、金城湯池とはいかなかったにちがいない。そのことが、滝田―宮本―岡本のラインを生み出したのである。

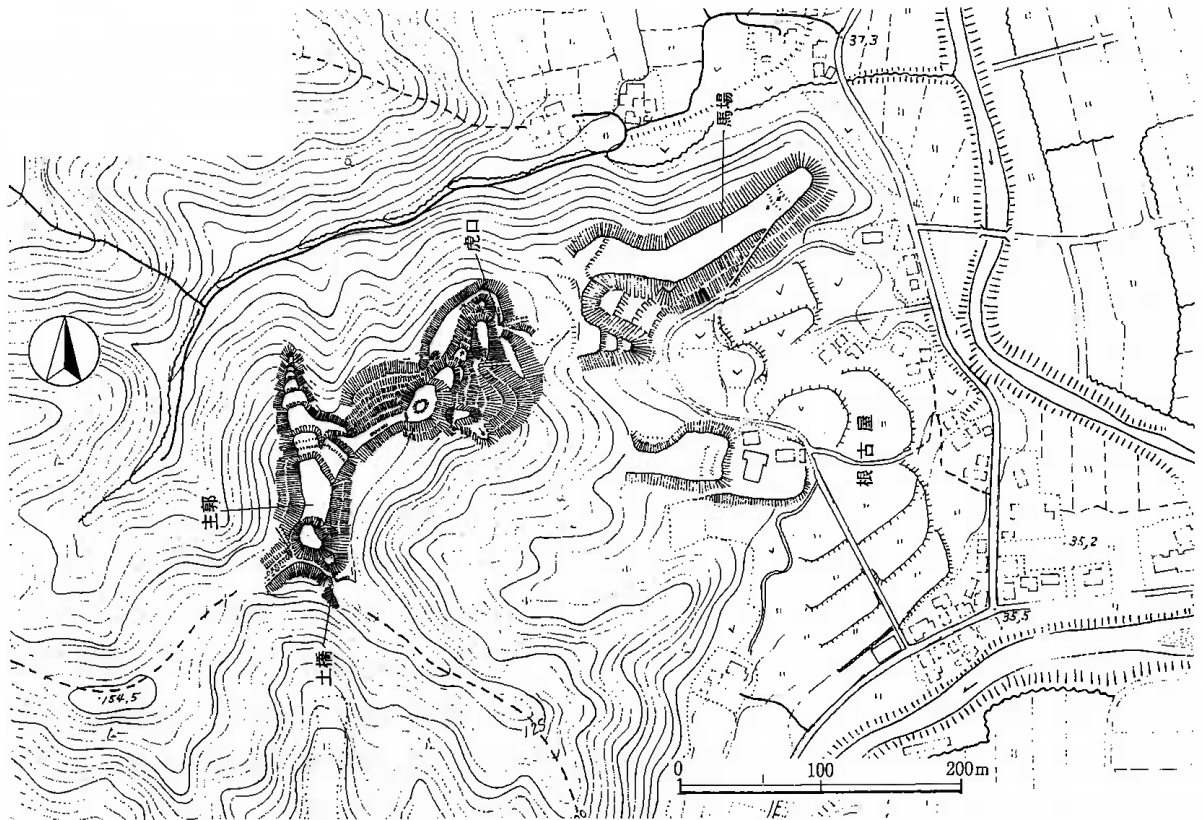
城の構造からみて、堀や土橋などのパーツ、および平坦面（郭取り）の広さでは、滝田城は稲村城と大差ない。しかし、根小屋地名をもつことから、前述のごとく後々、平群街道を抑える要衝として再度取立られたものと考えられる。

宮本城は、主郭部まわりの構造は比較的単純な縄張りをもつが、滝田城のある東方にのびる丘陵から派生する支尾根に、連続堀切や二連の豎堀など安房地区では類例の少ない技巧を施しており、永禄以降の使用がうかがわれる。防御の意識が北に向かっていることが指摘できる。やはり、北条氏の脅威を考えるべきである。以上のように、構造的にみても、稲村城よりは後まで使用されていたことがわかる。

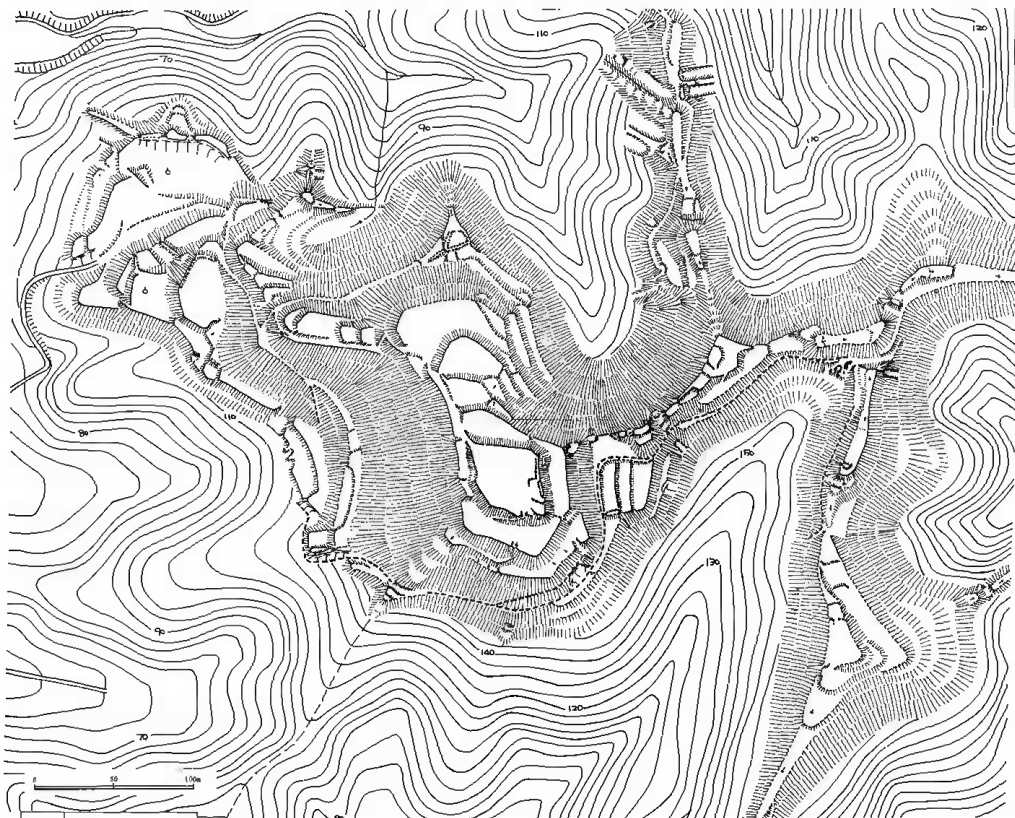
## （3）久留里城跡・佐貫城跡

久留里城跡へ義堯が入部したのは、正木時茂・時忠・時義の三兄弟がそれぞれ上総の旧武田氏領国であった小田喜・勝浦・一宮に入部した時期にほぼ重なるとみられる。

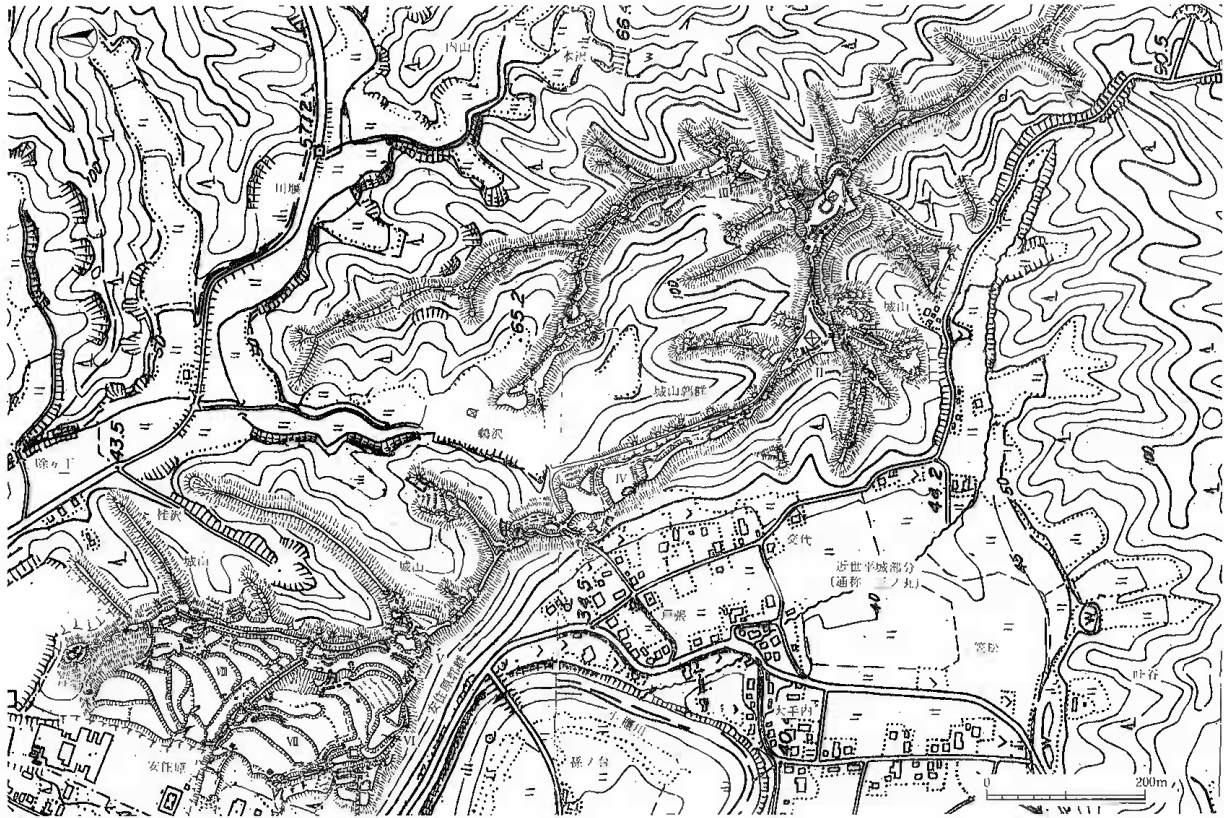
久留里城は東西1.1kmにも及び、近世に使用された丘陵下の平地にある三の丸、丘陵上の郭群、そして伝古久留里城の三つに大別される(7)。丘陵上の遺構は、主として里見氏時代のもの



第18図 滝田城跡縄張図 作図：遠山成一氏 『千葉城郭研究』第6号より



第19図 宮本城跡縄張図 作図：松岡進氏 『中世城館跡調査報告書』(天津小湊町)より



第20図 久留里城跡概念図 (作図：松本勝氏)



第21図 佐貫城跡概念図 (作図：松本勝氏)

と考えられ、尾根の各所に大きな堀切や豎堀などを設け、永禄3年の北条氏による籠城戦を持ちこたえただけの規模をもつ。第二次国府台合戦の後、一時、北条氏によって奪取されているが、永禄10年の三船山合戦を勝利した義弘は奪い返しており、北条氏の手により大規模な改修が行われた可能性は低いとみる。

稲村城と比して、丘陵の比高など立地条件の差はあるものの、堀切や豎堀などの規模がまったく異なっている。敵勢力による直接の脅威にさらされた久留里城が、永禄年間初頭に大きく変化を遂げたことは想像に難くない。安定した里見氏領国の基盤である館山平野にあった稲村城とは、この点において大きく条件が異なる。

佐貫城跡も丘陵と谷戸部を利用した、1 km×750 mほどの大規模な城域(8)を誇る。こちらも近世城郭として機能したが、むしろ近世に入ってからでは中世城郭時代の城域を全部使い切っていないのではないか。要所に堀切を入れた尾根の両法面を屏風のように削り立て、腰曲輪を設けて防御する。垂直に切岸を造る方法は里見氏の城郭によく見られる手法である。

一時、北条氏によって接収をうけたものの、上総から下総まで進出した義弘の本拠としてあった。天正6年の義弘の死後は、後継者と目された梅王丸がここに拠り、安房に勢力を有した岡本城の義頼と対立した。結局、梅王丸は義頼に制圧され、佐貫城を出て出家することで延命された。天正6年から8年にかけてのことである。この時、佐貫城をめぐる直接の戦いがあったか否かは不明であるが、緊張状態が高まる中で城が機能していたことは確かである。

#### (4) まとめ

岡本城については別途報告書も刊行されており、近世に入って当主の城となった館山城もここでは考察を省く。以上のように、稲村城以降、後期里見氏が本拠にした城郭は、いずれも里見氏の歴史のなかで緊張状態に置かれていることから、里見氏によって大規模な改修がなされたことは明白である。この点において、稲村城は大規模な改修が行われねばならない理由は存在せず、天文年間初期の様態を保ってきたものと考えられる。

あえて付言すれば、前記里見氏の本拠として、稲村城は後の時代まで意識されていたのではないか。前回の報告書で、岡田晃司は近世文書の読み込みから、「慶長期の段階で里見氏によって稲村城の維持ないし管理が行われていたことを示唆する」とした。もちろん、城の維持は行われた可能性は否定できないが、あくまでも「維持」「管理」であって、里見氏一門などの個人の城主化ではないことは言うまでもない。

前項で述べたように、明星山の城や山本城跡が、特定個人の城であった可能性が高いことと好対照といえる。

#### 註

- (1) 滝田城は『快元僧都記』の天文6年6月条に載る「房州部久里郡里見義孝」から、義堯の拠った城とみられている。また、宮本城は「安房妙本寺文書」の義堯の書状に「大津より」という端裏書があることから、大津=宮本城と考えられている。なお、岡本城にもいたことが、今回、滝川恒昭氏の調べで明らかになったという。詳しくは、本報告書とほぼ同時に刊行される「岡本城跡調査報告書2」を参照されたい。
- (2) 滝川恒昭氏の教示による。



- (3) 佐藤博信「関東足利氏と房総里見氏」(『中世房総の権力と社会』1991年 高科書店 後に『中世東国政治史論』2006年、塙書房に所収)によれば、「里見氏の権力は複数の独立主体を擁する権力形態を特徴としており、統一した知行制を確立しえなかった」と評価される。歴代当主の本城が移っていくことは、このことが大きく影響していよう。
- (4) 註(1)の『快元僧都記』による。
- (5) 註(1)の滝川の調査による。
- (6) 佐藤氏は、義豊に稲村城において誅殺された実堯の居所が上総金谷城(富津市)であったと考えている(前掲書「第二部 第一章 前期里見氏の歴史的位罫」初出は同題で『里見氏 稲村城をみつめて第3集』1998年)。
- (7) 松本勝「久留里城跡」(『すべてがわかる戦国大名里見氏の歴史』国書刊行会、2000年)。中井正代「久留里城跡」(『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告Ⅱ』1996年)
- (8) 同前註

(遠山成一)

#### 4 稲村城跡の範囲と年代

稲村城跡の構造については、すでにⅡ章1節で述べた通りであり、そこでは広義の城郭として捉えている。

このため、その地形とそこに遺された城郭遺構から城跡の範囲を考えた場合、主郭部の城山地区と、その南側に広がる丘陵と4本の舌状小丘陵で構成される中郭部、さらに外郭部としたこれらを包み込むように鶴翼状に取り巻く西側・南側・東側の丘陵の地域を各々どのように理解するかという点がカギとなる。

特に、この稲村城跡の場合は主郭部である城山地区が、館山平野を眼下に置く場所に地山の削平と盛土による大土木工事を行って主郭を作り出し、その主郭部を中心に城郭遺構が集中しているのに対して、中郭部・外郭部は城郭遺構の面からは、主郭部に比して極端ともいえる程に格差があることから、これまでは城郭域としての認知度が低かったことは否めない。しかし、平成19年度に行われた発掘調査によって、時期を確定出来る出土遺物は無かったものの、中郭部において明らかに城郭に関わる造作が施されていることが明確となった。さらに、中郭部の他の地域や外郭部Ⅵ郭においても、現地調査によって、所々に城郭遺構と見なせる個所があることが再認識された(Ⅱ章1節)。一方、その反面では、中郭部と外郭部では、自然地形を多く残していることから、稲村城跡におけるこのような状況は、この城郭が完成された城郭ではなく、ある時点で造作を途絶したからではないのか、そして、それは天文の内乱(1533~1534年)によるのではないかとする鋭い指摘がなされた。

このような点を踏まえて、主郭部についてみると、これまではその南側に「水往来」と呼ばれる丘陵を掘削した道が所在することから、この「水往来」が主郭部と中郭部を分ける「堀切」であり、また登城路ともみられてきた。しかし、平成19年度の調査によって、この「水往来」は稲村城の築城に伴うものではなく、その後に造成されたことが判明したことから、「水往来」を伴わない姿で主郭部と中郭部についてみると、これまでの理解とは違った稲村城の姿が浮かび上がってくる。

すなわち、その第一は、主郭への登城路の問題である。中郭部と主郭部を結ぶ道は、唯一尾

根(4)であるが、これまでと同様にそこを通過して主郭へ至る登城路を考えた場合、丘陵下からの道は、中郭部の南側に位置するⅢ郭とした小丘陵と西南側のⅤ郭とした小丘陵を通る道しか存在しないことから、この尾根(4)を通る道が通常の登城路となることはまずあり得ないことがわかる。一方、主郭部における登城路についてみると、今回の再踏査によって、主郭西側の丘陵下の「要害」地区からの道と東側の尾根(2)(3)の間の谷から登る道が明らかとなった。このうち西側の道では、関東大震災によって一部崩落がみられるものの主郭の西側丘陵下の「要害」の地から帯曲輪の下段を通り斜面を登る往時の道が新たに確認され、平成19年度の調査において確認された帯曲輪を通る道は関東大震災によって崩落した登城路に替る新道であることが判明した。これにより、西側からの登城路は今回認められた道と、昭和59年の報告書で紹介されている「要害」から尾根(5)を登り帯曲輪の南へと接続する道となる。これらの方向からの道は、すべて南西部の虎口から主郭へと進入するようにつくられていることから、いずれにせよ主郭西側の「要害」地区からの登城路はこれらの道となることは間違いない。また、東側からの登城路は尾根(2)と(3)の谷から尾根(1)へ登り、その南側斜面を通り主郭東北部の堀切(G)へ至る道である。平成19年度の調査で主郭の東北部の土塁北端に搦め手口と指摘された虎口が確認されたが、恐らくこの道は、堀切(G)から搦め手口を通り主郭へと通ずる道ではないかと考えられる。これらの道からみると、主郭への登城路はすべて主郭部にあることが判明する。

第二の問題は主郭部と中郭部間の尾根(4)である。この尾根(4)は全体的に上面の幅が狭く馬の背状の尾根であるが、中郭部から北方の主郭部へと進入して直ぐにネック状の細尾根となる。そして、中程の地点(L)は東西に小さな谷が入り、削り落としもみられ幅が極端に狭くなるとともに北側及び南側の尾根面よりも2 m程低くなって、自然の堀切と土橋を兼ねる形状を示している。そこから更に直進して主郭へ向かうと、主郭への斜面に堀切(F)があり、主郭への取り付きを阻んでいる。この道は檜台の西側下を通過して回り込むように虎口(Q)へ向っているが、檜台下に一段高い腰曲輪が突き出し、その道で進入する者の右側から攻撃出来るように工夫している。

このような主郭部と中郭部を結ぶ尾根(4)をみると、尾根全体が主郭部と中郭部を結ぶ上橋とも言えるが、その中程の地点(L)を境にして、北側の主郭部と南側の中郭部とは、そこに施された城郭遺構に格段の差があることは明らかである。この点からすると、地点(L)から北側を主郭部、南側を中郭部として把握することが妥当ではないかと考えられる。

そして、主郭への登城路と主郭部と中郭部・外郭部との間にみられる城郭遺構の格差、更に主郭部東北部の尾根(1)の先端部にみられる「やぐら」や石造物などからみると、稲村城は、まず最初に主郭を中心とする単郭構造の城が築造され機能していたと理解することが可能であり、蓋然性が高いと考えられる。そして、その後、主郭部から東へ伸びる尾根(1)の先端部や南側の中郭部、さらには外郭部Ⅵ郭へと手を入れ、規模を拡大し整備しつつあった時点で、遠山氏が指摘されたように、天文の内乱(1533～1534年)によって造作が途絶し、現在に残る中途半端とも言える城郭遺構となったものと理解すべきではないだろうか。このように考えると、主

郭部のなかで、東側の尾根(1)に手の込んだ城郭遺構が施されているのに対して、何ゆえ、中郭部へと続く尾根(4)とそこから続く南側の中郭部にほとんど防御施設が造作されていないのかというこれまでの疑問に説明がつくのではないかと思われる。その点においては、中郭部・外郭部はまさに未完の城郭といえるものである。(天野努)

## 5 稲村城跡と里見氏

稲村城跡は現在までのところ、その年代や存続時期が確定出来る出土遺物はないが、今回の調査で新たに文献史料が掘り起こされ(『北条五代記』)、三代(あるいは四代)里見義豊の居城であったとする伝承が、それによって裏付けられたことは重要な発見であった。

この点については、Ⅲ章1節で滝川氏によって詳細に記されているが、そこでは稲村城は、①稲村という在所(地名)に築かれたことからくる名称であること、②里見義豊によって新たに築かれたこと、③城主は里見義豊だったこと、④そのことから義豊は在所名で「稲村殿」とも称されていたことなどが読み取られている。

この『北条五代記』は、江戸時代初期の元和年間頃(1615～1524年)の成立とみられており、里見氏最後の当主となった忠義の時代とほぼ同時代の史料であることから、どんなに少なく見積もったとしても、本稲村城跡がこの『北条五代記』に記された①稲村城であり、③義豊の居城であったことは疑う余地もないだろう。この点①については、稲村城跡周辺の城跡や里見氏が本城とした城跡との比較等(Ⅳ章1～3節)からみても明らかであり、③についても、それ故にこそ、天文の内乱によって中郭部や外郭部にみられる中途半端といえる城郭遺構が現在に残ることとなったことを如実に示すものである。②の義豊によって新たに築かれた城であるという点については、これまでみてきたように稲村城跡の構造からみる限りでは、主郭部とその南側へと広がる中郭部・外郭部にみられる城郭遺構との格差は、築城当時からそのような構想のもとに縄張りされ、造作されてきたものかどうか、そう簡単に説明のつく問題ではない。また、一方文献史料の面からいえば、『北条五代記』以前で、より稲村城の時代に近い『鎌倉大草紙』に記された初代義実の「十村の城」(稲村の城)との関係が問題となる。すでに述べたように(Ⅳ章4節)、稲村城跡の主郭部の当初の構造を単郭構造の城郭とみれば、義実の「十村の城」とする見解もあながち無理な話ではない。義実の代から城が築かれ、義豊の時代に整備され、拡大されていった可能性も大いにあり得るのではないかと考えられる。

里見氏については、天文の内乱(1533～1534年)によって本宗家が交替したため、初代義実から三代義豊までの前期里見氏に係る史料がほとんど無いのが現状である。しかし、近年の研究の進展により、初代義実や三代義豊の実像が少しずつではあるが解明されてきており、その点については岡田氏によるⅠ章4節に詳しい。

その中で稲村城主であった義豊については、『快元僧都記』により里見水軍を率いて東京湾を渡り鎌倉へと攻め入っていることが知られているが、その人物像については、次のようにこれまでとは全く違った姿が判明している。すなわち、「大永4(1524)年頃に没した鎌倉の禅僧玉隠

英瑠は義豊に法名と雅号を与えて、孔孟の学問を学び孫呉の兵法を伝え、和歌や百家の書にも通じる文武兼備の佳公子と讃えた記録を残して、房州の賢使君と称した」(I章4節)といわれる。

一方、天文の内乱の片方の当事者として、北条氏の援軍を得て義豊を破り、後期里見氏の初代で里見氏としては4代当主となった里見義堯は、これに勝るとも劣らぬ傑物であった。この義堯については、川名登『南総の豪雄—里見義堯』に詳しいが、一代にして安房から上総半国までを領域としたまさに「房総の豪雄」である。天文の内乱から3年程の間は、北条氏綱と手を結んでいたもののその後は手切れし、以後40年に及び対立を続けた。その間、破れたとはいえ世にいう国府台合戦を戦い、上杉謙信と結んで北条氏と攻防を繰り返すなか、久留里城を居城として上総支配を固め、その子義弘とともに戦国大名として里見氏を発展させている。

5代義弘は佐貫城を居城として北条氏と伍して戦い、上杉謙信が北条氏と同盟すると武田信玄と結んで、独自の遠交近攻を行い北条氏に対抗したが、天正5(1577)年に北条氏と和睦する。

義弘の子6代義頼は岡本城に居住し、義堯から安房支配を任されたが、義堯の死後義弘と対立する。義弘没後、安房分国を保持し、義弘後継者の梅王丸を捕えて西上総を領有し、続けて東上総の正木憲時を滅ぼして上総一円支配を成功させている。また、北条氏との和睦を継承させたまま、佐竹・武田・上杉などの反北条勢力とも交渉を続け、各勢力と和平外交を展開し、天下人となった豊臣秀吉とも交渉をはじめている。

7代義康(義頼の子)は岡本城から館山城へと本城を移し、豊臣秀吉の小田原攻めにも参加するが、惣無事令違反によって上総を没収され安房一国の領主となる。以後秀吉の臣下として伏見に屋敷を構え、朝鮮出兵には九州名護屋まで出陣している。関が原の戦いの際には徳川方として宇都宮へ出陣し、恩賞として鹿島三万石をうけ十二万石の大名となる。

8代忠義は、父義康の死後10歳で家督を相続し、館山城を居城とする。二代將軍秀忠の御前で元服し、一字を請けて忠義と名乗る。幕閣大久保忠隣の子孫を室に迎えたが、忠隣に連座して改易。伯耆国倉吉へ配流され、29歳で病死する。

以上、里見氏について概観したが、関東の地にあつて安房に基礎を置きながら最大領域上総半国を領有するに及んで名を馳せた戦国大名里見氏が歴史に登場するに際して、その地歩を築いた城が稲村城であったことはここに申すまでもない。稲村城跡は天文の内乱によって、歴史の舞台から消えていった城とはいえ、里見氏の発展の礎となった本城として今後もその重要性は増すことはあつても減じることは無いだろう。

なお、里見氏最後の当主となった8代忠義は、改易後不遇のうちに若くして亡くなるが、その死に際しては、仕えていた家臣8人が殉死したと伝えられている。そのことが、江戸の人々に伝えられていたのか、忠義の死後約200年を経て曲亭馬琴による『南総里見八犬伝』が出版され、広く世に流布されることとなり、現代へと至っている。そこに記された内容は史実では無いとはいえ、里見氏を世に知らしめすのに十分な役割を果たしていることもまた事実である。

(天野努)

図版 1



稲村城跡主郭



稲村城跡主郭土塁



稲村城跡虎口





稲村城跡堀切 G (東側)

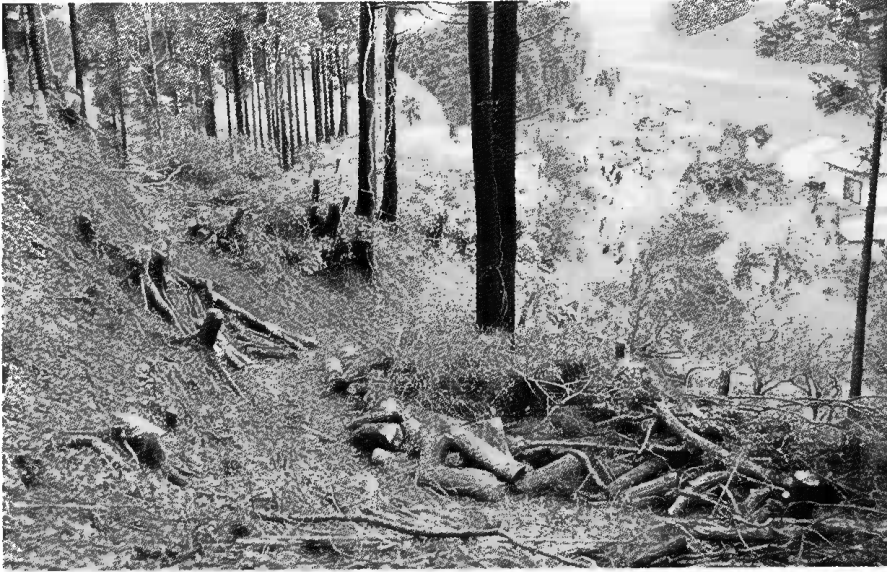


稲村城跡堀切 F (南側)



稲村城跡堀切 H 及び  
土橋





東側登城路と尾根(2)



尾根(4)地点 L



稲村城跡東側切岸



山本城跡



大井城跡



大井城跡腰曲輪調査



明星山城跡



千田城跡



南条城跡



神余城跡



洲宮城跡



船形城跡





錦絵「大日本六十余州之内安房／里見の姫君伏姫」  
(館山市立博物館蔵)

## 館山市稲村城跡調査報告書 Ⅱ

発行日／平成22年3月25日

編集・発行／館山市教育委員会  
千葉県館山市北条1145-1

印刷／有限会社クォーク

